

早期教育について

長尾 みゆき 村上 昌美 元木 順子

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

元来、「子どもは遊びの中で育つ」と言われているように、子どもは遊びの中で様々な事を学び、遊びと並行して所謂「習い事」を幼少期に経験することで社会性や自主性、知能・知識を身に付けるものであった。そして、それは子ども自身が習い事に興味を示したり、大人が子どもに社会性を身に付けさせる為であり、現在、大人となった私達はそれを懐かしい経験として有しているはずである。しかしながら、近年では「遊びや習い事」の文化から「親が率先して行う早期教育」へと状況が変化している現状である。このような変化について、「時代の変化」の一言で片づけることは簡単なことであるが、この変化が子ども達にどのような影響を与えるかについて、大人として真剣に考える必要があるのではないだろうか。そこで、本研究では早期教育の歴史や現状を明らかにしていくと同時に、どのような利点や問題点があるのかについて、また、今日において早期教育が求められる理由や今後の課題について日本と世界を比較しながら考察していくことにする。

1 章 早期教育とは

最近、受験戦争の低年齢化に伴い、テレビや書店等で幼児を対象にした幼児教室や早期教育を謳った広告等を目にするようになってきている。早期教育とは、脳が柔軟なうちに子どもの知的好奇心を促進して、高い吸収力や順応能力を持つ幼い間に教育を開始することで脳の活性化を高め、優秀な人間を育てるという理念に基づいて行われる教育のことである。では、具体的にどのような教育が行われているのであろうか。そこで、この章ではこれまで行われてきた早期教育の歴史や実態、および、世界における早期教育の位置づけについて詳しく述べていく。

1.1 節 早期教育の歴史

早期教育は江戸時代（1603～1868）、またそれ以前にも存在していたと言われている。当時は教育者でもある親自身が手ほどきを行い、親戚や知人のもとに奉公に出して、将来就くであろう職業に関わる教養や訓練、または、躰として幼少より学問を修めさせていた。それが明治時代（1868～1912）になると年齢を基本に学年制が確立することにより、義務教育機関における早期教育は一端終焉を迎えた。しかし、1970年代に井深大氏の『幼稚園では遅すぎる』という本が火付け役となり「第一次早期教育ブーム」が始まることとなった。井深氏はその書籍の中で、大脳生理学に基づく「どの子も、0歳児からの育て方ひとつで能力を伸ばしていける」という早期教育の勧めを主張した。

「第一次早期教育ブーム」は高度経済成長の後押しを受け、主に人材育成や才能教育といった教育を推進したが、1980年から実施されたゆとり教育によって「第一次早期教育ブーム」はほどなく10年で幕を閉じることとなった。

1990年代になると少子化傾向に拍車がかかり、出産率が1.5人まで減少した。そして、子どもの数の激減を予測した教育産業が幼児の教育対象年齢を下げたことが起因となり、中高で受験がないエスカレータ式の私立幼稚園・小学校の人氣が高まった結果、その受験テクニックを習得できる早期教育に関心が再び集まることになった。これが「第二次早期教育ブーム」の先駆けであり、1990年代に再び幕を開けた早期教育は現在も続いているのである。

1.2 節 日本の早期教育

日本では早期教育と言うと主に「超早期教育」と「幼児・就学前教育」の二つを指す事が多い。超早期教育とは、子どもが胎児期から乳児期の頃に主に脳に刺激を与えるような活動(例：国語・外国語の音声、良い音楽を聞かせる等)を通じて行う教育のことである。また、幼児期・就学前教育とは、小学校に就学する前の幼児に対して文字の読み書きや計算、外国語等の教育を施すことである。子どもにとって、親による絵本の読み聞かせや遊びも教育であるが、ここで言う幼児期・就学前教育は体験認知型（日常生活を通して身に付く概念）ではなく、パターン認知型（市販の教材や幼児教室などで獲得した知識）のことを指している。そして、教育の内容については前述の幼児・就学前教育と同様に、主に小学校入学前の先取りの教育を行う「知育重視型」、ピアノやバイオリン等の音楽、絵画等の教育が主に例として挙げられる「芸術志向型」、そして、バレエや水泳、そろばん等の教室に幼児期から通わせる「習い事型」の三つに分類される。

近年では子どもを乳児期から、または、小学校の頃から英語環境に浸らせる「早期英語教育」を行う家庭や学校も増えてきており、その為の教材(CD、ビデオなど)が多く宣伝され、更に、文部科学省がパソコンでの教育を推進したことにより、パソコンを使った乳幼児向けの教材も販売されている。また、習い事型の教育における幼児の習い事についてはスポーツ関係が多く、体育教室やリトミック、更にはサッカー等を教える施設も増えてきた。

1.3 節 世界の早期教育

現在、世界の非英語圏全域で義務教育としての英語教育の開始年齢が前倒しされる傾向にあり、どの国の保護者もそれよりもさらに早くから子どもに英語教育を受けさせようとしている。例えば、英語力の有無がそのまま収入のバロメーターとなる韓国では、胎教は当然のこと、英語を話すベビーシッターを雇ったり、わざわざ母親と子どもだけがアメリカに移り住んだりする等、非常に英語教育に熱狂している。更に、幼児対象の「英語学院」が新規開設されて多くの未就学児が通い始める等、幼稚園で小学校の英語授業内容を上回る水準の英語授業が開始される現状となっている。次に、ヨーロッパに目を向けてみると、フランスでは日本の幼稚園よりも早い2歳から「母親学校」と呼ばれる学校に通い始める。そこでは、物や形の絵柄を見分けることから始まり、次第に文字の読み書き計算へと段階を踏んで進んでいく。また、イギリスでは無償の就学前教育が行われており、2～4歳向けの保育園、4～7歳向けの幼稚園に併設された保育学級があり、この段階からしっかりと教科教育が始まるのである。

一方、宗教が影響することにより早期教育に繋がっている国もある。ユダヤ社会のイスラエルでは、これまで学術・芸術のあらゆる領域で優れた先人を生み出してきたという自負がある為、幼児期から熱心に教育を行っている。元々、ユダヤの子ども達はユダヤの律法や宗教について長い時間と労力をかけて学ぶ必要があり、その教育を担っていたのは近親の年長者等であったという伝統から、親が子どもに勉強を教える為の補助教材が豊富に開発されているのがイスラエルの特徴である。それを用いて各家庭で幼児教育が行われていることから、個々の家庭の持つ教育能力がとても高い為、イスラエルが世界で最も教育熱心な国であると言われているのである。

2 章 早期教育の利点

幼児は胎児の時から既に様々な能力を備えており、誕生後に驚くほどの速さで脳が発達する為、多くのものを吸収し易い時期と言われている。よって、生まれて間もない時期からリトミックやスイミング等の習い事を始めることは、「脳を鍛える」「脳の発達を促進させる」という観点から子どもの発達に大変良い影響を与えるのである。早期教育はこれらを目的として幼児期に行わ

れる教育方法であるが、実際のまたは具体的な早期教育の利点としてはどのようなものがあるのかについてはあまり知られていない現状である。そこで、この章では早期教育の利点を日本と世界に分け例を挙げながらその魅力に迫っていくことにする。

2.1 節 日本における早期教育の利点

乳幼児期は刺激を脳へ吸収する力が優れており、この時期だからこそ発揮される能力があるという事が近年の研究により分かっている。早期教育には主に勉強に慣れさせる為に塾に通わせる事やスイミング教室に通わせる事等が挙げられるが、これは吸収力が抜群な時期に様々な刺激を与える事により、脳を鍛え、発達を促進させる事によって子どもの潜在能力を引き出して才能を開花させるという考えが根底となっている。そこで、ここでは日本国内で特に盛んに行われている「英会話」「スイミング」「武道」の三つについて述べていく事にする。

一つ目に挙げた英会話には、早くから習うほど自然と身に付くのが早くなるという利点がある。現在では殆どの学校で英語の授業が行われるようになり、小学校でも英語の授業が取り入れられるようになっているが、乳幼児の頃から早く英語を身に付ける事により、小学校や中学校に上がっても授業に遅れる事なく楽しんで勉強できるという利点に繋がる。また、英会話を習っていると外国人講師等と触れ合う機会が多くなり、実際に現地の人と交流をする事や実用的な英会話が話せるようになり、海外でも実際に外国人と接する事ができたり、学校の授業等ではヒアリングやスピーチのレベルも上がる事へと繋がっていくのである。加えて、外国の言葉を学ぶ事は異文化に触れるという事にも繋がり、日本とは違った文化に触れる事で子どもにとって良い刺激を与える事ができるのも英会話の魅力の一つである。二つ目に挙げたスイミングには、子どもの体力を鍛えたり、水泳に慣れ親しみ、学校の水泳の授業を楽しく受ける事ができるようになる等の目的が多く挙げられる。また、スイミングは喘息やアトピー等の症状にも効果を発揮すると言われている為、喘息やアトピー等の症状を持つ子どもの親が症状を改善する為にスイミングを習わせるという場合もある。他にも、スイミングには以上のような身体的な利点だけではなく、体を動かす事によってストレスを解消する事にも役立ったり、親子でスイミングを習う場合にはコミュニケーションの活性化にも繋がる等、精神に与える利点も挙げられる。三つ目に挙げた武道は、「礼に始まり、礼に終わる」を基本としている為に始めに「礼儀」を徹底的に教わる。この「礼儀」を子どもの頃にしっかりと身に付ける事により、将来大人になり社会に出てからもきちんと礼儀をわきまえた行動が出来るようになる。さらに、体を動かす事により「身体を鍛える」事へと繋がり、武道は「精神力」と「身体」の両方が鍛えられるという利点が挙げられる。そして、それらが結果として子どもがより良く成長していく事に繋がっていくのである。

2.2 節 世界における早期教育の利点

日本での早期教育の利点は前述したとおりであるが、その一方、世界での早期教育の利点とはどんなものがあるのだろうか。

世界の大半の国で行われている早期英語教育では、幼児期から英語に触れることで外国人とコミュニケーションがとれるようになる為、異文化を深く知ることにより人間性が豊かになったり、母国語と英語の二つの表現を知ることにより柔軟な思考が出来るようになったりする。そして、将来的にみても受験勉強や就職の際の苦労が軽減され、職業選択の幅も広がり社会的地位の確立にも繋がる等という利点が挙げられる。

一方、宗教が関係していることから早期教育を行っている国も少なくはない。イスラエルでは幼児期からユダヤ教による徹底した道徳教育を行っている為、非行や非道徳的な行動をとる子どもは極めて少ない。そして、生涯を通してユダヤ教を学ぶことによって、大変優秀な才能を得ることに繋がっているのである。その理由は、イスラエルは国土が狭く天然資源もそれ程豊かでは

ないことから「人こそが国の宝であり、経済の原動力」と考えられており、その為、教育に国を挙げて力を入れて優秀な人材を育てているのである。しかし、早期教育はただ単に優秀な人材を育てる為だけに行われているのではない。質の高い早期教育は子どもの認知技能、言語能力、情緒的・社会的な発達を促す大きな可能性を秘めている。更に、学業成績を上げることに役立ち、幼い時から子どもを不利な立場に追いやることを避けることができるのである。

このように、早期教育は子ども達の技能的・情緒的な面で発達を促すと共に将来の地位の確立に役立っていると言えるのである。

2.3 節 早期教育が求められる理由

現在日本は、「第二次早期教育ブーム」の真只中である。多くの親が早期教育に引き込まれる主な理由として、学校教育に対する不安・不満、ゆとり教育に対する反動、子育てに対する不安・自信の喪失、少子化による一人一人の子に対する期待の高まりや金銭的ゆとりの増大等が挙げられ、多くの親は子どもに年齢に囚われず自由に教育を受けさせ、且つ、将来の可能性を無限大に広げ、個人の持つ能力を最大限に引き出したいと思っている。それは学習面に限らず、独創性、社会性、情緒性を高める為の教育も含まれている。すなわち親にとって早期教育は「不安の解消＋未来における成功＋信じたい」という存在なのである。

具体的な早期教育として、大人になってから完全なる発音をするのは難しい英語の発音やヒアリング、音楽においては絶対音感等のように小さい頃からでなければ身に付かない早期教育が挙げられる。また、早期教育は子どもとの関わりのきっかけのひとつとしても使われている。例えば、早期教育が親子関係を仲立ちして子どもと過ごす時間が長くなり、子どもにとっても親と一緒に頑張ることが出来る等、親子の絆が深まる等の良い影響を与える場合もある。また、時には勉強をさせすぎてしまう等の失敗もあるが、親子が向き合う時間も増え、親子一緒に成長する事が出来る等、早期教育は子どもだけのものではなく、親に対しても大切な教育となっているのである。

3 章 早期教育の問題点

これまで述べてきたように、早期教育には早い時期から能力を身に付けられるだけでなく、精神面や体力面にも良い影響を与えられるという利点がある。しかし、その反面で早期教育が子どもの心理や人格に悪影響を与えているとも言われている。そこで、この章では早期教育が子どもの心理や人格にどのような影響を与えるのかを述べていくことにする。

3.1 節 日本における早期教育の問題点

早期教育により子どもから「本来の遊び」が無くなる事が懸念されている。「本来の遊び」とは、子どもが自発的に作り上げていく遊びの事であり、その遊びの中で知能や思考力等の様々な事を身に付けるのである。また、集団で遊ぶ事で順番等のルールを守る事の大切さを学び、仲間とコミュニケーションを取ることで社会性も身に付ける事ができるのである。しかし、早期教育における「遊び」は準備された活動を受動的に受け入れる事で成立する世界であり、子どもが自ら遊びの中で思考力や社会性を身に付ける機会を奪ってしまい、その結果、共同作業が苦手になったり、協調性の無い自分勝手な子どもに育ってしまう危険性が懸念されているのである。その他にも、早期教育を行う事で子どもの自主性や自己肯定感を抑圧させてしまう事も懸念されている。

早期教育には、パターン化されてそれに反応するという受け身の学習・訓練が多いが、その為に子どもは自発性や自主性、そして、創造性の領域の発達が抑圧され、どのような事に対しても

受け身の姿勢になってしまう可能性がある。また、早期教育を受けていると親からの期待に応えようとする子どもが殆どとなり、親からの期待や評価を気にするあまり、子どもは「親の期待に応える子は良い子で、応えられない子は悪い子」と考えてしまうようになる。その為、幼児期に育つはずの「自分は自分で良い」といった自己肯定感や自尊感情を失ってしまう危険性も懸念されているのである。

以上のように、早期教育には子どもの人格や心理に関する問題点が多く挙げられるが、他にも教育費による経済的な面での問題点も生じている。昨今の早期教育ブームの中、乳児期から幼児教室や英語教室に通わせる為に多大な教育費をかけているケースが多く見受けられるが、その多くは手取りの月収が20万台のごく一般的な家庭である。このように、早くから早期教育の為に費用をかけ過ぎると、本来必要な生活費や子どもの将来の為に教育費が賄えなくなる可能性がある。実際、大学教育にかかる教育費が家計や貯蓄から賄えず、奨学金や教育ローンに頼る家庭が昨今増加している現状であり、早期教育ブームがそれに更に拍車をかけてしまう恐れが心配されている。よって、早期教育に意義があるとしても、一般的な収入の家庭が早期教育に費用をかけ過ぎると、子どもの将来の教育費が不足するだけでなく、老後の生活にも影響を与えてしまうという現実があるという事を考えなければならないのである。

3.2 節 世界の早期教育の問題点

ここでは、大半の国で行われていると言える早期の言語教育に焦点を当て、韓国とフランスを例に挙げ述べていくことにする。

初めに、韓国で早期英語教育に力が入れていることは第1章の1.3節でも述べているが、その理由は国家競争力を高めるために、国際的に通用する優秀な人材を養っていく必要があるからだと考えられている。その為、政府レベルで英語教育に力を入れており、1997年から小学校3年生以上は英語の授業が必修となっている。さらに、3年生からでは遅いという世論の後押しもあり、小学校1年生からの必修化を視野に、試験的に英語の授業を実施していく計画が立てられている。それに加えて、家庭でも4、5歳から何らかの形で英語教育を始めるのが一般的で、その時期は年々早まる傾向にあると言える。そうすると自然と英語教育への投資額は高くなる一方であり、年間の英語教育費は15兆ウォン（日本円で約1兆9000億円）に達すると推定され、1人当たりの教育費は日本の7.8倍に当たるとされている。韓国では“子どもの英語力は母親の努力次第”と言われる程で、ストレスを感じる母親も多く、経済的に見ても負担は大きい。また、英語教育熱は専業主婦の家庭だけに留まることを知らず、共働き家庭が増えている韓国では、「英語育児はしたいけど、時間がない」と悩みを抱える母親に代わって、「かわいい孫のため」とひと肌脱いで、英語育児を実践する祖父母も出てきている。更に、夏休みや冬休みを利用した短期留学だけでなく、小中学生の子どもを外国の学校に通わせるため、父親だけが韓国に残って仕送りする家庭も増えており、それが家族崩壊につながるケースも出てきているため、新たな社会問題にもなっている。

次に、フランスの言語教育に目を向けると、韓国と同様に英語教育についての問題が伺える。フランス国民教育省は、2000年より幼稚園年長（5歳）より3年間の入門教育（週1回90分）を実施することとなったが、これはあくまでも異言語に親しみ、母語以外の言語を発話する喜びを味わうことで、母語のより良い理解を深めることが目的としてある為、言語教育を英語に限定せず、複数言語の中での選択が可能となっている。しかしながら、言語の選択に関しては英語のように社会的ニーズの高い言語は中学校以降に必ず学習する機会があることから、むしろ学習の機会の少ない、英語以外の言語の学習を促進することが妥当であるにも関わらず、英語以外の言語を学ぶ意義は家庭や地域社会に十分に浸透しておらず、また、多くの言語種が全ての学校で整備されていないことや英語以外の言語教育を担当しうる教員が乏しい等、様々な要因により英語の独占に拍車をかけている現状となっている。

このように、フランスでは言語教育の多様化を推進して英語の独占を防ぐこと、この2点の課題が明確であるにも拘らず、複言語教育の整備は英語の特権化を未だ阻止出来ず、英語との戦いは教育全体の課題となっているのである。

3.3 節 今後の早期教育の課題

生まれてから3歳までに脳の重さが急激に多くなることは確かなことであるが、神経細胞の網である「構造」が構築されるだけであって機能が発達するわけではない。よって、未熟な脳に特定の情報を送り込み過ぎると、これから学習する為に用意されている領域まで使ってしまうことになるのである。子どもの思考力は本来遊びの中で想像力や創造力を豊かにして頭脳を活発にする為に発達していく。そして、集団で遊ぶことによって規則という概念を持つことができ、時には集団の中で子ども同士の衝突もあるが、友達の気持ちも分かるようになり、社会性等の多くを学んでいくのである。

現在行われている早期教育は、教材を開発するにあたって遊びを取り入れてはいるが、子ども本来の遊びと早期教育の中での遊びでは本質が違っている。本来子どもの遊びは、子ども達自身が自発的に作り上げていく世界であり、早期教育の中の遊びの場合は準備された遊びを受動的に受け入れることによってのみ成立する世界である。さらに、集団での遊びが減ることにより協調性に欠け、共同作業が苦手になる危険性がある。そして、早期教育はパターン化されているものに子どもが反応するという受身の学習・訓練が多い為、子どもが受身になり、子どもの自発性や創造性の領域の発達が抑圧される危険性も懸念される。

現在進められつつある早期教育は、幼児たちの視覚と聴覚をコントロールしながら大人たちが仕組んだ「意味」のある教材のメニューを幼児自身が選んだかのような錯覚を持たせながら従順に反応させていく特徴がある。例えば、「言葉が話せる」とか「数がわかる」という目に見える事柄のみを切り離して、「教え込もう」とすることにより、見に見えない「心が育つ」過程をおろそかにしている。すなわち早期教育が考える「能力観」には「人間観」が欠如しているのである。そして、親の期待に応えることができる子が良い子、期待に応えられない子はダメな子、というように自己肯定感を喪失し、また、努力するのは自分の為ではなく大人を喜ばせるためであり、自分らしさを失ってしまう危険性もある。遊びは幼児にとって欠かせないものであり、よって、毎日を健康に楽しく暮らせる事の方が幼児にとっては大事なことなのである。これからの乳幼児教育は、おもちゃ、絵本の読み聞かせ、自由で豊かな模索活動の3つを柱にして構想されることが求められており、もし早期教育を始めるとしても、それが子どもの「育つ」力を妨げないことが条件となるべきである。そして、無理矢理の押し付けではなく、自然に意欲をもって学べるように工夫し、子どもの発達段階を考えて無理なく親と子が楽しくコミュニケーションをとれるようなものが望ましいことは言うまでもなく、すなわち、今進められつつある早期教育システムは成功の鍵があると同時に大きな落とし穴があることを忘れてはならないのである。

まとめ

早期教育は日本だけでなく、韓国やフランス、イスラエル等の世界各国でも行われており、教育の内容は知的教育やスポーツの他、宗教教育等、国によって様々な特色がある。但し、日本も含めて殆ど国で共通して英語等の外国語教育が行われており、その目的として海外への社会進出や英語力の向上等が挙げられている。しかし、外国語教育については問題点を抱える国が多く、経済面や家族関係の面で社会問題にまで発展している事例もある。また、外国語教育に限らず早期教育自体にも問題点が存在しており、パターン化された教育が子どもの心理や人格形成へ影響を及ぼす事も問題視されている。

一方、宗教教育やスポーツ等、精神面や肉体面を鍛える事を目的に行われている教育は成功を収めている場合が多く、また、外国語教育についても問題点ばかりではなく、実際に技能の向上や社会進出に繋がっている事例もあり、早期教育が子ども自身や子どもの将来にも良い影響も与えているという事実があることも忘れてはならない。

外国語教育に限らずその他の教育においても、子どもの自主性を尊重して親子のコミュニケーションをしっかりと行う事、そして、何よりも教材や塾等で用意された教育を行う前に絵本の読み聞かせや遊び等の日常生活を通して多くの事を体験して学ぶ事が子どもには大切であり、子どもが楽しく安心して学べる環境を与える事が大人にとっての今後の課題であり、それが子どもがより良く成長していく事に繋がっていくのではないだろうか。

保育の現状

西平 弥由 井上 美沙 河本 奈々

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

近年、子どもやその親に関する、つまり、保育に関するニュースをよく耳にする。保育とは、家庭等で乳幼児や児童を保護して育てることで、養護と教育が一体となった概念であり、子どもが成長していく上で非常に重要なものである。しかし、待機児童や早期教育、児童虐待等、現在では子ども達を取り巻く保育の環境には多くの問題が溢れていることも事実である。このような状況下において、これらの問題を解決する為に国や地方は様々な施策を行っているが、問題は減少するどころか増加している現状である。この理由として、国や自治体が行う施策と家庭を含めた保育現場が求める施策との間に大きな差異が存在することが考えられるのであるが、それがどのようなものなのか、また、それ以上に少子化時代における保育の現状を私達はどの程度に理解しているのであろうか。そこで、本研究では国や地方、そして、現場で働く保育者等、現在の保育の現状を明らかにすると同時に、少子化時代における社会の課題について詳しく考察していくことにする。

1 章 待機児童

今日、女性の社会進出が進み、それに伴い待機児童が問題視されてきている。この問題に対して、国や地方は様々な施策を行っているが、待機児童は年々増えているという現状となっている。そこで、この章では待機児童の現状、および、待機児童を解消する為に行われている具体的な施策について取り上げていくことにする。

1.1 節 待機児童の現状

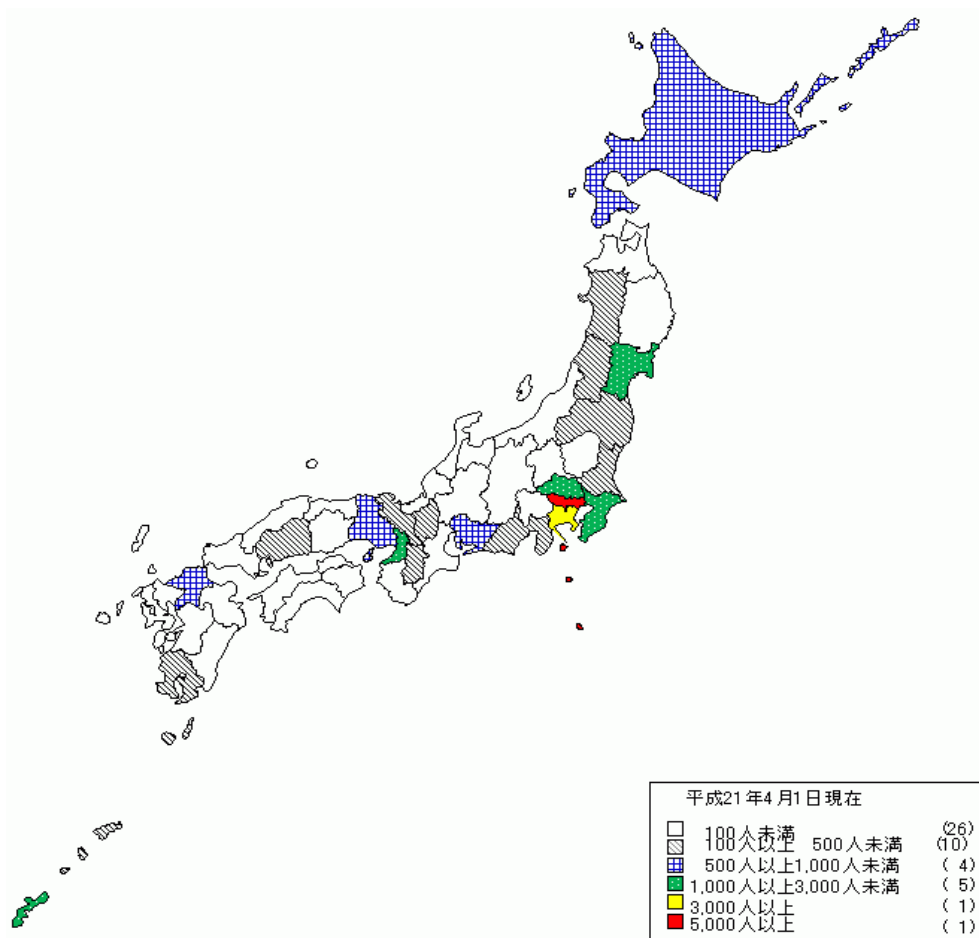
待機児童とは、国が定める要件を満たして保育所（認可保育園）入所申請しているにもかかわらず、希望する保育所の設定定員を超過する等の理由で入所できない状態、またはその状態にある児童のことをいう。

厚生労働省の調べでは 2009 年 4 月の全国の待機児童数は 25,384 人となっている。その中でも低年齢児（0～2 歳）の待機児童数は 20,796 人で全体の 81.9%を占めている。数字からもわかるように、特に低年齢児の受け入れ態勢が整っておらず、民間の無認可保育所が受け皿になっていることが多く、このことが現在問題となっている。また、都市部の待機児童数として、首都圏（埼玉・千葉・東京・神奈川）近畿圏（京都・大阪・兵庫）の 7 都府県（指定都市・中核市含む）及びその他の政令指定都市・中核市の合計は 20,454 人であり、全待機児童数の 80.6%を占めており、都市部に待機児童が集中している現状となっている。東京都内には約 1400 ヲ所の無認可保育園が存在しているが、スキルが不十分な保育所もあり、生後 4 ヲ月の乳児がベッドで窒息死するという事故が起きたことが契機となり「認可」の必要性が問題となっている。そこで、2002 年から国は「待機児童ゼロ作戦」をスタートさせ、保育所の受け入れ人数を増やす他、駅前など利便性の高い場所に保育所を設置する等の施策を行っている。

待機児童に加えて、潜在的待機児童の存在も忘れてはならない。潜在的待機児童とは、本当は認可保育園に預けて働きたいと考えていても、定員オーバーで入園できずに無認可保育園に預けている場合や働く意思があっても入園は難しいと最初からあきらめて保育園に申し込みすらしない親の児童のことをいう。潜在的待機児童は実際に保育園の申し込みを行っていないので具体的

な数字としては表面化していないが、こうした待機児童数は 85 万人に上ると推計されている。

全国待機児童マップ（都道府県別） 平成 21 年 4 月 1 日現在



北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県
682	28	95	1131	261	220	192	396
栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	新潟県	富山県
76	28	1509	1293	7939	3245	4	0
石川県	福井県	山梨県	長野県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県
0	0	0	0	3	364	778	73
滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県
411	278	1724	905	115	22	0	97
岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県
96	113	23	30	0	45	43	644
佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	合計
0	94	93	3	0	443	1888	25384

1.2 節 待機児童の発生原因と施策

待機児童の発生原因として、1985 年頃からの女性総合職の登用開始を初めとする男女雇用機会均等法の浸透が挙げられているが、同時に育児介護休業法と次世代育成法での一般事業主行動計画により育児休業制度が中小企業まで急速に普及した為、結婚・妊娠といった機会での離職の減少により働く女性が長期的に増加したことによって共働き世帯が 1997 年以降専業主婦世帯を上回る状況が背景にある。加えて、従来の保育所は 3 歳児以後の入所が中心となっており、産後休業後の 0 歳児保育や育児休業後の 1 歳児保育に対応できる環境が整っていなかったこと、更に、第 2 次ベビーブーム児の卒園とその後の少子化による在園児の減少により保育所定員は 1981 年、保育所数は 1985 年をそれぞれピークに減少しており、男女共同参画社会の実現や少子化に伴う非労働人口である育児世代の女性の政策とのミスマッチが生じていたこと等が待機児童発生の原因となったのである。

待機児童の解消の施策としては様々な工夫がなされている。少子化の進行に伴い、利用数は 1980 年、定員数は 1981 年、保育所数は 1985 年にそれぞれピークを迎え、その後は減少方向となっていたが、少子化対策として 1994 年に策定されたエンゼルプランを手始めに、以後 1999 年の新エンゼルプラン、2001 年の待機児童ゼロ作戦の連続した施策が展開され、保育者数は 2001 年以降増加方向となった。そして、2008 年には 1985 年の保育所数を上回ったのである。また、定員数は 1999 年以降は増加方向となり、2006 年には 1985 年の定員数まで回復、加えて、利用者数は 1995 年以降増加傾向となり、2004 年に 1980 年の利用者数を上回り、過去の記録の更新を続けている。このことにより、今現在の待機児童数は年々減少方向となっていることが期待されている。

1.3 節 具体的な施策

では、国の施策として具体的にどのようなことが行われているのか。厚生労働省では保育サービス量の拡大を進めると共に保育所を設置できる主体の制限を撤退する等、規制緩和を実施し、保育の設置の推進に努めている。それらの一つとして、『エンゼルプラン』が挙げられる。

『エンゼルプラン』とは、低年齢児（0～2 歳児）保育、延長保育、一時保育の拡充等ニーズの高い保育サービスの整備を図ると共に保育制度の改善・見直しを含めた保育システムの多様化・弾力化を進めることである。また、新しく制定された『新エンゼルプラン』では、『エンゼルプラン』に具体的実施計画として、待機児童の多い一定の自治体に供給確保の等に計画制定を義務付け、『子ども・子育て応援プラン』を加えることにおいて、集中的に受け入れ児童の拡大の取り組みを展開しているところである。

地域別の待機児童解消に向けた対策として、都市部（東京、大阪、福岡）と地方（北海道、沖縄）を例に挙げて考えていく。

都市部の東京都では、平成 14 年に待機児童ゼロ作戦、平成 20 年に新待機児童ゼロ作戦が展開されており、加えて、・新設マンションの設置時には保育施設も併設すること・0 歳児保育の受け入れを行う保育所を拡充すること・各区の保育施設の質を均一化すること等といった施策の必要性が考えられている。また、大阪では民間保育所の新設等により約 5600 人の入所枠の拡大を図っており、市有地や公共施設等の公有財産を保育所に優先的に活用すると共に、公立幼稚園の余裕教室を活用する等して民間保育所の整備を進めていくことが検討されている。さらに、13 年度から国に先駆けて実施している分園制度に対する補助の拡充や民間保育所の小規模定員増に対して新たに運営補助を行う等、保育事業者へのインセンティブとなる仕組みを導入すると共に、大阪府が認定を行う認定こども園制度の活用を図っていくことも検討されている現状である。そして、福岡では福岡県子育て応援基金を活用することにより市町村に対して保育所の整備に要する費用を助成することに取り組んでおり、また、福岡市では 2009 年 4 月 1 日から認可保育所の定員を 140 人増やして総定員数を 2 万 3755 人とする等、積極的な取り組みを行っている。

一方、地方に目を向けると、北海道では国からの交付金を受け平成 21 年 3 月 31 日に「北海道安心こども基金（約 44 億円）」を設置する等、また、沖縄では「沖縄振興開発計画」において保育所の整備を促進して保育所待機児童の解消に努めると共に、認可外保育施設の認可化促進と認可外保育施設の向上を図り、そこで認可外保育施設の認可化に必要な施設改善費や移行期間の運営費補助の上限を 700 万から 3000 万円に引き上げる等、国と県が創設した 2011 年度までの基金（10 億円）を活用した支援策等、地方ならではの施策が行われている。

2 章 現場での保育

前章で述べたように、近年、待機児童が社会問題として取り上げられている。そして、待機児童の殆どが無認可保育所に流れており、その状況は年々増加する現状である。この現状の背景としては、少子化や女性の社会進出等が挙げられるが、一方、長引く不景気の影響から子ども将来を危惧する親の増加を起因として近年急速に早期教育が注目されている。そこで、この章では認可・無認可保育所の実態を明らかにすると同時に、急速に注目を集めている早期教育の代表例であるモンテッソーリ教育とヨコミネ式教育を紹介していくことにする。

2.1 節 モンテッソーリ教育とヨコミネ式教育

モンテッソーリ教育とは 20 世紀始めにマリア・モンテッソーリによって考察された教育法であり、子どもの内面に自分自身を創り上げる要素があると言われている。教育は、教え込むのではなくその子の持っている内面の欲求や環境を準備することで引き出して、子ども自身が教具と関わることで自分を創造するのである。実際の現場で行われているモンテッソーリ教育とは、0 歳、1 歳～3 歳、3 歳～6 歳と縦割り保育が行われており、乳児と幼児に別れている。各クラスには教具棚に 290 種以上の教具や教材が準備され、また、それらが魅力的に並べられており、子ども達はその中で自由に教具や教材を選んで触れている。子どもは触れることによって集中力が高まり、「出来た」「やれた」という達成感がいつも心に宿るのである。そして、自分には色々なことが出来る力があると確信して、それが人格の形成へと繋がっていくと考えられている。

モンテッソーリ教具の工夫については 4 つ挙げることができる。1 つ目は、ひとつの教具にひとつのねらいということが言えることである。それは、者と創意の識別を促す為であり、例えば、大きさと長さは違う次元の基準だというものである。2 つ目は、子どもが自分で使い方の誤りが訂正できることである。教師は何度もその子が確実に出来るまで正しい見本を見せるが、間違っていると色が合わない・形が揃わない等、子どもに誤りへの注意を促すよう工夫されており、これは秩序観を養うことにも繋がっている。3 つ目は、見た目が色鮮やかでとてもきれいということであり、それは子どもの注意ややる気をそそるためである。最後は、子どもが使ったり運んだりする上で丁度良い大ききさであるということである。これは基本的なことであるが、一番重要なことなのである。以下にモンテッソーリ教具の分類を示しておく。

教具分類	内容	例
1. 日常生活の訓練	日常の動作をきちんと行う練習。2 歳半から始めらるが、すべての基本となるので、年齢に関係なく、臨機応変に続けられる。教具はあまり使わない。	物の運び方、掃除の仕方 服のたたみ方、野菜切り
2. 感覚教具	5 感に刺激を与える。また、大きさ、長さといった体感に、概念と名称を与えていく。これらは、その後の段階に進むための、基礎となる、大変重要なものである。3 歳から始められる。	長さの棒、色板 触覚板、音感ベル
3. 言語教育	まずは、鉛筆を使いこなす訓練をする。それと平行して、物の名称を獲得してゆく。5 歳になると、文字に対する敏感期が始まる。最終的には、上記の二つの能力を融合して、文字を書くことに導かれる。	砂文字板、文字カード メタルインセット 絵カード合わせ

4. 算数教育	数の概念を、ビーズ玉の量という体感を通して獲得していく。具体的認識から抽象的認識へと導く、大切な分野である。やがては、10進法、数字の名称、足し算引き算の獲得まで進む。	ビーズ、数字カード 計算棒、砂数字板
5. 文化教育	理科、社会的な知識、音楽、美術的な理解を身に付けてゆくが体系的、抽象的ではなく、あくまで身近な具体物を対象とし、ふれあいの中から自然に身に付くよう導く。すべての分野が、ここにたどり着くまでの導入ともいえる。	世界地図パズル 植物カード 動植物の実物

次に、ヨコミネ式学育とは有名な女子プロゴルファーの横峯さくら選手の叔父にあたる横峯吉文氏が教える幼児教育であり、「すべての子どもが天才である。」という考え方を大前提とし、人間の才能である「心の力・学ぶ力・体の力」を身につけさせ、最大限に引き出す為の教育を目的としている。その中でも、早期に行う「読み」・「書き」・「計算」・「音楽」・「体操」等はよくテレビや本等で取り上げられており、全ての子どもができる様になると言われている。横峯氏は、子どもの無限大の可能性を引き出すために大切なのは、“子どもをやる気にさせるスイッチを入れてあげること＝子どもは競争したがる⇒子どもは真似したがる⇒子どもはちょっとだけ難しいことをしたがる⇒子どもは認められたがる”を理解することだと言っている。しかしながら、実際ヨコミネ式の園に通っていた保護者からは、確かに様々な経験ができることはよいことであるが、規律とスケジュールの毎日で子どもらしさを失い無理をしていたと声も多く挙がっていることも事実である。この教育方法を取り入れている幼稚園は全国で130ヶ所以上あり、公表されているだけでも九州では37園、その中でも福岡では10園となっている。

2.2 節 認可・無認可保育所の現状

認可保育所とは、児童福祉法に基づき都道府県又は政令指定市又は中核市が設置を認可した施設であり、認可保育所にはいわゆる認可保育所の他に小規模認可保育所と夜間認可保育所がある。そして、認可に際しては児童福祉施設最低基準に適合している事に保育所の設置認可の指針、小規模保育所の設置認可の指針、夜間保育所の設置認可の基準の要件を満たす必要がある。厚生労働省の集計による2009年4月時点での保育所の状況は保育所数は22,925か所(公立:11,008、私立:11,917)であり、定員が2,132,081人となっている。一方で、利用児童数は2,040,974人、待機児童数は、25,384人である。保育所利用児童数は1975年の1,996,082人をピークとして少子化の進行により1994年まで減少傾向が続いていたが、1995年以降は上昇傾向に転じて2004年に1,966,929人となり、1975年のピークを超えた。その後も更に増加を続けているが、これは1973年生まれ(第2次ベビーブームのピーク)が5歳であった1978年度をピークとして園児数が減り続けている幼稚園の状況と、1994年以前は類似していたが、1995年以降は明らかに異なっている。

児童福祉法上の保育所に該当しない保育施設は、認可外保育施設・認可外保育所と呼ばれ、設置は届出制であり、無認可保育所と呼称されることもある。平成13年に児童福祉法の一部が改正され、平成14年から施行されているが、この法改正の施行により、無認可保育所・保育施設の事業者に対して、届出等が義務付けられることとなり、都道府県等の自治体により、地域住民に対して情報の提供が実施されることとなっている。同時に、都道府県や政令指定都市等が無認可保育所・保育施設の設置や管理運営実態に関して調査を実施して、預けられる乳幼児によって福祉的観点上、何らかの問題があると判断された場合には改善を要求する等の監督・指導の役割を担うようになった。現実的に、この措置にて保育サービスの質が格段に向上するという水準までは届かないとしても、無認可保育所ならば届け出が必要ない、という状況とは明らかに違った形となっているのが現在の状況である。

3 章 家庭での保育

私たちが家庭での保育と聞くと、子どもを褒めたり叱ったりして教育していくことが頭に浮かぶのではないだろうか。勿論、褒めたり叱ったりすることは子どもを保育していく上でとても大切なことであるが、それだけではなく、それが子どもにどのような影響を与えるのかを配慮しながら行っていく必要があることは言うまでもない。また、今日児童虐待のニュース等、家庭での保育に関する悲しいニュースをよく耳にするが、児童虐待と躰との関係を私達はどれ程理解しているのだろうか。そこで、この章では家庭での保育に目を向け、保育者に求められている子どもへの接し方や言葉掛け、支援方法について考えていくことにする。

3.1 節 褒め方、叱り方

「褒める」時や「叱る」時にかけられる言葉は、子どもの脳の潜在意識や言語中枢に働きかけている。子どもの脳というのは、常に母親からどう思われているかを気にしている為、否定的な言葉よりも肯定的な言葉を伝えることが大切である。褒め言葉は、言葉としての力を潜在意識に発揮させ、子どもに笑顔をもたらして、自信や未来を切り開く「生きる力」を育て、また、褒められることは子どもにとっての「ごほうび」であり、褒められた行動は繰り返される傾向があることから、心理学ではこれを「強化」と呼んでいる。

しかしながら、「褒める」ことは、簡単なようではなかなか難しく、慣れていないとどのような言葉をかけてよいのかさえ分からなくなることが多く、言葉だけが宙に浮き、心がこもっていないように聞こえてしまうのである。ここで大切なことは、褒める時・叱る時に何に対して褒めているのか・叱っているのかを受け手が分かるように話すことであり、それにより「行動」に対しての「結果」が相手により明確になるのである。これは、子どもと大人に共通することであり、親達の言葉の掛け方1つで、褒められるからやるのか、自分の為や人の為にするのかが心の中に育っていくのであり、自分のしたことが人の為に役立っていることを実感することにより、それは大きな自信に繋がり、自信は子ども達を積極的にしていくのである。

現代では、不安・できない・無理等という理由で行動する前から諦めてしまう「自信のない子」が増えている。よって、社会性を身につけさせる為にも、親は心から子どもを褒めたり、叱ることが重要なのである。

叱り方にも様々な方法があるが、一つ間違えば子どもを傷つけてしまうことがある。昔は子ども同士で遊び、大人の目が届かない場所で過ごすことができていたが、最近ではどうであろうか。時代と共に社会が変わり、親は子どもを必要以上に心配して、子どもは一日中大人の目の届く範囲で過ごしている為、親自身もストレスが溜まり子どもに当たってしまう。また、子どもは叱られないように何かをする度に親の期待に応えようと行動して自分の気持ちを隠してしまい、それが悪循環となっている。特に、物事の善悪を自分で判断することが難しい幼少期は、両親や家族・周囲の大人達から聞いた価値観をそのまま受け止め、それを「絶対的なもの」と考えてしまう。ゆえに、それがネガティブな内容であれば“トラウマ”となって心に刻み込まれ、その後の精神的成長を妨げる可能性があるだろう。よって、幼児に対しては“子ども自体”を叱らないことに特に注意すべきであり、本人の存在そのものを否定する行動を繰り返すことは“心理的虐待”ともなりえることを忘れてはならないのである。過ちを正す時は、その場ではっきりとした理由を説明することが大切であり、ポイントを的確に指摘することで子どもは混乱も少なく素直に受け止めることができ、同時に、叱った後のケアも重要なことである。

3.2 節 児童虐待

家庭での保育で問題視されているのは児童虐待である。児童虐待とは、身体的虐待・性的虐待・ネグレクト（育児放棄、監護放棄）・心理的虐待の4つに分類される。まず、身体的虐待とは児童の身体に外傷が生じ、または、生じる恐れのある暴行を加えることで、例えば、一方的に暴力を

振るう・食事を与えない・冬は戸外に締め出す・部屋に閉じ込める等がある。次に、性的虐待とは児童に猥褻行為をすること、または、児童を性的対象にさせたり、見せることで、例えば、子どもへ自らの性器を見せたり、性交を見せ付けたり、強要するなどである。また、ネグレクトとは児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食、もしくは、長時間の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ることで、例えば、病気になっても病院に受診させない・乳幼児を暑い日差しの当たる車内への放置・食事を与えない・下着等を不潔なまま放置する等である。そして、心理的虐待とは児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うことで、例えば、言葉による暴力・一方的な恫喝・無視や拒否・自尊心を踏みにじる等である。

実際にネグレクトを受け、朝ご飯を与えられていない児童が保育所で工作用の糊を食べるという例もあり、保育者はいち早く異変に気付き、対応していくことが必要であるだろう。

児童虐待の印象に残るニュースとして、大阪府で幼い姉弟 2 人が母親に閉じ込められ、遺体で見つかった虐待事件がある。母親は居室から玄関へ通じる室内ドアにも外側から粘着テープを張り、3 歳の長女 S ちゃんと 1 歳の長男 K ちゃんを居室部分に閉じ込め、置き去りにして外出していた。そして、1 カ月後に部屋へ戻り、2 人の死亡を確認したにもかかわらず、放置して部屋を離れていた。逮捕後、母親は「子育てに悩み、すべてから逃げたかった」と話しており、育児ノイローゼからこのような犯行を犯したのだと見られる。また、滋賀県で母親が生後 6 か月の二女・Y ちゃんが泣きやまないことに腹を立て、両手で抱き上げて左右に数回激しく揺さぶり、硬膜下出血の傷害を負わせて死亡させたという事件もある。この事件の場合、日常的に虐待を受けていた跡は見当たらず、警察は育児によるストレスが原因とみて調べを進めている。このように、虐待には日常的に虐待しているケースや突発的に虐待をするケース等の様々であるが、どちらも許しがたい事件であることに変わりはない。保育者は子どもを支援していくと同時に、保護者も支援していく必要があることを児童虐待という悲しいニュースは伝えているのではないだろうか。

今日、少子化や核家族化の進行等により、家庭や地域の子育て力が低下して、子育ての孤立感・不安感の増大、いじめや不登校、児童虐待の増加等、子どもをめぐる様々な問題が深刻化・複雑化して状況である。そして、社会的な支援を必要とする子どもや家庭の増加により、地方では市町村や関係機関等と連携して、児童虐待の未然防止や早期発見・早期対応、保護・支援に至るまで一連の取組を強化すると共に、児童相談所の取組の強化を図っている。また、子育て支援サービスや保育サービスを担う人材を育成・確保すると共に、地域における子育て支援のネットワークづくりを推進している現状である。

児童虐待は単独の機関で対応することは困難である為、関連する機関と連携を取りながら、それぞれの機能を活用していくことが重要となる。そこで、実際に子育て家庭と普段から関わりを持っている保育者は支援を行っていく上で大きな役割を果たすことが出来ると言えるであろう。このように、公的な機関との連携だけでなく、地域の様々な関係者との連携を取る視点が「支援」において本質的に大切なことなのである。

まとめ

これまで述べてきたように現在の保育の現状には様々な問題が潜んでいる。そして、その多くが社会問題となっており、待機児童や児童虐待等、深刻な問題となっているものも少なくはない。勿論、これらの問題に対して国や自治体は懸命な対策を行っているが、状況は改善することなく悪化する一方である。その要因として女性の社会進出や少子化・核家族化等、様々な理由が挙げられているが、子ども手当等の子育て支援政策が政争の具となっている政治の現状や低調な投票率に反映されるように政治への国民の無関心等、政治や国民意識といった大きな要因が本質であることも事実である。ゆえに、根本的な問題解決の為には家庭と地域社会が協力することが重要

なのであるが、現場の保育や家庭の保育の現状を考える時、身近な要因の可能性に私達は目を向けることが必要なのではないだろうか。すなわち、子どもの代弁者として誰もが疑うことのない保護者が、本来、家庭内で教育すべき躰を保育現場に押し付け、時にモンスターペアレントへと変貌することで、同じように子どもを大切に思う保育現場を圧迫している現状等、私達の身近な所に保育の現状を改善する重要な鍵が隠されているのである。

保育の在り方は日々変化しているが、保護者も含めた保育に関わるすべての保育者の「子どもを思う心」は変わることなく同じであり、昔からそうであったように保育者の数だけ保育がある。生きるゆとりを失いかけている現代社会において、誰もが納得できる答えに辿りつくことは難しいことであるが、それをどのように理解して行動に移していくか、すなわち、「現場の保育者の為」や「家庭の保育者の為」にではなく、「子ども達の為」に何が最善であるかを両方の保育者一人一人が真剣に考えることが重要であり、それがこれからの保育の課題となっていくのである。従って、現場の保育者は固定観念に捕らわれることなく、その状況に必要な保育を学び、同時に、家庭の保育者は保育現場の現状を学び、家庭・地域・社会と連携しながら日々変わっていく社会の中、お互いが協力しながら様々な視点で物事を考え続けることが大切なのである。

子どもの衣・食・住について

阿部 真優佳 田中 麻菜 萩原 志織

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

現在、世界の進歩に伴い、私達人間の衣・食・住も共に進歩してきた。そして、生活をしていく中で大変暮らし易く便利な環境を私達は手に入れ、また、子育てにおいても多くの便利で使い易い道具等が発売され、活用されるようになっていく。しかし、その便利さや暮らし易さが果たして子ども達にとって全てが良いものなのだろうか。加えて、近年増加傾向にある虐待の現実や世界各国の子ども達を取り巻く環境が如何に悲惨であるかを、目を逸らさずにしっかり受け止める事が私達大人には必要なのではないだろうか。そこで、本研究では衣・食・住という視点から現代の子ども達の置かれている現状を明らかにすると共に、世界における子ども達の環境について詳しく述べていくことにする。

1 章 現代の子どもの衣・食・住

近年、日本では晩婚化と言われている反面、若い大人が子どもを産み、育てるという傾向も多く見られるようになってきた。また、この傾向が見られるようになり、親の子育ての仕方も話題かつ問題となっている。現代の子を持つ大人達は、子どもに対してどのような知識を持って子育てを行っているのだろうか。そこで、この章では人間が生きていく為に必要な衣食住を挙げて、子どもの衣食住について考えることにする。

1.1 節 衣

自分の欲求を言葉によって表現することの出来ない乳児期の子どもにとって、直接的に肌身につけるものは非常に重要である。そこで、初めに乳児期の子どもにとって大切となるオムツについて考えていくことにする。

オムツには一般的に紙オムツと布オムツの2種類がある。この2種類のオムツにはそれぞれメリットとデメリットが存在する。現代の紙オムツは非常に進歩しており、コンパクトである為、外出の際はかさばらず便利であり、更に、紙オムツは吸収率が高い為に子どもはあまり不快感なく快適に過ごすことが出来る。しかし、紙オムツには水を吸収する充填物（高分子ポリマー）とそれを包む不織布で出来ている為、皮膚との摩擦によりかぶれが生じやすいという問題点も指摘されている。紙おむつに対して、布オムツは子どもが排泄をする度になるべく交換しなければならない等、母親にとっては大きな負担であるが、布オムツを使用することにより子どもは排泄時の不快感をより多く感じて伝えようとする為、それに応えようとする母親とのコミュニケーションが増加し、また、かぶれ辛いというメリットがある。

現在、日本国民の3人に1人がアトピーを含む何らかのアレルギー症状を抱えている事が厚生労働省の調査「アレルギー疾患の疫学に関する研究」で明らかになっている。その中でも、子どもの皮膚は大人の皮膚に比べ免疫が低い為、アトピー性皮膚炎等のアレルギーを発症し易く湿疹等の症状が見られるが、この湿疹が衣服との強い摩擦により悪化する場合もある。よって、保育者は安全性を考え衣服を選び、又、清潔に保つ事が望まれるのである。では、どのような素材が肌に良いのだろうか。絹・羊毛・羽毛等の素材やナイロン・アクリル・ポリエステル等の化学繊維は肌との摩擦が大きい為にアレルギーを発症し易い。一方で、綿は吸水性が高く、肌触りも良い

為に快適に過ごす事が出来る。この様な理由から主にベビー服や子ども服に用いられる素材は綿100%の物が多く、天然素材の思考が高くなっているのである。

1.2 節 食

乳幼児期では、子どもの身体は生まれた時の倍の大きさになり、運動機能の発達も進み、生涯のうち成長が最も著しい時期である。そして、この時期の食事は子どもにとって将来の成長発達に多くの影響を及ぼすことになる。そこで、はじめに乳幼児期に多いと言われる食物アレルギーについて考えていく。

乳幼児に食物アレルギーの症状が出やすい原因は、食べ物を分解する腸管や消化機能が未熟であり、上手く分解できずに体が拒否反応を起こして症状が現れる為と言われている。アレルギーの原因となる食べ物を食べると、数分から数時間後に、蕁麻疹・下痢・便秘・嘔吐・喘息・口唇炎等、様々なアレルギー反応を起こし、ひどい時にはアナフィラキシーショック、すなわち、呼吸困難・血圧低下・意識障害等、生命を脅かすショック症状が現れる場合もある。従って、成長発育していくに連れ、気管支喘息やアトピー性皮膚炎等の他のアレルギー疾患にも変化していく為、食物アレルギーの予防と治療が必要なのである。そして、アレルギーの原因とも成り得る物が食品添加物の中にあると言われている。元々、食品添加物は食品の保存性を高め加工する為に混ぜ合わせる物であったが、最近では技術の進歩により化学物質や化学薬品が混ぜられる様になっている。アレルギー物質と成り得る食品添加物の種類として、菓子や清涼飲料水等に含まれる着色料や甘味料、果物等に使用される防カビ剤、飴やアイスクリームに含まれる香料等、子どもが身近に口にする物に多く使用されているのである。日本では1991年より食品添加物の用途や成分を明記するように表示方法の規制が強化されているが、消費者はその成分が何であるのかが分からず、賢明な選択が出来ないのが現状である。

以上のように、現在、子ども達は毎日多くの食品添加物にさらされており、それは防ぎようにも防ぎようが無いのが現状であるが、安全な物を自ら選ぶ事の困難な子どもに何を食べさせるかは大人が責任を負っていることを忘れてはならない。従って、大人が出来る事は出来る限り食品添加物を避け、自己防衛していくことにより子どもたちを守っていくことが重要なのである。

1.3 節 住

乳幼児はより良い環境の中で育てられてこそ心身が健全に発達するのであり、よって、子どもに関わる全ての人的環境や物的環境はとても重要である。そこで、初めに昔と現代の暮らしの違いについて考えることにする。

昔の暮らしは、「夫が外で働き、妻は家庭を守る」という固定的な性別役割分担が制度や慣行および人々の意識の中にあった為、育児は主に妻が行う状況であった。しかし、親戚や地域との関わりが多かった為、気軽に相談できる相手が身近に存在する等、育児の負担や不安は少なかったことも事実である。また、子ども同士の関わりにおいては、地域との関わりが多いことで異年齢の子どもと接する機会が多く、その中で礼儀や挨拶および思いやりなど様々な人間関係を知り、遊びを通して社会性や公共性を学ぶと共に人間性を養っていったのである。

一方、現代の暮らしは固定的な性別役割分担はなく、反対に男女平等という意識が制度や慣行および人々の意識の中にあり、妻であっても外で働き夫も育児に参加している状況である。しかし、親戚や地域の関わりにおいては、核家族化・少子化・犯罪増加・都市化等の影響により近年では特に希薄化しており、この大きな四つの問題により親の育児不安・負担の増加、子ども一人遊びの増加という新たな問題も生じている現状である。

現在、これらの問題を緩和する為に様々な活動が日本各地で行われている。例えば、乳幼児の子どもを持つ母子家庭や共働きの家庭においては、延長保育や夜間保育、休日保育、一時保育、

緊急・一時的保育等、それぞれの家庭状況に合った施設を利用することができ、それらの施設は子育ての悩み相談や情報提供の場としての役割も担っている為、親の育児不安の軽減にも繋がっている。また、俗に言う鍵っ子に対する対応としては、学童保育や学校での校庭使用時間の延長、地域子ども教室、放課後児童クラブなどの活動があり、地域住民の参加・協力により子ども達が安心して活動ができるように、また、一人で過ごす時間を極力なくし、周りの子どもや大人との触れ合いを通してたくさんの経験ができるように取り組まれている状況となっている。

2 章 子どもと虐待

2010 年の 7 月、全国 201 か所の児童相談所が 2009 年度に住民から受けた児童虐待の相談件数が前年度に比べて 3.6%増の 4 万 4210 件に達し、19 年連続で増加している事が明らかとなった。このように、児童虐待が増え続けている現状であり、また、報道等で虐待に関するニュースを多く目にするようになったが、私達は虐待の悲惨さや残忍さについて本当に理解しているのだろうか。そこで、この章では虐待の具体例を紹介して虐待について関心を深めていく事にする。

2.1 節 4 つの虐待

ネグレクトとは、いわゆる育児放棄の事である。ネグレクトの主な原因としては、保護者の育児等による精神的ストレスや身体的ストレス等が言われている。これらのストレスを上手く発散する事が出来ず、溜めこんでしまう保護者がネグレクトを起こし易いのである。乳児期に挙げられる例としては、オムツを交換しない事や母乳（ミルク）を与えない、泣いているのにそれに応えようとしない等がある。その為、子どもは泣いても保護者の反応が無い事を学習して次第に泣かなくなり、周囲の大人からはおとなしい子と呼ばれる事もある。近年では、このような子どもを「サイレントベビー（泣かない子ども）」と呼んでいる。

平成 20 年度厚生労働省「児童虐待相談の対応件数」の中で最も多かった身体的虐待は、他者による意図的もしくは非偶発的な損傷を指すものである。身体的虐待の主な例として、子どもに対して外傷が生じる、又は生じる恐れがある程の殴る・蹴る等の暴力、煙草の火等を押しつける、逆さ吊りにする、戸外に長時間締め出す等がある。また、心理的虐待とは、児童虐待防止法によると「児童に著しい心理的外傷を与える言動を行う事」とある。例えば、言葉による暴力、恫喝、無視や拒否、自尊心を踏みにじる事であり、保護者側に認識のない虐待例としては過干渉等が挙げられる。最後に、日本では一般に「性的虐待」と言うと家庭内児童性的虐待の意味で用いられる事が多いが、これは日本で未だ児童性的虐待への関心が浅く、子どもにとって密接とされている家庭内のみに注目が集まっているからである。しかし、欧米では社会における性的虐待への関心が深い為、加害者は誰でも良いと認識されている。

2.2 節 虐待の実例

世の中で実際に起こっている虐待は前節で述べたように単純なものではない。虐待を議論する上で何らかの分類を行うことは必要なことではあるが、実際、虐待に至る経緯は 1 つ 1 つ異なるものであり、その悲惨的・残忍的・非人道的事実は時に想像を絶するものである。よって、虐待が机上の議論に偏らない為にも、ここではいくつかの虐待の実例を紹介する。

初めにネグレクトの実例について、この事件は 2006 年 10 月 30 日に被告である母親が自宅に鍵を掛けた時から始まる。母親は長男と三男の存在を疎ましく思い、部屋に放置して餓死させることを考えた。母親は子どもにチャーハンを食べさせた後、12 月初旬まで交際相手の家へ行ったまま、再び自宅の鍵を開けるまで 1 ヶ月間以上 2 人の子どもを放置した。2 人の子どもは飢えの

中で苦しみ、幼い三男は餓死したが、長男は生の米や生ごみや冷蔵庫にあったマヨネーズを食べて命を繋いでいた。母親は裁判の中で、長男が「ママ、遅いよ」と駆け寄って来たと証言している。自分を放置したのも拘わらず「ママ、遅いよ」と駆け寄る姿は想像に堪えないであろう。そして、生きていた長男にとっては弟の遺体を横に生活した体験は地獄であったに違いない。

次に性的虐待の実例について、被害者の子どもは実母・義理の父・義理の父の子ども三男四男と共に暮らしていた。被害者の生活年齢は 15 歳であるが、知的能力に遅れがあり精神年齢は 10 歳程であった。母親は食事を作らずにパチンコに熱中して、義父は定職には就いておらず、酒を飲むと人が変わったように暴力を奮っていた。義父が暴行を始めたのは被害者が小学校 5 年生の時からであり、中学校 1 年生の頃には性的暴行にエスカレートしていった。更に衝撃なことに、義父のみにならず、三男からも性的な悪戯をされていた。しかし、母親は事情を知っていても子どもを守ろうという気持ちはなかったのである。加えて、義父と三男は全く処罰されていない。

最後に身体的虐待の実例について、この事件は 2 歳の次女を両親が虐待死させた事件である。両親は 6 月中旬ごろから 7 月 5 日未明頃までの間、自宅で次女に殴るけるなどの暴行を加え、熱湯を頭にかける等して敗血症で死亡させた。2 人は事件当日の 6 時半頃、「様子がおかしい」と市内の病院に次女を連れてきたが、すでに心肺停止状態となっており間もなく死亡が確認された。頭にやけどを負い、長期に渡り全身に暴行を受けたとみられるあざや傷があり、不審に思った病院側が警察に通報して、司法解剖の結果、死因は頭のやけどの傷を放置したこと等による敗血症であることが明らかとなった。家族は 5 人暮らしで、3 歳の長女と生後 8 カ月の長男がいるが、長女や長男に虐待の形跡はなかった。しかし、近隣から「夜になると子どもの泣き声や、叩く音が響いていた」との証言があり、両親は「食事をするのが遅いから殴った」と供述している。

3 章 先進国と発展途上国の子ども達

現代では格差社会という言葉をよく耳にするが、それは国内という範囲に止まらず国レベルに達しているのが現状である。すなわち、私たちが暮らす日本は先進国であり、世界的に見ても豊かな国であるが、一般的に貧しいとされている国に暮らす人々はどのような暮らしをしているのだろうか。そこで、この章では貧しいと言われている発展途上国に暮らす人々の暮らし、特に、子どもの暮らしについて考えていくことにする。

3.1 節 先進国と発展途上国の食

現在、世界の 67 億人中で先進国を中心として 10 億人が肥満の食に起因する生活習慣病に苦しんでいる。一方、発展途上国では 10 億人以上が飢餓あるいは栄養不良の状態にあり、5 秒に 1 人子どもが飢えで命を落としている。しかし、穀物は年間 19 億トン生産されており、これは世界中の人が生きていくのに必要な量のおよそ 2 倍に相当するのである。では、なぜ飢えという問題が起こり、また、たくさんの穀物はどこへいつているのだろうか。

日本人のように食べるものがいつでも十分手に入るのは、世界のおよそ 2 割であり、生産された穀物は人間が食べるだけではなく、先進国では穀物の 6 割（約 4 億トン）が、ウシ・ブタ・ニワトリ等の家畜の餌に使われている。その結果、世界の 2 割足らずの先進国に住む人達が世界の穀物の半分以上を消費しているのである。また、豊食と言われている日本では食品の約 7 割が世界から輸入したものであるが、年間 5800 万トンの食糧を輸入しながら、その 3 分の 1 (1940 トン) を捨てているのが現状である。これは、世界一の消費大国アメリカを上回る食糧廃棄率となっており、廃棄量は世界の食糧援助総額量 740 万トンをはるかに上回り、3000 万人分（途上国の 5000 万人分）の年間食糧に匹敵するのである。

これらの問題の大きな解決活動として「TABLE FOR TWO（二人の食卓）」という支援活動が各

国で行われている。この活動は対象となるカロリーを抑えたヘルシーな定食や食品を購入すると、1食につき20円（開発途上国の給食1食分の金額）の寄付金がtable for twoを通じて開発途上国の学校給食になるという仕組みとなっており、支援する側は生活習慣病の改善、支援される側は飢えの改善と双方にメリットがある。また、村ごとに特産物を育てることでマーケットが形成され、地域経済の活性化を目的とした「一村一品運動」という支援活動も行われている。このように、より良い環境を形成する為に多くの人々が支援活動に参加している現状となっており、私たちもこの実態に耳を傾け、支援活動に参加することの必要性を考えることが重要なのである。

3.2 節 ゴミ山で働く子ども達

カンボジアの中央から少し南に位置する首都プノンペンでは、日本では考えられないような貧困地域が存在している。それは、埋め立て地である。埋め立て地とは、勿論ゴミを捨てる場所であり、日本では生活できる場とは到底考えられない。しかし、ここには行き場をなくした2,000人もの人々が日々ゴミを拾い生活しているのである。プノンペン郊外にあるゴミ集積所ストウン・ミエン・チャイでは、毎日トラック約400台以上のゴミが運ばれている。生ゴミ、空き缶、紙くず、プラスチック、ペットボトル等、身分別の様々なゴミが一带の山の様に高く積み上げられていることから、ゴミ山とも言われている。そのゴミ山の中で悪臭と煙と埃にまみれながら働く人々の中に子ども達がいるのである。

約500人の人々がゴミ山でゴミの回収・販売を行っており、過半数は15歳以下の子ども達が現実である。ハエが飛び交う腐臭の中、手作業によって値打ちのあるゴミを集め、それを売ってお金を稼いでいるのである。朝の6時から夕方6時まで働き、大人で約2\$、子どもでは約1\$が平均的な収入となっており、この中から食費、土地代、家賃を払っている。

種類	量	リエル	日本円
缶	10 ピース	100	2.5
瓶	4 ピース	100	2.5
鉄	1kg	200	5
銅	1kg	3,000	75
アルミニウム	1kg	2,500	62.5

4,000 リエル=1\$

ゴミ山の合間に小屋を建て生活している家族もあり、彼らは貧困や最悪の衛生状態の為、慢性的な栄養失調となっている。具体的には、見た目は7歳位であるが実年齢は13歳である等、成長の遅れの目立つ子どもも多い状況である。そして、ここからは自然発火しダイオキシンを含んだ有毒ガスの煙が常に充満している為、子ども達は肺病や皮膚病に犯されている現状なのである。

3.3 節 ヨーロッパ中心の薬まみれの子ども達

ルーマニアの首都ブカレストには、約1,000人位のストリートチルドレンがいると言われている。これらの子ども達が自分達の家を捨てた理由は様々であるが、平均して挙げられるのが極端な貧困、深刻な家族内のいさかい、虐待、ネグレクト、親のアルコール飲料や薬物等への中毒（依存症）に絡んだ家庭崩壊である。家庭での辛い記憶と路上での厳しい暮らしに耐えかねて、シンナーや麻薬に手を出してしまう子どもや犯罪に手を染めていく子どもが多数いるのが現状である。また、その様な子どもに麻薬密売をさせ、小遣いにお弁当やシンナーを与えているという大人も存在しており、麻薬に手を染めてしまうのは子どもの場合であっても「自己責任」と考えて無関心な国もある。

大麻等のソフトドラッグ使用者が多いオランダではソフトドラッグを完全追放できないと考え

ている。これを禁止法で押さえ付ければソフトドラッグがハードドラッグと同じ闇市場に出回り、結果としてソフトドラッグ使用者がハードドラッグ使用に走る機会が増すことにより薬物による害を増やすことになると考え、オランダの薬物政策では以下の二つの原則としている。

1. 薬物使用は公衆衛生の問題であり、犯罪ではない。
2. 薬物による害を減らす。このため、ハードドラッグ（コカイン等）とソフトドラッグ（マリファナ等）を政策上明確に区別する。

この政策をカバーしていく動きとして、ハームリダクション政策がある。これは、公衆衛生及び薬物害の見地から薬物使用者に対するサポートをしていく政策である。具体的には、HIV 予防の為に薬物使用者に注射針を提供して、薬物使用者である拘留者の為に拘留施設を設けている。この拘留施設では、薬物使用に対するカウンセリングや社会復帰プログラムを組んでいる。隣国ベルギーでも現在オランダモデルに近づいている現状であり、ヨーロッパにおける薬物汚染が懸念されている状況である。

薬物は社会にとって有害であると考え、一部の薬物を一般的に認めている国が存在していることも事実である。しかしながら、子どもが麻薬に手を染めてしまうことは、その子ども達の周りの環境に問題があることは言うまでもなく、私たち大人は薬物、および、薬物の現状について、しっかりと認識を持つことが必要なのである。

まとめ

これまで述べてきたように、現代の衣・食・住は子どもが生活する上でより良い環境へと進歩しているが、それぞれ与えられた環境の影響により発育に支障を来していることやアレルギー反応を引き起こす等、子ども自身に現れる悪影響が存在することも事実である。また、核家族の増加による人間関係の希薄化や育児の相談相手が存在しないという事から生じる育児ノイローゼ等、親の心の貧困が原因となり、子どもへの虐待が年々増加していることも忘れてはならないことである。一方、途上国では金銭的な貧困により、日本人の想像を遥かに超えた環境で生活し働いている子ども達が存在しており、環境の悪さから成長発達の遅れや肺炎等の病気と常に隣り合わせという過酷な現実、また、薬まみれの子どもやストリートチルドレン等が諸外国に多数存在している現状である。

以上のように日本を含め世界では金銭的な貧困や心の貧困による「大人の都合」の中に子ども達の生活環境は置かれている。しかし、その中で子ども達は懸命に生きている事実について、いかなる原因であろうと現代に生きる子ども達の衣・食・住を十分に把握して、真剣に考えていくことが大人の責任であることは言うまでもないことである。勿論、世界には数えきれない程の貧困が存在しており、それら全てを裕福にすることは不可能に近いのかもしれないが、この現状を一人一人が知り、考え、実行していくことが重要なことなのである。

乳幼児教育

畠山 美桜 林 真菜実 門出 梨紗子

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

現在、少子化や女性の社会進出に伴い、乳幼児教育や早期教育が注目を集めている。具体的には、モンテッソーリ教育やシュタイナー教育、ヨコミネ式教育等の教育法が挙げられ、早期に教育を開始することで脳の神経回路を増やして天才児を育てる事や絶対音感を身に付ける事が可能になるという成果が上げられている。このような能力は誰もが魅力的に感じるものであるが、その反面、能力を身に付けることだけに固執することにより子どもの精神的な負担や協調性・道徳心等の社会で生きていく上で大切となる社会性が欠如する等、様々な問題が生じていることも事実である。このような問題に対して、どのように対応していくかが今後の教育の課題であり、子ども達の健やかな成長にとって重要なことである。そこで、本研究では乳児教育が注目を集めている理由を明らかにすると同時に、表面上は利点のみを謳っている様々な教育法の裏側に存在する問題点について詳しく考察していくことにする。

1 章 乳幼児教育の概要

最近、乳幼児教育というものが注目を浴びている。その背景として、少子化や女性の社会進出が挙げられるが、私達はその背景や社会で行われている施策についてどれだけ知っているのだろうか。そこで、この章では乳幼児の発達段階について理解すると共に、日本と世界で具体的に行われている教育方法について詳しく述べていくことにする。

1.1 節 乳児教育

乳児は話すことが出来ないが、乳児の脳細胞は母親の声や息遣いに反応していることはよく知られていることである。そのようにして2～3歳に成長する過程で言葉を使う時に働く神経回路ができつつある為、乳児を抱く時やおむつを換える時、または、授乳の時等は積極的に話しかけることが大切なのである。更に、胎内では低周波の音を聞いていた胎児であるが、生まれたばかりの新生児は高周波の音をよく聞きわけることが解ってきた。大人が乳児に話しかける時には誰もが自然に高い声になるが、これは乳児にとって最適なことなのである。また、乳児は声を出したり、目で追ったり、手でつかんだりして与えられた刺激に対しての理解を深め刺激に対して積極的に反応することで脳の発達が促されている。すなわち、1ヶ月～3ヶ月半頃の乳児はおもちゃの色や形の違いを理解していく為、握る事やつまむ事、また、それを離せるようになることが大切なのである。

平均的に2歳前後で発話が始まるが、言語の基礎として最も重要なことは、言葉を発する前の段階で話題の対象を相手と一緒に注視したり、指差しで対象を示す力が育まれていることである。こうした言語の基礎を育む為には、応答的に子どもと関わる必要がある。応答的とは、子どもの動作や声に対して言葉や視線、表情の変化、動作などで積極的に応え、新たな子どもの言葉や行動を促進する働きかけのことである。また、2歳前後は第一次反抗期の始まりでもある。この頃になると子どもは自我が芽生え徐々に自己主張が強くなる。しかし、自分の主張があっても言葉が未熟で上手く表現することができず、また、表現方法も分からない為癇癪を起すのである。子どもによってその度合いや時期に個人差はあるが、それにより子育てに壁を感じるという親も少なくないのである。しかし、第一次反抗期は子どもにとって大切な成長過程であり、親に

お問い合わせ先：〒814-0198 福岡市城南区別府5丁目7-1 中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治研究室 mail:hashimot@nakamura-u.ac.jp

とつても子どもとの接し方や叱り方等を試行錯誤していく時期である。子どもが癇癢を起こした場合は、抱きしめる等して、まず子どもの気持ちを落ち着けることが必要である。そして、落ち着いてきたら子どもの気持ちを言葉にして受け止めることが大切である。勿論、子どもの主張をすべて受け入れるわけにはいかないのであるが、その時は初めからいけないと叱るのではなく、まずは子どもの気持ちを受け止めてから「なぜいけないのか」を子どもが納得できるように分かりやすく伝えることが必要なのである。

1.2 節 幼児教育

幼児教育とは、一般的には幼児に対する教育を意味しており、幼児が生活するすべての場において行われる教育を総称したものである。具体的には、幼稚園における教育、保育所等における教育、家庭における教育、地域社会における教育を含む広がりを持った概念として捉えることができる。しかしながら、小学校と同様に初歩的な教育として考える意見も多いが、従来から使われてきた「保育」こそが幼児に相応しく、小学校以上の「教育」とは一線を引くというような意見も存在している。そのような中、現在世界では幼児期からの算数教育、言語教育、音楽教育等、様々な幼児教育が行われている現状である。

幼児教育指導法の歴史的系譜を見てみると、主なものとしてコメニウス(1592-1670)の感覚的指導法、ルソー(1712-1788)の自然主義的指導法、ペスタロッチ(1746-1827)の直感的指導法、フレーベル(1787-1852)の遊びによる指導法、モンテッソーリ(1870-1952)の集中作業による指導法、倉橋惣三(1882-1955)の誘導保育論等が挙げられる。コメニウスは幼児期の教育を教育全体の中に位置付け、体系的な幼児教育論を初めて公刊した人物であり、コメニウスを中心として近代教育が本格的に論じられることとなった。その後、「大人になる前に子どもがどういう存在であるか」といったコメニウスをはじめとする先人達の議論には見られなかった哲学的思想を含めた幼児教育論がルソーによって論じられるようになった。そのような中、ペスタロッチはルソーの教育思想に大きな影響を受け、教育によって貧民を救済することを考え、その生涯を捧げたのである。そして、その精神は弟子達に受け継がれ、ペスタロッチの下で学んだフレーベルは「子どもは生まれたときから創造的である」と考え、幼児の心の中にある神性をどのようにして伸長していけるかについて腐心し、小学校就学前の子ども達の為の教育に一生を捧げ、その功績が現在の幼稚園へと繋がっているのである。その後、時代の流れと共に現在にも残る様々な幼児教育が誕生した。集中作業による指導法を唱えたモンテッソーリは、モンテッソーリ・メソッドの創始者であり、また、モンテッソーリ教具とよばれる一連の体系的な教具の発案者でもある。モンテッソーリ・メソッドは日本のいくつかの保育施設等でも現在取り入れられており、その教育実践が行われる施設は「子どもの家」、または、モンテッソーリ・スクールと呼ばれている。その他にも、フレーベルを深く研究した倉橋惣三は誘導保育論を唱え、その保育思想はフレーベルの保育思想を形式だけでなく精神そのものを大切にすることであった。そして、倉橋惣三の保育思想は大正時代の初期から第二次世界大戦後までの長い間、日本の幼児教育界において指導的役割を果たし続け、その理論・実践は当時の日本の幼児教育に極めて大きな影響を与えることとなった。

現代の幼児教育には様々な教育法が用いられている。有名なものとしては、子どもの自発性・内発性を重視する「モンテッソーリ教育」、想像力で遊ぶ事を重視する「シュタイナー教育」等である。また、最近注目されている教育法として、横峯吉文氏が鹿児島で行っている「ヨコミネ式教育」がある。ヨコミネ式教育は、「子どもは競争が大好きである」「子どもはマネしたがりでである」「子どもはちょっとだけ難しいことをやりたがる」「子どもは認められたがりである」という4つのポイントに集約されている。これらのポイントに沿って子ども達それぞれに合ったトレーニングを行い、年長児の50m走の平均タイムが全国の小学2年生の平均タイムと同程度であったり、跳び箱10段が跳べたりという体力面での成果、および、全員が小学校低学年の本を読めるようになったり、全員が絶対音感を身に付ける等の知的な面における発達の成果が報告されている。

2 章 乳幼児教育の利点

最近、乳幼児教育の中で早期教育が注目を集めている。その背景として、脳が柔軟で高い吸収能力や順応能力が高い幼い間に教育を開始する事で、脳の活性化を高め、優秀な人間に育てたいという大人の期待がある。そこで、この章では実際に早期教育にはどのような利点があるのかを述べていくことにする。

2.1 節 早期教育の利点

早期教育には多くの利点がある。例えば、音楽には絶対音感というものがあり、小学校から音楽を始めても絶対音感には身に付きにくいと言われている。また、英語のヒヤリングも大人になってから習得するのは難しいと言われている。これら二つに共通することは音の周波数である。具体的には、英語の周波数と日本語の周波数を比較するとかなりの差があり、大人になるに連れて日本語の低い周波数に慣れる為、英語の高い周波数を聞き取ることが難しくなってくる。しかし、幼い頃は高い周波数も聞き取ることができる為、この時期から英語の高い周波数を聞き続けることで、簡単に英語を習得することができるのである。この他にも、早期教育は脳の発達においても大きな影響を与えることが最近の研究で明らかとなっている。脳にはシナプスという記憶や学習に重要な役割を持つ神経回路の結合部があり、シナプスが多いほど記憶や学習に良い影響があるが、シナプスが人生の中でも最も急激に増える時期が3歳までの間だということが明らかとなった。そのため、この時期にシナプスを増やすような刺激を赤ちゃんに与えることで、脳の様々な回路がつながり、天才児を造ることも不可能ではないと考えられている。このように幼い時期にしか身につけられない能力を習得することができるという点が早期教育のメリットなのである。

ここで、ヨコミネ式教育法における「読み」「書き」「音楽」の利点について述べていく。ヨコミネ式教育を実施している幼稚園では3歳の夏にはひらがな・カタカナの拾い読みが出来るようになり、拾い読みが出来るようになると子ども達は自ら進んで本を読むようになり、6歳の冬には1500冊～2000冊もの本を読破するのである。また、ヨコミネ式教育法ではひらがな・カタカナは独自の「ヨコミネ式95音」というものを使って覚えている。子どもに文字を教える時、五十音の最初である「あ」から教えることは常であるが、「あ」は曲線が多く、バランスや書き順が複雑である為、初めて文字を書く子どもには難しい。そこで、画数が少なく子どもが簡単に書ける文字から順に95音並べたのが「ヨコミネ式95音」である。また、耳の良い乳幼児から音楽に親しむことで、3歳の夏にはピアノを始め、5歳までには60曲ものレパートリーを持つようになる。そして、ピアノ以外にも鉄琴、木琴、キーボード、ドラム等を演奏することが出来るのである。以下にヨコミネ式95音一覧表を示している。

【ヨコミネ式95音 一覧表】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
一	丨	十	ニ	エ	ノ	イ	テ	ナ	ハ	フ	ラ	ヲ	リ	サ	ヘ	ト	コ	ヨ	レ	ル	ホ	オ	カ	メ
26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
ワ	ウ	ス	ユ	ロ	ミ	ク	タ	ヌ	マ	ア	ヤ	セ	ヒ	モ	ケ	ム	キ	チ	ネ	ソ	ン	シ	ツ	ヘ
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
り	く	つ	し	い	こ	に	た	け	も	う	て	と	ち	ろ	る	ら	か	の	ひ	せ	さ	き	よ	ま
76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95					
は	ほ	わ	れ	ね	め	ぬ	す	み	や	そ	な	お	ゆ	を	ふ	え	ん	あ	む					

次に、モンテッソーリ教育法とは子どもの自発性を重んじる教育法である。モンテッソーリ教育法では、子どもに自由な環境を提供して、子どもの活動の基礎となる知的好奇心が自発的に現れるよう工夫されており、その自由な環境の中で子どもは自分のペースで興味や関心のある活動に満足するまで取り組み、達成感や充実感を得ると共に物事を考え、判断する力を身につけている。また、モンテッソーリ教育の特徴は感覚教育にある。感覚の敏感期にある3歳から6歳の子どもに各感覚を個別に取り上げ訓練する為に創られた感覚教具を用いることで、抽象概念がより容易く、また、正確に捉えられるようになると共に各感覚の洗練や秩序感の形成、精神の集中を狙っている。

最後に、シュタイナー教育は人間の成長について深い洞察に満ちた思想であり、哲学者でもあるルドルフ・シュタイナーの人間観に基づいた独特な教育である。その教育観は成長の節目を7年ごとに捉え、0歳から7歳までの第一7年期では「意識」の形成、8歳から14歳までの第二7年期では「感情」の形成、15歳から21歳までの第三7年期では「思考力」の形成に重点を置いている。具体的に、第一7年期の課題は体を作ることである。幼児期に丈夫な体を作ることによって、それが将来の思考力や行動力を生み出す源になると考えている。第二7年期では芸術的刺激を与えることで生き生きとした感情を育み、「世界は美しい」と感じられる教育を目指している。また、第三7年期では表象活動の活発化が課題となる。明晰な表象活動により「世界は真実に満ちている」ことをはっきり理解する教育を目指している。そして、シュタイナー教育を終えて社会に出た時、自分自身で考え、行動できる人間の育成を最終的な目的としているのである。実際にドイツでは公立学校と比較してシュタイナー学校の卒業生の大学進学率が高い傾向にある。

2.2 節 乳幼児教育と出生率

現在、子どもの教育において「子ども手当」が注目を集めている。これは、家庭の子育てを支援する為に予算を増やして、子育てを個人の問題ではなく社会全体の問題として考えて支えていくことで「子どもを安心して産み育てることができる社会の構築」を目指しているのである。

このような施策の背景として、近年、幼稚園や保育園により良い教育が求められる。具体的に出生率が国内1位の沖縄県に目を向けてみると、沖縄県那覇市の「那覇市幼児教育振興アクションプログラム」が策定され、このプログラムでは幼稚園・保育園の質の向上を目指しつつ、家庭や地域社会の教育力の再生・向上にも重点を置こうとしている。そして、このプログラムの目的として、家庭は愛情やしつけなどを通して幼児の成長のもっとも基礎となる心身の基盤を形成する場であり、地域社会は様々な人々との交流や身近な自然との触れ合いを通して豊かな体験を重ねる場と考え、そして、幼稚園や保育園等は家庭や地域との連携を保ちながら家庭教育の結果としての子どもの成長を受け、そこで行われる集団活動や遊びを通して、社会、文化、自然に触れ、幼児期の豊かな感性に出会う場と考えられているのである。

このように、教育の場を幼稚園・保育園だけに留めるのではなく、家庭や地域社会にも範囲を広げ、親としての責任、役割を明確にすると共に地域の多様な人材との積極的な連携を進めなければならないと考えられている。子育てや教育を幼稚園・保育園や家庭内だけでなく地域社会の問題として積極的に取り組もうとする姿勢が子育てをしやすい環境を造り、出生率が国内1位という結果に繋がっているのである。

3 章 乳幼児教育の問題点

前章では早期教育の利点について述べたが、それと同様に早期教育には様々な問題点があることも指摘されている。それは、優秀な人間に成長してほしいという親の期待に対して、子どもにはそれぞれ個性があることや親の希望と子どもの希望が一致しないこと等、必ずしも早期教育が

子どもにとって最善の利益とはならないということである。そこで、この章では早期教育が持つ問題点を様々な観点から考察していくことにする。

3.1 節 早期教育への批判

早期教育は、乳児・幼児・小学校低学年等の子どもには無駄、または、弊害があるという説もある。これらの主な批判意見として、①有効性に対する科学的な観点からの批判、②子どもへの悪影響を危惧する立場からの批判、③親子関係への悪影響を危惧する立場からの批判、④社会への悪影響を危惧する立場からの批判の4種の主張に分けられる。

①の具体的な例として、早期教育論者は大脳生理学的に才能逡減の法則や右脳・左脳論等を捉えているが、その大脳生理学は早期教育論者にとって都合の良いように解釈されているものであり、必ずしも科学的な根拠のあるものではないのである。また、3歳までに急激に脳の重さが増えるということから3歳までに教育を開始し、シナプスを増やさなければ手遅れになると言われることがあるが、3歳までに脳が重くなるということは「構造」が出来上がるだけであり、必ずしもその「機能」が発達する訳ではない。つまり、その考え方は3歳までの家庭環境が人格を左右するという、いわゆる「3歳児神話」の一種でしかないのである。次に②の批判の例として、十分な認識力や判断力等が育つ以前に文字や数だけを取り出して概念的な認識の獲得をさせようという知育に偏る教育は「総合的な学習」に反するものであるという主張や早期教育で年齢相当の学習内容を終えてしまっている子どもは学校の授業が退屈で浮きこぼれ状態になってしまうのではないかな等の主張がある。また、子どもにとって本来の遊びがなくなることも懸念されている。そして、③の批判については、子どもが学ぶことに対して大人の評価や親の価値観が侵入してくることが問題であるとされている。子どもに無言のプレッシャーを与えていないか、過度の期待は子どものストレスを増大させるのではないかな、親は自分の不安を紛らわす為に親自身が達成できなかったことを子どもに実行させようとしているのではないかな、等の主張がある。最後に④の批判については、もし今後早期教育が効果的であると科学的に証明された場合、現在の学校制度の枠内では経済的に豊かな一部の恵まれた子どもだけが幼少、あるいは胎児の時から早期教育を受けることができるという経済格差に起因する学力格差を生む可能性があるという主張が主である。

これらのように早期教育には悪影響が懸念される部分もあるが、現在では早期教育に対し反対意見を唱える人も多いのである。

3.2 節 早期教育の具体的な問題

早期教育にはいくつかの問題があることも指摘されている。そこで、ここでは具体的にヨコミネ式教育法の体操に注目して考えていくことにする。ヨコミネ式教育法では全ての子どもが逆立ちや跳び箱等、あらゆる運動ができるようになる事を目的として活動を行っているが、子どもにも個性があり、中にはマイペースな子どもや運動が苦手な子どももいる。そのような個性を無視して、「できるようになる事」だけに固執しようと、反って運動に対して苦手意識を持つ子どもや運動嫌いになってしまう子どもが少なからず出てくる。また、ヨコミネ式教育法では運動において、勝つ事・できるようになる事に重点を置いており、競争心を教え込む為、中には運動が苦手な子を馬鹿にする子がいたり、いたわる・助け合う・思いやるといった道徳性を学ぶ機会が少なかったりと様々な問題点が挙げられる。勿論、幼いころから多くの事を身に付けるのは悪い事ではないが、ある部分にだけ力を入れ過ぎてしまうと別の部分で何らかの問題が生じてしまうことも事実であり、忘れてはならないことである。

次に、子どもの自発性を重んじるモンテッソーリ教育法について考えていくことにする。モンテッソーリ教育は前章でも述べたように、子どもの活動の基礎となる知的好奇心が自発的に現れ

るよう子どもに自由な環境を提供して、その自由な環境の中で子どもは自分のペースで興味や関心のある活動に満足するまで取り組むという教育法であり、この教育法で子ども達は個々の能力を高めることが出来るのである。しかし、常に自分のペースで黙々と作業を行ってきた子ども達は、成長して社会に出たときに欠かすことのできない協調性を学ぶことは出来ていない。すなわち、モンテッソーリ教育を受けている最中は良いかもしれないが、子ども達が成長して様々な環境の中で生活していくことを考えると、集団の中で協調性を学ぶことの方が大切なのである。

3.3 節 韓国の英語教育

近年、韓国政府は英語教育を強化するという方針を公式に発表して、1997年には小学校での英語教育を義務付けた。それに伴い、現在では未就学児への英語教育がほぼ全ての幼稚園や保育園でも行われている状況であり、中には英語幼稚園というものが人気を集めている。英語幼稚園とは、ネイティブスピーカーの教諭を中心として園内での会話や授業を全て英語で行っている幼稚園のことである。その費用は年間 1800 万ウォン（日本円に換算して約 128 万円）に上ると言われており、韓国の私立大学の平均的な年間授業料と比べても約 2 倍の金額となっている。韓国の平均年収は 3500～4000 万ウォン（250～285 万円）であることから分かるように、韓国では教育費の占める割合が非常に高く、経済的な格差が教育の格差を生み出しており、更には、韓国の少子化へと繋がる可能性が懸念されているのである。

韓国の英語教育を象徴しているのが「キログアッパ」である。「キログ」とは渡り鳥の雁、「アッパ」とは父親のことで、早期留学で海外に滞在する家族の為に韓国に残り単身で働く父親を指している。親は少々家計が苦しくても早期留学をすることによって子どもの英語の習得を期待しているが、実際に早期留学を経験した子どもの中には母国語の低下や長い海外生活でのストレスによって精神的に不安定になるケースもある。また、家族が離れて生活していることや経済的な理由から家庭が崩壊して、それが子どもにとって大きな精神的負担となることがある。

以上のことから、韓国政府は教育にも競争と市場論理を適用して、国際社会に通用する人材を育成するという教育方針を掲げているが、急速に英語教育を進めたことにより、家庭や子どもへの負担が大きくなっていることも事実である。そして、あくまで優先すべきなのは母国語と母国文化の教育であり、英語教育はその延長線上に考えなければならないのではないだろうか。

まとめ

これまで述べてきたように、乳幼児教育・早期教育は現代の少子化や女性の社会進出等の現象により大変注目され、日本だけでなく世界においても乳・幼児期からの算数教育、言語教育、音楽教育等、様々な教育が行われている。そして、絶対音感の習得やヒヤリング等の幼児期にしか身に付けられない能力を体得する等、多くの成果が報告されており、子どもの成長において利点となる部分が多くあることも事実である。しかしながら、子どもや社会に悪影響を与えると危惧する意見が多いことも事実であり、社会や大人が子どもの最善の利益を考慮することは言うまでもないが、それを考慮するのは誰であるのか、それが本当に子どもにとっての最善であるのか、それを判断することは難しいことである。従って、子どもの最善の利益の名の下に押つけの教育とならない為にも十分な注意が必要であり、悪影響が懸念されているものは思い切って取り止める等、また、現在は見つかっていない悪影響に対する改善策について研究していく等、未来を担う子ども達の為に大人や社会が真剣に考え続けることが重要なのである。

日本で人気のアニメについて

猪口 真理恵 岩田 志帆
中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

アニメは1963年のテレビアニメ放送開始以来、昔も今も変わらず幅広い年齢層から愛され続けており、私達の生活と密接な関係にあると共に、今日では世界中で受け入れられる日本の代表的な文化となっている。その理由としては、アニメは単に見て楽しむだけのものではなく、子ども達に多くの夢や希望を与え、生涯に渡り文化や伝統の継承といった大切なことを伝えているからである。しかしながら、アニメが発展するに連れて暴力的な内容を含む作品の増加、視力低下、肥満等、様々な問題が懸念されるようになっている。更に、近年では少年による暴力事件とアニメ番組との因果関係が指摘される等、大きな社会問題の一つと考えられるようになっている。このような様々な影響を与えるアニメについて、少子化時代を迎えた現在、私達は社会全体としてアニメについて理解しておくべきではないだろうか。そこで、本研究では人気高いアニメの作者の生い立ちや作品に込めた思いを紹介していくと同時に、アニメの及ぼす効果や悪影響について考察していくことにする。

1 章 日本で人気のキャラクター

日本には世界にも誇るメジャーなアニメが多くあり、昔から子ども達に愛されている作品も多く存在する。しかし、作品が注目される反面、多くのアニメが映像化されたことにより、私たちはその作者のことはあまり知らないのではないだろうか。それぞれの時代と共に愛されてきたアニメには作者が作品に込めた時代背景を根幹とする思いが込められているはずであり、そこで、この章では日本で人気のアニメの作者や生い立ちを紹介していく。

1.1 節 日本のアニメについて

日本で生まれた子どもに人気のキャラクターとして代表的なものに、アンパンマン・ドラえもん・サザエさんなど多くのものがある。以下では特にこの3つのアニメについて解説していくことにする。

アンパンマンの作者、やなせたかしは1919年2月6日に高知県で産まれた。東京高等工芸学校図案科（現千葉大学工学部デザイン学科）を卒業して、1941年には日中戦争に徴兵され出兵している。高校の先輩である横山隆一や手塚治虫から影響を受け、アンパンマンの他にも「手のひらを太陽に」の作詞やTBS「明石家さんちゃんねる」のオープニングアニメとキャラクターデザインを手がける等、アニメの他にも多くのジャンルで活躍している。アンパンマン誕生のきっかけは、作者が戦争を経験していることが影響している。戦地において亡くなる人を多く見た作者は「人間にとって一番辛いのは飢えること」であり、「ぼくにとっての正義はひもじい人を助けること」という考えから顔がアンパンで出来たヒーロー、アンパンマンが誕生した。

ドラえもんの作者、藤子・F・不二雄（本名は藤本弘）は1933年12月1日に富山県で産まれた。富山県立高岡工芸高等学校電気科を卒業して、小学生時代からの友人であった安孫子素雄（藤子不二雄A）と共に藤子不二雄としてコンビを組み作品を発表した。二人の代表作でもある「オバケのQ太郎」が大ヒットして「ギャグ漫画の藤子不二雄」として広く認知されるようになるが、絵柄が変わったこと等の理由により1987年にコンビを正式に解消した。その後、藤子・F・不二雄が単独で執筆し代表作ともなった「ドラえもん」の他にも「パーマン」、「キテレツ大百科」等

の作品は大ヒットとなったことはよく知られている。ドラえもん誕生のきっかけは、新連載の構想が浮かばないまま締め切りとなり、「わしゃ、破滅じゃー」と叫びながら階段を駆け下り、娘の起き上がりこぼしにつまずいた瞬間、「ドラネコと起き上がりこぼし」というアイディアが結びついたことによると本人は語っている。また、「ダメな人間を機械で助ける」という内容も自分に重ね合わせてこの時に思いついたのである。

サザエさんの作者、長谷川町子は1920年1月30日に佐賀県で産まれた。高校2年生までを福岡で過ごし、父の死をきっかけに東京に転居して高校在学中から昭和期に漫画家、落語作家として活躍した田河水泡に師事し「狸のお面」で漫画家デビューする。サザエさんの他に「いじわるばあさん」、「エプロンばあさん」の代表作がある。当初、サザエさんは1946年に「夕刊フクニチ」に掲載された4コマ漫画であった。連載を打ち切ったり、掲載紙を変更したりしながらも連載は1974年まで続き、その作品数は6477作に及んでいる。また、1948年に映画化されたことをきっかけに、1969年よりアニメ化され、現在に至るまで放送される等、国民的アニメとなっている。

1.2 節 日本で人気の世界のキャラクター

子どもに人気のキャラクターで世界的に有名なものにディズニーキャラクターがある。ディズニーキャラクターの代表ともいえるミッキーマウスを知らない人はおそらくいないであろう。そこで、以下ではミッキーマウスの生みの親であるウォルト・ディズニーについて解説していくことにする。

ウォルト・ディズニーは1901年12月5日にアメリカ合衆国・イリノイ州シカゴで産まれた。少年時代から絵を描くことやアートそのものに大変興味があり、7歳の時には自分の描いた小さなスケッチを近所の人たちに売っていたこともあった。青年期を迎えたウォルトは地元のマッキンリー高校に通いながら、アカデミー・オブ・ファインアーツ夜間部で絵を学ぶ生活を送り、学校では学級新聞の漫画欄を担当してその才能の近隣を見せていた。その後、第一次世界大戦を経て広告会社の同僚であるアブアイワークスとアニメ映画会社設立するが倒産、再起を図ったウォルトは映画産業の本場ハリウッドへと移住した。ハリウッドでは兄のロイ・ディズニーと共に「アリスの不思議の国」シリーズの続編商品を販売する会社「ディズニー・ブラザーズ社」を興した。ハリウッドでの43年以上にわたる活動の間、48のアカデミー賞、7つのエミー賞をはじめ数多くの賞を獲得した。そして、「白雪姫」、「ダンボ」、「ファンタジア」といった長編漫画映画を制作、漫画を立派な娯楽として世に定着させることになったのである。

1955年、ウォルトはカリフォルニア州アナハイムに自らの名前を冠したテーマパーク「ディズニーランド」を開設した。これが現在まで続くディズニー社の多面的な経営の基盤となったことは言うまでもない。ウォルトはディズニーランドのオープン時のスピーチの中で、「私はディズニーランドが人々に幸福を与える場所、大人も子どもも、共に生命の驚異や冒険を体験し、楽しい思い出を作ってもらえる様な場所であってほしいと願っています。」と宣言した。その「誰もが楽しめる」というファミリーエンターテインメントの理念は、今でも各ディズニーのパークで受け継がれている。一方で、ウォルト・ディズニーの「哲学」としての人種差別、性差別思想を内包した人工的で画一的な「テーマパーク的グローバリゼーション」は、侮蔑と批判を込めた「ディズニー化」の社会学用語を生み、ディズニー社の企業規模の拡大と共に各方面から国際的な批判の対象となっている。

ミッキーマウスの誕生のきっかけはディズニー社が配給手数料のトラブルにより、引き抜き仕事を仕掛けられ、倒産寸前に追い込まれたことから始まる。再建に取り掛かる際、ウォルトはそれまで自社キャラクターであったうさぎのオズワルドに代わる新たな自社キャラクターを必要とした。そこで、ウォルトはそれまでライバルとして登場させていたねずみを主役に抜擢することを決定して、作品監督を委ねられたアイ

ワークスがアレンジを加え、かくして世に知られるミッキーマウスが誕生したのである。ミッキーマウスの登場第一作はサイレント映画として作られたが、第二作「蒸気船ウィリー」で効果音や声を吹き込んで世界初のトーキー映画の短編アニメとしての製作が行われた。尚、この時のミッキーの声優はウォルト本人が演じている。

1965年、ウォルトはアメリカの都市生活の質を問題視して、アメリカ産業の創造性を世界に知らしめる為に未来の実験モデル社会（エプコット）をデザインした。そして、1971年10月にエプコットの地、ディズニーランド、ホテル等を取り入れたウォルト・ディズニー・ワールド・リゾートをフロリダ州に開園した。しかし、自ら生み出した計画の実現を目にすることなく、1966年12月15日、他界したのである。

2章 日本のアニメが人気の理由

前章で紹介したように、日本には子どもから大人まで世代を問わず愛されているアニメが数多くのあり、1963年のテレビアニメ放送開始以来、アニメと私たちの日常は切っても切れない関係にある。このようにアニメが非常に身近な存在となっている現代において、廃ることなく愛され続けるアニメには人気の理由があるはずである。そこで、この章では保育現場や家庭、それぞれの場面におけるアニメの効果について考察しながら、日本のアニメが人気の具体的な理由について考えていくことにする。

2.1 節 情操教育的側面におけるキャラクターの効果

日本のアニメが人気の理由として、感情や情緒を育み、創造的で個性的な心の働きを豊かにする為の教育、および、道徳的な意識や価値観を養うといった情操教育的面があることが挙げられる。アンパンマンを代表とする幼児に人気の高いキャラクター等を主人公にすることで、幼児でも分かり易いストーリーの中に社会のルールやモラル等をわかりやすく織り交ぜて、子どもの精神的発育に資するような友情や思いやり、他人への配慮といった感情や感性を涵養するような「しつけ効果」をねらった作品が多くみられ、幼年層に親しみやすい、擬人化された動物や物が登場する作品が多い。その理由としては、子どもの想像力や集中力を育むことが挙げられるが、それだけではなく、絵本や紙芝居を通して言葉を獲得したり、社会性を身につけることができるからである。また、保育現場でキャラクターを使うことにより様々な良い効果が挙げられる。例えば、子どもが好き嫌いをした場合、保育者が「これを食べたらアンパンマンみたいに強くなれるよ。」と声掛けをすると、子どもはその言葉に促され、嫌いなものを食べるようになる事がある。更に「トントントントンひげじいさん」という有名な手遊びがあるが、その「ひげじいさん」の部分を「ドラえもん」等のアニメのキャラクターに変えて行くと、子ども達はよく知っているキャラクターに親近感を抱き、手遊びをより一層楽しめるようになる事もある。このように、様々な場面でキャラクターを使う事により、子ども達のやる気や興味を引き出す事が出来るのである。

2.2 節 家庭での保育におけるキャラクターの効果

家庭では親や祖父母が子どもに誕生日やクリスマスのプレゼントとしてアニメのキャラクターグッズを贈ることが多々あるが、その理由としては「子どもが喜ぶから、子どものおねだりに根負けして」といった意見が大半を占めており、子どもが夢中になるアニメキャラクターが次々と変わりゆく中、キャラクターグッズの中でも流行り廃りがあるシリーズものよりも、「アンパンマン」や「ディズニー」、「ハローキティ」といった親子共に愛される定番のキャラクターが支持さ

れているのが現状である。また、人気のあるアニメキャラクターはおむつやおまる、哺乳瓶といった育児用品としても多く使われている。その他にもキャラクターものの衣類や寝具、食器、歯ブラシ等があり、家庭においてアニメキャラクターはとても身近なものとして親しまれている。

アニメグッズの効果として、子どもの基本的な生活習慣を身につける際に役立つことが挙げられる。生活のあらゆる面にキャラクターを用いることで、食事や排泄、着替え等といった子どもが嫌がる生活習慣もキャラクターによって興味を持ち、子どもは進んで楽しく行うことができるのである。更に、近年日本では少子化による子ども一人にかかる期待と費用の増加やゆとり教育に対する危機感とその解決法としての先取り教育、受験準備の低年齢化といった要因から超早期教育や幼児・就学前教育といった種類の「早期教育」を積極的に導入する家庭が増加しているが、そこにもキャラクターの効果を覗うことができる。例えば、「早期教育」の教材として積み木やパズルといった様々な知育玩具があるが、「アンパンマン」等のキャラクターを取り入れたものの人気が高く、幼児用知育教材においても有名な教材には「ディズニー」や「ドラえもん」、「しまじろう」といった子どもたちに人気のキャラクターが登場している。

このような「早期教育」の教材としてのキャラクターの効果として、親しみのあるキャラクターと共に学ぶことで子どもの興味を引きやる気につなげることが挙げられている。また、教材によっては学習の進行と共にキャラクターが進化したり、子どもの発達段階に合わせて成長したりと学習意欲を高める様々な工夫がされており、子どもが自発的、継続的に学習すること、および、集中力を高めるといった効果も期待されている。その他にも家庭ではアニメを見る機会が多くなる為、アニメを通して社会性や情緒を育むことや夢を持つことを学べる等の可能性があると考えられている。また、家庭でも絵本や紙芝居を取り入れることにより、前節で述べたような想像力を育むことや言葉を獲得するといった効果も挙げられている。特に、家庭における読み聞かせは、親と子が触れ合いながら楽しい時間を共有することにより、親子の絆をより一層深めていく効果があり、家庭においても子どもの躾や教育等、様々な場面においてアニメキャラクターの効果は大きいものと考えられるのである。

3 章 アニメが子どもに及ぼす悪影響

日本のアニメは子どもの躾や教育等の効果があることから、保育現場や家庭といった様々な場面において受け入れられており、私たちとアニメは非常に密接な関係にあることは事実であるが、その一方で多くの問題を抱えていることも事実である。そこで、この章ではアニメが子どもに及ぼす悪影響を精神的・身体的な面から考察していくことにする。

3.1 節 精神的悪影響

アニメが及ぼす子どもへの悪影響について、例えば1章で紹介したドラえもんやアンパンマンを例に挙げると、ドラえもんでは「ジャイアン」が「のびた」を暴言や暴力でいじめるシーン、そして、それをドラえもんの道具を使って仕返するというシーンがある。これは、友達に暴言を吐いたり暴力を振るう事、それを仕返す事を子ども達が間違った理解をしてしまい、いじめが増強するのではないかという意見も挙げられている。実際、1982年の総理府青少年対策本部による『青少年の暴力に関する調査研究』によると、学校の教師に対して「暴力をふるったことがある」や「暴力をふるうことを考えたことがある」と答えた子どもは、「暴力を考えたことの無い」と答えた子どもに比べて毎日のテレビ視聴時間が著しく長かった。しかも、暴力を考えたり実行した子どもの中には、「暴力を振るう者を英雄化して賛美するような番組が好きだ」と答えた子どもが大勢いたのである。テレビを見る時間が長くなっても、NHKの「おかあさんといっしょ」や「サザエさん」のような長寿番組なら心の健康・発達に対する問題はそれほど深刻でないかも

しれないが、これらの番組は子どもが見る番組の中では極少数派に属しているのが現状である。

保護者からの意見としては、子どもに見せたくないアニメとして「クレヨンしんちゃん」が日本PTA全国協議会の調査のアンケートで毎年上位に入っていることが分かった。その理由として、主人公の言葉使いを真似させたくない、やたらとお尻を出したり、母親を呼び捨てにする態度等が好ましくないという意見が多いからである。映画化されている「クレヨンしんちゃん」では感動的なもの、実写化されたものもあるが、保護者からは上のような理由から厳しい意見も多いのが現状である。その他には、民放の幼児向けのアニメ番組は殆どすべてが「どぎつく、スリリングで暴力的」であり、クライマックスでは戦いや暴力が必ず鮮烈に描写され、また、「仮面ライダー」や「戦隊シリーズ」は実写であり、人殺し等の残酷なシーンが多いことから「現実とドラマとの区別の分からない子ども達には見せたくない、喧嘩がエスカレートしてしまう」といった意見があり、子どもに与える悪影響が心配されている。

最後に乳児に対するアニメの影響について考えることにする。乳児向けのアニメは様々な色や音を使った単純な作品が多く、単独のアニメ作品ではなく、テレビ番組の中で放送されているものが多い傾向にある。しかし、乳児期は母親と愛着関係を形成する大切な時期であり、この時期にアニメばかりを見せていると親子の関わりが減ってしまい、愛着関係を形成出来なくなってしまう危険性がある。また、乳児だけでなく例えば母親自身が母乳を与える際にテレビを観ながら与えると、母乳を飲んでいる子どもは母親と目が合うことが無くなり、関わろうという意思が無くなってしまう。すなわち、乳児期は特に親と一緒に行動する場面が多く、親が何気なく見ている映画やテレビも一緒に観ている場合が多い為、その内容が乳児にふさわしいものでなくてもその情報を取り入れてしまうのである。よって、乳児期からアニメを観覧し過ぎると、現実世界の中の直接顔を合わせての空間と時間の中で作られる親子の絆（人間の絆）の形成が障害される危険性があり、結果として自分の気持ちを伝える言葉やほかの人の気持ちを感じる力の発達が障害され、人間として生きるために必要な力が育たないと考えられている。

3.2 節 身体的悪影響

身体的な影響の代表として、アニメの見過ぎや暗い部屋でテレビに近づいてアニメを観ることによる視力低下の問題が挙げられる。例えば、1997年12月16日にテレビ東京及び系列局で放送されたテレビアニメ「ポケットモンスター」の視聴者が光過敏性発作等を引き起こして病院に搬送された事件である。その原因として、ストロボ等の激しい点滅を25か所に渡って1秒間以上連続して使用したことで、得に番組後半はこれらが連続して使用された映像を上のような環境で観ていた子ども達が体調不良を訴え、発作性症状、眼・視覚系症状等の症状を引き起こしたのである。その他にも、映画や家庭テレビ等で3Dが話題となっているが、迫力がある映像が楽しめる一方、子どもの眼への負担が懸念されていることも事実である。子どもは両目の幅が5センチ程度と大人より狭く、その為、映像の飛び出し感と奥行き感の両方をより強く感じるのであるが、子どもは気分が悪くなくても言葉で違和感を伝えられなかったり、映像の珍しさから長時間見続けたりするのである。

上記の他にも、最近ではアニメを長時間観ていると運動量が減り、その結果として肥満になると言われている。また、運動しながらお菓子を食べることはないが、テレビを観ながらお菓子を食べることは多々あり、そのことも肥満の原因になっている。更に、アニメを観ているだけではどうしても受動的になってしまい、言葉の発達が遅れる原因となることが懸念されている。加えて、アニメの中には性的場面を含んでいるものがあり、その年齢に見合った情報以上のものを取り入れてしまう恐れもある。

このように、テレビ自体、現代のエネルギー大量社会にのみ成り立っている不自然な文明の利器であって、有史以来、現代社会以外に存在したことの無いものである。よって、長時間利用することでいわゆる生物として生きていく為に必要な生身の感覚が失われ易いのである。

まとめ

アニメの作者が育った環境はそれぞれに異なっているが、子どもの頃の経験や何気ない日常の中からアニメを生み出して世に送り出している。そして、その生み出されたアニメ達は時代を超えて多くの人々に夢や希望を与えており、ドラマ化・映画化されてテーマパーク化されたアニメも数多く存在している。このようにアニメが時代を問わず愛されている理由としては、社会のルールやモラルを分かりやすく織り交ぜることで楽しみながら躰効果を期待できる事、また、アニメを日常に取り入れることで子どものやる気や興味を引き出す事、更には、絵本や紙芝居を子育てに取り入れることで親子の絆をより一層深める事等、アニメには様々な効果が期待されているからである。しかしながら、アニメには子どもにふさわしくない場面を含んだものもあり、子どもが暴力的になる事やけんかがエスカレートする事に繋がる等の危険性を秘めていることも事実である。すなわち、アニメの効果や悪影響を大人がしっかりと理解して、子どもが正しくアニメを楽しめるような環境作りをすることが私たち大人の今後の課題であり、それがアニメ文化を後世に変わらず伝えていく懸け橋に繋げていく為に重要なことなのではないだろうか。

お菓子の歴史

江藤 詩織 大穂 舞子 檜崎 真実

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

第二次世界大戦後、食生活の欧米化が急激に進み、ファストフードやインスタ食品、ファミリーレストランやコンビニエンスストアの出現等の社会環境の変化もあり、高カロリーかつ高脂肪の食生活が日本に定着することとなった。特に、かつての日本人があまり摂取しなかった動物性脂肪を多く摂取するようになったことが一番の変化であり、近年ではこれらの食生活による生活習慣病や肥満等の若年化が危惧されている。また、これらの問題は医療費の増加等、少子高齢化を迎えた日本において深刻な社会問題となっている。このような現状の中、問題解決の為に様々な研究が行われており、その原因の一つとしてお菓子の過剰摂取が指摘されている。現在では多くの人々がお菓子と食事を区別して考えており、例えば「食事制限」という言葉があるように健康の為に食事を制限することはあっても食事を断つことはないであろう。一方、お菓子には「禁止」という表現がしばしば用いられるように、可否の議論が大半となっている現状ではないだろうか。しかしながら、お菓子は古くから人々の生活の中に存在しているものであり、また、人々に幸福感を与えるものであり、すなわち、お菓子は食事と同様に人々に必要な存在であること私達はどれ程認識しているであろうか。そこで、本研究では古くから人々の嗜好品として愛されてきたお菓子について、日本を始めとする世界のお菓子の歴史を紹介すると共に、お菓子が人間に与える身体・精神面での影響や多くの人々に必要とされ食べられているお菓子の魅力を詳しく考察することにする。

1 章 歴史

お菓子の始まりは遡ること約 2000 年前の上古時代であると言われており、また、お菓子と言っても和菓子・洋菓子・フランス菓子等の様々な種類があると共にそれぞれに歴史がある。また、近年ではお菓子に関する事件が相次いで起こっており、大きな社会的な問題となっている。お菓子は普段から何気なく多くの人に食べられ愛されているものであるが、私たちはお菓子についてどれだけ深く知っているだろうか。そこで、この章では日本や世界のお菓子の歴史、また、お菓子に関する事件について詳しく述べていくことにする。

1.1 節 日本のお菓子の歴史

日本のお菓子の歴史は、とても古く上古時代（紀元前～大和時代）に始まるが、当時は簡単な穀物の加工品に果実なども含めた総称であった。現在のお菓子は奈良時代から平安時代初期に輸入された唐菓子に始まる。その時代区分は、上古時代以降、唐菓子時代、点心時代、南蛮菓子時代、京菓子・江戸菓子時代、洋菓子輸入時代、菓子大量生産時代・国際化時代に分けられる。

唐菓子時代（奈良時代～平安時代）には遣隋使・遣唐使により唐からお菓子とその製法が伝わり、これまでの簡単な穀物の加工品に比べ、味・形・製法が優れ、唐菓子に工夫を加えた独自のお菓子が創り出されていた。次に、点心時代（鎌倉時代～南北朝時代）には砂糖の輸入が増加し、国内でもお菓子が生産されるようになった。また、この時代には同時に茶の栽培が盛んとなったことにより、現在の和菓子の源流である茶菓子が求められるようになったのである。その後、南蛮菓子時代（室町時代～安土桃山時代）にはフランシスコ・ザビエルの日本上陸に伴い、ポルトガル人やスペイン人により砂糖や卵を用いたカステラ、カラメル等のお菓子が持ち込まれ、長崎を中心に全国に伝わることにより我が国のお菓子に大変革をもたらしたのである。京菓子・江戸

菓子時代（江戸時代）には政治・経済・文化の中心が江戸に移るに連れて生活に密着した色々な菓子が作られ、現在の和菓子の殆どがこの時代に作られた。また、洋菓子輸入時代（明治時代～大正時代）には明治維新を経過して、ドロップ、キャンデー、チョコレート、ビスケット等が輸入され、菓子界に革命がもたらされた。不二家、森永製菓、グリコ、明治製菓などの多くの製菓会社が創立されたのもこの頃である。

菓子大量生産時代・国際化時代（昭和時代）には昭和 27 年に砂糖の統制が撤廃になり、菓子業界は一斉に活発な動きをみせるようになった。その後、昭和 30 年代に入って、洋菓子、和菓子の売上は順調な伸びをみせ、機械化による本格的な大量生産時代に入り、昭和 46 年にチューイングガム、キャンデー、チョコレート、ビスケット等の全ての菓子が自由化され、完全な国際化時代を迎えていった。そして、昭和 50 年代に入り豊かになった食生活、生活の 24 時間化の中で人々の健康志向が高まり、それに応じたお菓子が増える等、お菓子の種類や消費態様が多様化していった。このように、人々が健康を意識するようになった昭和 50 年以降から現代までを健康志向時代という。

上記ではお菓子の歴史についてその概要を示してきたが、以下、具体的に『グリコ』の創業について紹介することにする。

1919 年（大正 8 年）の春、菓種業を営んでいた江崎利一は郷里である佐賀県で漁師達が牡蠣の煮汁を捨てているのを目にして、牡蠣にはエネルギー代謝に大切なグリコーゲンが多く含まれているという事を思い出した。九州大学に成分分析を依頼した結果、多量のグリコーゲンと共にカルシウムや銅分が牡蠣の煮汁に含まれていることが分かった。ある時、長男が病にかかった際、長男に牡蠣の煮汁を与えたところ、医者もさじを投げる程衰弱していた長男は健康を取り戻したのである。こうした劇的な出会いからグリコーゲンの活用を広めようという想いが強くなり、初めに菓への利用を考えるのであるが、「治療よりも、病気にならない体をつくる予防が大切である」という医者の言葉に従い、健康づくりの為に活用しようと決意したのである。そして、グリコーゲンを一番必要としているのは育ち盛りの子ども達であると考え、子どもが喜んで食べるお菓子、中でも当時洋菓子として人気が高まってきていたキャラメルに入れたことが栄養菓子グリコのスタートである。

1.2 節 ヨーロッパを中心とする世界のお菓子の歴史

ヨーロッパのお菓子で代表的なものは、マカロンやマドレーヌなどのフランス菓子である。フランス菓子のお菓子文化は、その周りを取り囲むいくつもの国々による努力の結晶の産物であると言える。その背景にはルネッサンス時代の情勢がある。当時、文化の先進地はローマの伝統を受け継ぐイタリアであったが、政治的にはフランスが次第に勢力を拡大して、イタリア、スペイン等の各国がフランスとの政略的な婚儀を交わし合った。それに共ない、各国・各地で作られてきた菓子がフランスに集まり、発達していったのである。例えば、1533 年のフランスのアンリ 2 世とイタリアのメディチ家出身のカトリーヌ・ド・メディシスとの間の婚儀において、メディチ家は、当時文化的に進んでいたイタリアの全ての生活様式を共にさせて彼女を嫁がせ、お菓子についても、氷菓や、マカロンなどのお菓子や作り手である製菓職人もフランスに持ち込んだのである。また、1615 年スペインの王女アンヌ・ドートリッシュがフランスのルイ 13 世のもとへ嫁いだ時にチョコレートが初めてフランスにもたらされたと言われている。このように、戦争や政略的な婚姻により一部の貴族の間で広まり、フランス菓子として発展していったのである。一方、中国ではお菓子について独自の位置づけがなされて、点心として発展していった。点心とは、食事の合間に少量の食べ物を食べることであり、菓子や間食、軽食の類はすべて点心と呼ばれている。点心には甜点心と鹹点心の二つの種類があり、前者が杏仁豆腐等の甘みのある点心、後者は餃子等の甘みがないものと分類されている。尚、お菓子に近い甜点心が発展したのは精糖技術が伝わった唐の時代であり、茶を飲み点心を食べるといいういわゆる飲茶という食習慣が広まったの

もこの時代である。そして、元の時代には、乳や酪といった素材を用いた甜点心が作られ、清代には満州族のお菓子「シャーチーマー」も中国全土に広がり、1840 年のアヘン戦争に前後してヨーロッパの菓子も流入し、ビスケットは「餅乾」として、ケーキは欧風菓子を意味する「西式点心」として区分されていた。

1.3 節 お菓子に関する事件

お菓子に関する事件で有名なものは、1984 年と 1985 年に京阪神を舞台として食品会社を標的とした一連の企業脅迫事件、グリコ・森永事件が挙げられる。この事件の概要は、1984 年 3 月の江崎グリコ社長を誘拐して身代金を要求した事件を皮切に、江崎グリコに対して脅迫や放火を起こし、その後、丸大食品・森永製菓・ハウス食品・不二家・駿河屋等の食品企業を次々と脅迫するといったものであった。これは、1984 年 4 月 12 日に警察庁広域重要指定事件に指定され日本全国を不安に陥れた。事件の特徴としては、当初は単なる誘拐事件と思われていたが、大手食品会社が次々と脅迫され、実際にシアン化ナトリウム入りの食品がばら撒かれる等、当時の社会に与えた影響は計り知れないものがあり、また、企業への脅迫とは別に挑戦状を新聞社や週刊誌に送りつけ、その内容は警察をあざ笑うような内容であったことも大きな特徴である。

次に、和菓子・洋菓子に関する事件で有名なものは、汚染輸入米の食用転用事件と「赤福」事件、「不二家」問題等が挙げられる。

汚染輸入米の食用転用事件とは、米卸売加工会社「三笠フーズ」（大阪市北区）が農薬やカビ毒に汚染された輸入米を“ただ同然”で買い付け、食用として不正に転売したことにより、それが米菓、和菓子、焼酎等に混入していた他、給食業者にも流通していたことが明らかになる等、長期かつ大量に、しかも計画的に“毒入り”の米を流し続けたもので、事件を未然に防止できなかった農水省の責任は重大であると同時に、事件の発端となったミニマムアクセス（MA）米制度が厳しく問われることになった。また、赤福事件とは 300 年続いている老舗の赤福が、2007 年 10 月 12 日、農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律違反容疑で農林水産省及び伊勢保健所の立ち入り調査を受け、余った餅を冷凍保存して、解凍した時点を製造年月日に偽装して出荷していたことが発覚したものであり、偽装が組織的に行われていたことから食品衛生法違反行為として三重県により無期限営業禁止処分となっている。最後に、「不二家」問題とは 2006 年 11 月に洋菓子の老舗ブランドの「不二家」が期限切れ牛乳を使用したシュークリーム 2000 個を出荷していたこと等が判明して、全国 5 カ所の洋菓子工場の操業を休止する他、全国不二家チェーン店で洋菓子販売を休止した事件である。これらの事件の他にも米菓メーカー「もち吉」で殺虫剤の混入が発覚する等お菓子に関する事件が後を絶たない現状となっており、今後、子どもが安心してお菓子を食べられるように一人ひとりが考えていくことが大切となるのである。

2 章 お菓子が体に及ぼす影響

お菓子は手軽に食べられるものとして、多くの人々に楽しみの一つとして親しみ愛されている。しかし、手軽に食べられるが故に摂取過多となり、肥満の原因や依存症を発症する原因となる場合があることもよく知られていることである。すなわち、決して「お菓子＝おやつ」ではなく、食べ方を間違えてしまうと時に体に大きな悪影響を及ぼすのである。そこで、この章ではお菓子が私達の体に及ぼす具体的な影響について詳しく述べていくことにする。

2.1 節 お菓子と食品添加物

食品添加物とは、食品衛生法において食品の製造過程、または、食品の加工や保存の目的で食

品に添加・混和等の方法によって使用するものと定義されている。食品添加物は食品を製造・加工する時に必要であり、食品を形作り、栄養成分を補う等の目的で使用されている。

以下は、お菓子里に使用される食品添加物を表にまとめたものである。

食品添加物の目的と効果

	目的と効果
甘味料	食品に甘味を与える
着色料	食品を着色し、色調を調節する
保存料	カビや細菌などの発育を抑制して、食品の保存性を良くし、食中毒を予防する
ガムベース	チューインガムの基材に用いる
香料	食品に香りをつけ、おいしさを増す
酸味料	食品に酸味を与える
調味料	食品にうま味等を与え、味を調える
膨張剤	ケーキ等をふっくらさせ、ソフトにする

食品安全委員会において一日摂取許容量（ADI）の設定等の安全性の評価を行い、厚生労働省はその評価結果を受けて薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会において、日常の食事を通して摂取される食品添加物が ADI を十分下回るように使用基準を定める等の安全性の管理を行っている。しかし、その安全性については複合汚染による毒性や品目によっては毒性試験データが不十分といった未解決の部分があることも事実である。実際、2007 年に英国で合成着色料と合成保存料の安息香酸ナトリウムの混じったものが子どもの注意欠陥・多動性障害（ADHD）を増加させるという検査結果が勧告された。従って、過度に添加物に依存しない食生活にすることが必要なのであるが、豆腐・こんにゃく・砂糖等の身近にある食品の中にも添加物がないと製造出来ない食品も多いことも事実であり、また、育児用粉ミルクの各種ビタミン類等は食品添加物で必須成分を強化しなければ、栄養価や免疫力の形成等において乳児の健康に重篤な障害が発生する可能性も存在するのである。

2.2 節 肥満とお菓子の依存性

ここではお菓子と肥満との関係やお菓子の依存性について考えていくことにする。以下は 6・7 歳児の肥満児の出現率の推移を表である。

6・7 歳児の肥満児の出現率

	6 歳児	7 歳児
昭和 52 年	2.62%	3.13%
昭和 58 年	2.83%	3.52%
平成元年	3.86%	4.60%
平成 5 年	4.25%	4.99%
平成 10 年	4.84%	5.89%

上記の表から分かるように、肥満児の出現率は年々増加しており、その背景として戦後の食生活の変化が挙げられ、おやつとしてのお菓子の摂取の仕方も原因の一つと考えられている。

育ち盛り・伸び盛りの子供達達は消化器官が未発達の為、3 度の食事だけでは健やかに成長する為に必要な栄養や活発な運動に必要なエネルギーが十分に摂取できない。その為、一日に必要

な食事量の1～2割(150～300Kcal)をおやつで摂ることが望ましく、そうした不足分を補う栄養補給ものの役割としておやつは大切な意味を持っているのである。また、お菓子を食べることにより喜びや楽しみを感じ、誰かと一緒に食べることによりコミュニケーションの場にもなるのである。しかし、その食べ方や量によって肥満等の健康に悪影響を及ぼすことがあり、そのお菓子にどの程度のエネルギーが含まれ、また、含まれている栄養素の特徴を理解して食べる量を調整することで上手にお菓子を摂取することが大切なのである。

依存症と言えばアルコールや薬物・麻薬等が想像するかもしれないが、実は砂糖にも麻薬と同じレベルの依存症が起きる可能性があると言われているのである。そこで、麻薬等の薬物依存性の症状を考えると、幻聴・幻覚や手の震え等の禁断症状、薬物が体内から減ってきた際に起こる不快な症状(離脱症状)等があり、これらの症状を回避する為に再び薬物を摂取することを繰り返して依存するのである。また、何度も使用することにより効果が薄くなるものがあるが、これを薬物に対しての「耐性の形成」と呼び、効果が薄くなる度に使用量が増えていくことが多く、最初は少量であったものが最後には致死量に近い量を摂取するようになるのである。更に、基本的に一度依存症となるとその後は治ることはなく、一生依存症と付き合っていかなければならない。このように、薬物は「まだ大丈夫」と軽く見ている間に家族や周囲を巻き込みながら進行して、命を落とすことも稀ではなく、身体、精神、社会生活の全てを破壊してしまうのである。

砂糖を大量に摂取することにより起こる症状

精神面	忘れっぽい、集中力がなくなる、気分が落ち着かない、鬱病になる
身体面	痔、伝染性単核白血球増加症、肝炎、皮膚炎、偏頭痛等の症状

一方、砂糖を大量に摂取することにより起こる症状としては一般的には上記のものが考えられている。また、1日の砂糖の摂取量が30gを超えた園児には癇癪を起す、注意散漫等の行動が顕著に現れており、更に、母胎には子宮卵巣の発育不良、流産、早産の激増等の胎児に与える影響が現れるのである。このような症状が現れる原因はビタミンB1の不足である。大量に砂糖が体内に入ると血糖値が急激に上がり、それを下げる為にインシュリンが大量に放出されるのであるが、一気に血糖値が下がることでブドウ糖が長時間に渡り吸収できなくなり、脳に栄養分が回らなくなるのである。また、ブドウ糖の分解にビタミンB1を使う為、大量に砂糖が入ることによりビタミンB1も多く消費され、脳にエネルギーが回せなくなり、脳の中樞神経に影響が出ることで様々な症状が現れるのである。

この他にもチョコレート依存症があり、チョコレートを食べないと落ち着かない、不安に感じるといった症状がある。依存症になるきっかけとしては1粒2粒では満足できなくなり、気がつくと1日に大量に食べていたというケースが多く報告されている。また、チョコレート依存症の場合では太ってしまう人が多く、ダイエットのストレスからそれを解消する為にチョコレートを食べ、更に太るという悪循環から抜け出せなくなる人が多いのである。

砂糖依存症とチョコレート依存症に共通しているのは、どちらも女性や仕事ができる人、几帳面な人である。疲れた時に甘いものを食べると疲れが取れると言われているが、一歩間違えると依存症に陥ることも事実であり、特に、理性の未発達な子ども達が摂取し過ぎないように周りの大人が気を付けていくことが重要なのである。

3章 お菓子が愛される理由

疲れた時に甘いものが欲しくなったり、小腹が空いた時にお菓子を食べたくなることがある。日頃から多くの人に愛されているお菓子であるが、なぜこんなに多くの人に愛されているのだら

うか。その理由は、お菓子は食べる楽しみの他に見る楽しみ、選ぶ楽しみがあるからではないだろうか。そこで、この章ではお菓子の愛される理由を探る為にお菓子の材料や技法、特性について述べていく。

3.1 節 お菓子と砂糖

お菓子と砂糖は切っても切れない関係である。そこでここでは、お菓子に使用されている砂糖について、述べていくことにする。

日本と砂糖との関わりは奈良時代後期に唐の鑑真が日本に砂糖を伝来したことから始まる。砂糖は長い間、「薬」として珍重されており、日本で砂糖が作られるようになったのはそれから 900 年後の江戸時代になってからのことである。砂糖を料理に使うと甘味だけでなく様々な効果を生み出す。例えば、こんがりと焼き色をつけたり、肉を柔らかくしたり、ジャムやマーマレードのゼリー化を助けたりするのも、砂糖の特性によるものであり、また、砂糖には澱粉の老化防止や防腐効果、酸化防止効果等があることも知られている。このように、料理をより美味しくする為に砂糖は大活躍しているのである。

糖質は脂肪に比較して燃焼が速く、速効的エネルギー源として有効であり、疲労回復に最も適しているのである。そして、運動で最初に燃焼されるのが糖質である。よって、よく運動した後、体内に貯蔵してあったエネルギー源が底をついてしまった状態の時、飴やキャラメルを 1 個食べるだけで結構元気になったりするのである。

砂糖は私達の脳の活動にも関係している。脳が必要とするエネルギー源はブドウ糖だけ（糖質は、体内で分解されてブドウ糖となる。）であり、勉強や一日中デスクワークに追われて脳細胞をたくさん使った後等に糖分の補給が必要となる。この時、砂糖はごはんやパンに比べて消化吸収が速く、すぐに脳にエネルギーを供給する事が出来る為、人間の記憶力・集中力の増加、持続にも重要な役割を果たしており、勉強や仕事の合間にちょっとした甘い物を補給することで脳も再び活性化するのである。故に、午後 3 時のおやつは理にかなった休憩なのである。

	特徴	主な用途
上白糖	日本で使用されている砂糖のうち約半分を占める、最も一般的な砂糖。結晶が細かく、しっとりとしたソフトな風味の砂糖で、白砂糖とも呼ばれる。	煮物や焼き菓子等の日本料理や、素材の味を生かしたい料理に向いている。
グラニュー糖	英語名をハードシュガーと言い、世界で一般的な砂糖。純度が 99.8% 以上とかなり高純度でサラサラしており、淡泊でクセのない甘さが特徴。	コーヒーや紅茶、ケーキ等の洋菓子作りや、料理全般に使われる。
白ざら糖	無色透明で光沢があり、グラニュー糖より結晶が大きく、糖度がほぼ 100% という高級な砂糖。一般家庭よりは、高級な和菓子や洋菓子、飲料等の製造に多く使用される。	果実酒やスポンジケーキ、クッキー、ゼリー等の洋菓子作りに最適。
三温糖	上白糖や中白糖よりも純度が低い薄茶色をしており、灰分等も多く含んでいる。甘みが濃厚でコクも強く出て、風味も上白糖等と比較すると特有なものがある。お菓子や佃煮に多く使用される。	肉や魚、野菜等の煮込み等のコクを出したい料理や、味噌料理等に合う。また、上白糖とブレンドして使用しても、一味違う料理で楽しめる。
角砂糖	グラニュー糖を四角に固めたもの。ヨーロッパの一部の国では、小粒の角砂糖を料理に使用している。	コーヒー、紅茶に使用されるのは定番ですが、一個の量が決まっているので、料理に便利である。
氷砂糖	グラニュー糖や白ざら糖等を加工して作られ、極めて純度の高い砂糖。外見が氷とよく似ているため、この名がついている。果物のエキ스가出てくると、氷砂糖の序々に溶けるのが同時進行で、効果的である為、果実酒作りに最適である。	果実酒作りの他に、煮詰めると美しいツヤが出るので、大学芋やいなり寿司のあげ等に向いている。
黒砂糖	さとうきびをそのまま搾って煮詰めた砂糖。精製されていない為、ミネラルやビタミン等が含まれており、精度のわりには濃厚な甘味が感じられ、風味も独特なものがある。かりんとうや沖縄料理等によく使われている。	煮物等にコクを出したいときや、甘みを生かしたお菓子作り等に向いている。
粉砂糖	白ざら糖やグラニュー糖等の、純度の高い砂糖を細かく粉にひいたもので、アイシングシュガーとも呼ばれる。お菓子のメイクアップに使用される。	洋菓子の装飾やアイシング。
和三盆	人間の手で練りながら、非常に手間のかかる、日本の伝統的製法の砂糖です。結晶が小さく口当たりも良いので、高級な和菓子には必ず使用される。現在製造しているところは、少なくなっている。	和菓子等。
顆粒状糖	多孔質の顆粒状で、固まりにくく水に溶けやすいのが特徴であり、甘味もソフトである。	アイスコーヒーや果物、ヨーグルト、ドレッシング等、冷たいものに適している。

上の表は砂糖の種類を特徴と主な表にまとめたものである。このように砂糖には多くの種類があり、砂糖を料理に使う時にはその種類ごとの特徴を良く掴んでその用途に向いているものを選ぶとより一層料理が引き立つのである。

3.2 節 お菓子の特性

現在、お菓子メーカーによって新しいお菓子が次々と作られている。また各都道府県や地域においては、その土地ならではの名産品としてのお菓子も多く存在する。ここでは、それらのお菓子がどのような影響を与えているのかについて述べていく。以下は、現在人気のあるお菓子についてランキング形式で示したものである。

人気のあるお菓子ランキング

ガム	1 位	ロッテグラマティックガム(魅惑のカシス)
	2 位	ロッテプラス X CUBE(グレープフルーツ)
	3 位	グリコポスカ(ライチカモミール)
飴・キャラメル	1 位	リボン生梅飴
	2 位	UHA 味覚糖特濃チョコ
	3 位	カンロピュレグミ(グレープ味)
スナック類	1 位	東ハトキャラメルコーン(バタートースト味)
	2 位	カルビーア・ラ・ポテト(じゃがバター味)
	3 位	ギンビスカリッと枝豆
ビスケット	1 位	ギンビスミニたべっ子どうぶつ(メープルバター味)
	2 位	ギンビスたべっ子どうぶつ(キラキラミルク味)
	3 位	グリコプリッツ
チョコレート	1 位	グリコジャイアントカプリコ(いちご味)
	2 位	明治リッチ抹茶チョコ
	3 位	明治ガルボ

参考資料：もぐナビ

ひとつのジャンルごとに見ても種類が多く、見ただけでは味や形状の見当がつかないもので様々である。しかし、この多くの種類の中から自分好みのものを見つけ出すということもお菓子の楽しみ方の一つである。

北海道	白い恋人、ロイズチョコレート
東北	気になるリンゴ(青森)、萩の月(宮城)、のし梅(山形)、薄皮饅頭(福島)、石割桜(岩手)、金萬(岩手)
中部	笹団子(新潟)、栗かの子(長野)、月の雫(山梨)、月世界(富山)、あんころ(石川)、ういろう(愛知)、うなぎパイ(静岡)、赤福(三重)、栗きんとん(岐阜)
関東	東京ばな奈(東京)、鳩サブレ(神奈川)、梅どら(茨城)、草加せんべい(埼玉)、焼きまんじゅう(群馬)、古印最中(栃木)、ピーナッツ最中(千葉)
関西	栗おこし(大阪)、塩味饅頭(兵庫)、八橋(京都)、柚もなか(和歌山)、さつま焼(奈良)、うばがもち(滋賀)
中国	もみじまんじゅう(広島)、朝夕(島根)、因幡の白うさぎ(鳥取)、きびだんご(岡山)、月でひろった卵(山口)
四国	芋ケンピ(高知)、一六タルト(愛媛)、灸まん(香川)、なると金時(徳島)
九州	ひよこ(福岡)、かるかん(鹿児島)、陣太鼓(熊本)、松露饅頭(佐賀)、カステラ(長崎)、ざびえる(大分)、チーズ饅頭(宮崎)、ちんすこう(沖縄)

上記の表は各都道府県の銘菓について主なものをまとめたものである。このように各都道府県に少なくとも一つはその土地ならではののお菓子(銘菓)が存在しているのがわかるであろう。そこ

で、これらの中からいくつかのお菓子の起源等について以下で紹介する。

北海道の「白い恋人」は1976年（昭和51年）12月に石屋製菓により発売が開始された。商品名の由来は創業者がスキーを楽しんだ帰りに「白い恋人たちが降ってきたよ。」と何気なくいった一言によると伝わっている。商品の色が白いことが北海道の雪景色を連想させることや北海道限定販売にしたことで出張や旅行の際の土産品として人気を得ている。福岡の「ひよ子」は元々は炭坑地帯であった飯塚で生まれた。昔、飯塚は長崎街道を通して本州へ運ばれる砂糖を比較的容易に手に入れられた為、菓子製造が盛んであったことと重労働である炭坑作業の後に甘い物が好まれることから地元で定着していった。その後、1957年に福岡市内（天神）に進出して人気となり、辛子明太子と共に博多土産の定番となった。更に、1964年に開催された東京五輪の頃に東京へ進出して、現在では東京土産としても有名となっており、また、東北新幹線上野駅延伸開業後は東北方面にも広まった。関東以北では「東京銘菓ひよ子」と宣伝して知名度を獲得した経緯から福岡発祥の菓子であることを知らない人も多く「東京から来た人が福岡の人に東京土産として『ひよ子』を持ってきた」等という実話もある。ヒヨコの形になった理由は二代目店主の石坂茂が「大勢の人に愛される、従来の丸い形ではない饅頭を」と考えて悩んでいた時、ヒヨコで埋め立てられる夢を見たのがきっかけと言われている。広島「もみじ饅頭」は明治後期の厳島（宮島）の和菓子職人 高津常助氏により考案されたと伝わっている。厳島の名所・紅葉谷の旅館には当時国内外の要人が多く利用していたが、この旅館に和菓子を納入していた高津は宿の仲居から「紅葉谷の名にふさわしい菓子が作れないか」と依頼され、1906年（明治39年）に「紅葉形焼饅頭」を完成させた。当初、中身はこしあんのみであった、1934年（昭和9年）5月10日に高松宮宣仁親王が厳島を訪れた際、岩村もみじ屋の初代 村栄吉に「つぶあんはないのか」と言ったのがきっかけでつぶあんのもみじ饅頭が誕生した。もみじ饅頭の知名度が全国的に高まり広島を代表する銘菓と認識されるようになったのは、1980年代初期の漫オブームの中であり、お笑いコンビ「B&B」の島田洋七が「モミジマンジュウ!」と叫ぶギャグが流行してからである。

以上の3つのお菓子の起源からもわかるように、何気ない一言から生まれたものや時代背景がお菓子の誕生に関わっていることが多い。このような銘菓以外にも、福岡の辛子明太子味のプリッツやシークワサー味のガム等その土地の名産品を使ったお菓子も売られている。これらの銘菓や名産品を使ったお菓子は地域限定販売とされており、比較的安く手に入るものである為、旅行先等で多くの人々がおみやげとして購入され、それらがクチコミなどで更に広まることでその土地の知名度にも繋がっていくのである。このように、「町おこし」としてのお菓子の存在は大なものになっているのである。

3.3 節 お菓子の技法

お菓子には洋菓子や和菓子等の様々な種類があるが、それと同じように技法にも様々な技法があり、その一つとして飴細工がある。飴細工とは製菓技術の1つであり、砂糖を熱して飴状になったものを用いて造形物を作り出すこと、および、その造形物をいう。飴細工は、その細工の技術と美術的な観点や製作過程に特徴があり、食べることを目的としない、つまり、鑑賞する為の展示品として製作される場合もある。また、飴細工は各国で異なっており、日本の飴細工は飴を原料とし、食紅等で彩色を施した棒付きのものが一般的に親しまれ、中国には熱した飴を吹いて動物や鳥の形を作ったり、台の上にたらし文字や絵等を描いたりする飴細工がある。更に、フランスでは工芸菓子としての砂糖菓子一般を指す言葉としてシュクルダールがあり、飴細工もこの中に含まれ、デコレーションケーキとして立体的に積み上げる菓子にもしばしば飴細工の技法が用いられている。

飴細工の製法には、飴を引っ張り伸ばすことにより空気を含ませる引き飴、息で吹いたりポンプを使ったりして空気を飴の内部に送り込むことにより丸い立体的な形に成形する吹き飴、型紙を用いて型を作り台の上でその型に飴を流し込む流し飴、溶かした砂糖を素早く左右に振り動か

しながら糸のように非常に細かい飴を作る糸飴、飴を煮立てて泡立、その気泡ごと固める岩飴の5つの製法がありいずれも80度程に熱した飴を扱う為、洋菓子では通常手袋を使用して火傷を防いでいる。一方、日本では手袋を使う伝統が殆ど見られず、豆炭で熱せられた熱いままの飴を素手で加工していく為に火傷の危険とは隣り合わせの技術習得となっている。また、大道芸としての親しみやすさから動物・鳥類をモチーフにしたものが主である。また、洋菓子は専用の洋菓子作り用の道具がそのまま使われ、練ることで空気を入れ込むというよりは伸ばしたり、元々の素材で光沢を出しやすくしたりといった手法等もあり、日本の飴細工と比較して着色よりもガラスのような光沢やツヤを強調する傾向がある。



日本における工芸菓子の材料は生砂糖と言われるもので、粉糖100に対して寒梅粉を30~40 合わせて水でこねて着色をして好みの色を作り上げて作られる。左に載せているように四季の草花や果実、鳥や虫、小動物など多種多様に渡っているが、最も作られるのは草花である。雲平細工とも言われ、花や鳥などを実物のように作り飾る為、飾り菓子とも呼ばれている。

次に挙げられるのが和菓子である。和菓子とは、日本の伝統的製造法で作られた菓子のことで明治時代以降にヨーロッパ等から新しく日本に入ってきた。和菓子には白こし飴と薄力粉を混ぜて蒸したものに砂糖水を加え練りあげ、色を付けて様々な形に加工する「こなし」、蒸した山芋をうらごしして砂糖と炊いたものや白飴を寒天で固めたもの、または、白飴を求肥でつないだものを色々な色に染めてうらごし器でそばろ状にして飴などの芯の上にうえつけて季節を表現する「きんとん」、もち米の粉を水で練って湯でたものを火の上で砂糖を加えて練る「求肥」、本くず粉に水を加えたものを漉して砂糖を加え加熱しアルファ化させる「くず」の4つの技法がある。

これまで紹介した技法の他にも様々な技法があり、最近では若い女性の間でハートやリーフ、動物、文字によるメッセージなど色々なものがミルクの泡の上に表現されるデザインカップチーノ等にも人気である。このように、お菓子は老若男女問わずに、食べて楽しむ以外にも見て楽しまれているのである。

まとめ

これまで述べてきたように、お菓子は上古時代から約2000年の長きに渡って老若男女を問わず多くの人々に愛されてきた。また、消化器官が未発達のために1日3回の食事だけでは必要な栄養量を摂取することが難しい乳幼児におやつとしてお菓子を与える等、家庭や保育施設におけるお菓子の役割は、栄養面では「食事の一部」、精神面では「心理的な楽しみを与えるもの」として必要不可欠な存在となっている。一方、肥満等の生活習慣病やアルコールや薬物・麻薬等の同程度の依存症といった深刻な問題を含んでいることも事実であり、特に、肥満についてはメディアでも取り上げられる等、大きな社会問題として考えられているが、依存症についての認識は深刻に捉えられていない現状ではないだろうか。

近年ではお菓子に関する事件が近年相次いで発生しており、大きな社会問題となっているが、それでもお菓子が多くの人に愛されるのは、食べる楽しみ、見る楽しみ、選ぶ楽しみ等、多くの楽しみ方が存在するからである。高度成長と引き換えに多くの伝統文化を失った日本において、これらの「楽しみ」は残していく価値に値する文化であるか、すなわち、未来を担う子ども達にお菓子を伝えていくことの必要性について、私達は真剣に考える必要があるのではないだろうか。

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ ～星の王子様～

大島 めい 村上 彩 村山 美樹

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

「星の王子さま」は 100 以上の言語に翻訳され、世界各国の子どもから大人までの幅広い人々に愛され続けている。その理由は、幻想的な雰囲気の中で王子さまが伝える名言の数々が人々の心に素直に打ち響くからである。「星の王子さま」以外にも世界には数多くの児童文学があり、世界中の子ども達に親しまれているが、実はその殆どが子ども向けに分かりやすい話に書き換えられていることはあまり知られていないことかもしれない。例えば、グリム童話の「シンデレラ」は主人公が姉にナイフで足を切り落とされるというのが原作であり、日本昔話の「桃太郎」は桃を食べて若返った老夫婦の子どもが主人公というのが原作である。このように、日本も含めて世界の多くの児童文学は時代に即して修正されているが、一方で「星の王子さま」は挿絵を除く本文に関して、現在に至るまで原文が受け継がれているのである。そして、この理由には作者の戦争体験が大きく関係しており、多くの研究者の研究対象となっている。そこで、本研究では作者アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリがこの作品に込めたメッセージを読み解いていくと同時に、その真相に迫っていくことにする。

1 章 読み解く前に

星の王子さまの作者であるアントワヌ・ド・サン＝テグジュペリは、第二次世界大戦を経験して様々な作品を残してきた。それらの作品には現代を生きる大人と戦争に対する彼自身のメッセージが込められている。そこで、この章では「星の王子様」を読み解く前に、作者アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリの生い立ちとその時代背景について述べていく。

1.1 節 アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ

1900 年 6 月 29 日、フランスの地方都市リヨンで伯爵家の 5 人兄弟の長男として生まれたサン＝テグジュペリは幼少の頃より操縦士に憧れていた。20 歳の時、兵役をきっかけに操縦士として活躍するが、退役した後、空を飛ぶことが大好きな彼は航空郵便会社に入社して郵便飛行士として活躍する傍ら、雑誌に短編小説を発表して文才の一端を示した。1931 年、アルゼンチンで知り合ったコンスエロ・スンシンと結婚するが、1939 年、第二次世界大戦が勃発すると偵察飛行の任務に就くこととなる。その後、フランスの首都パリがドイツに占領された為、戦争の嵐のないアメリカに亡命した。そして、亡命中のアメリカで「星の王子様」を執筆し、1943 年 4 月 6 日に出版したのである。同年にフランス軍に再入隊すると再び偵察飛行の任務に就いた。しかし、翌 1944 年 7 月 31 日、地中海コルシカ島から偵察飛行に飛び立ったまま「星の王子様」の主人公と同じように、44 歳の時、消え去ってしまったのである。

1.2 節 第二次世界大戦

第一次大戦後、ベルサイユ条約に対しドイツ、イタリア、日本は不満を抱いていた。イタリアではムッソリーニが不満分子を率いてローマに進軍して政権を奪取した後、反共産主義、反議会主義、軍国主義に基づく全体主義体制「ファシズム」を樹立した。このファシズムの動きはやが

てドイツと日本にも波及した。

1929 年、世界恐慌では植民地を持たないドイツ、イタリア、日本を不況が直撃し、三国における現状打破の動きを促進させ、ドイツのポーランド侵入を機にフランスはドイツに宣戦したが、フランス軍はドイツに対して積極的な軍事行動をとらなかった。これは、第一次世界大戦の後に防御の有利さを過大に評価して、攻撃の重要性を否認する戦略理論がフランスで支配的となっていた事やはじめからヒトラーとの和解を望む勢力が政府や軍部内で強い影響力を持っていた為でもあった。そして、1940 年 5 月 10 日に東部での作戦を終えたドイツが西部戦線に対する総攻撃を開始すると、フランス軍はスダン近傍で突破され、ドイツ軍はフランス領内深く侵入した。6 月 22 日、調印された休戦協定はフランス本土の 60%、すなわち、フランスの北半分と西部の大西洋岸一帯をドイツ軍の軍事占領下に置くこと、フランスが 1 日に四億フランの占領費を支払うこと等が規定された。

フランスの敗北があまりに圧倒的となり、ヒトラーの勝利はもはや疑いなく、また、イギリスの屈服も時間の問題だと信じられていた。しかし、1941 年に始まったドイツ＝ソヴィエト戦争は、攻守を代えてソヴィエト側が攻勢に移り、アメリカも参戦することにより、ドイツの究極的な勝利はもはや確実ではなくなったのである。敗色濃厚となり、労働力の不足に悩んだドイツは労働者の徴用を計画して、フランスでは強制労働法が布告された。多数のフランス青年がドイツに送られるか、徴用を忌避してレジスタンスに加わるかの二者択一を迫られ、結果として、多くの徴用を忌避した青年たちはレジスタンスの武装集団に加わり、国内フランス軍という単一の組織に結集された。そして、1944 年アメリカ、イギリス連合軍がフランスに上陸すると、フランス国内軍はこれに呼応して各地で蜂起した。ドイツ軍は 1944 年末までにフランス本土の大部分から退き、1945 年 3 月ドイツは連合軍に無条件降伏を申し入れた。第二次世界大戦でのフランスの戦死者は、15 万人であったが、フランスの国外で死んだ者は 28 万人に達した。また、解放戦がフランス本土をよぎって行われたことにより工場、鉄道、道路、家屋等の破壊は著しく、解放時の電力は戦前の半分、工業生産は三分の一に過ぎなかった。加えて大都市には深刻な食糧危機もあり、家には身体を温める石炭さえも当時はなかったのであった。

1.3 節 代表作

デビュー作である『南方郵便機』は、サン＝テグジュペリ自身の飛行の体験が熟成されていて、作者独自の思索へと向かう途中にあり、自らも背反への不安を抱えて方向を模索していた若き日の作者の姿を映し出している。以後の作品には見られない若い魅力に満ち溢れた作品である。また、作者自身の飛行機乗りの体験を活かしている『夜間飛行』は、夜間飛行という危険極まりない事業の中で浮き彫りにされる、人間の尊厳と勇気が主題となっている作品である。1939 年に出版された『人間の土地』は、飛行士としての 15 年間の経験を基に巧みな筆致で語るエッセイであり、極限状態での僚友との友情や、人間らしい生き方とは何かが主題となっている。この作品を出版した後に、第二次世界大戦が勃発して『戦う操縦士』を執筆する。作者自身がアラスに集結したドイツ戦車部隊の所在を確認すべく偵察飛行に出撃した。その当時の生と死の狭間での数々の省察を経て、やがて人間の再興と、文明の再生の条件が語られた作品である。

2 章 通説

星の王子さまは一見単なる絵本のようなが、様々な諸説があり、通説と異説に分かれている。その中で、通説には子どもの心を忘れてしまった大人へ向けて「大切な物は目に見えない」という作者のメッセージがあり、純粋な感情を思い出して欲しい事や何事にも疑問を持って欲しい事等が込められている。そこで、この章では「大切な事は目に見えない」事に着目して、節ごとに

隠されている作者のメッセージを読み解いていく事にする。

2.1 節 『星の王子さま』 あらすじ

飛行士は小さい頃に絵描きになることを目指していて、ウワバミが象を飲んだ絵を描いたが、大人にそれは帽子の絵だと笑われ、そんな大人に失望して大人になると飛行機乗りになり、空と星を友達にして暮らしていた。ある時、飛行機の故障で砂漠に不時着して翌朝飛行機を調べていると羊の絵を描いて欲しいと声を掛けられた。その声の主が星の王子さまだったのである。飛行士は羊の絵を何枚か描き、加えて例のウワバミの絵を描いて見せると王子さまはゾウを飲み込んだウワバミの絵なんかいらないと答えたのだった。飛行士は王子さまから様々な話を聞き、王子さまのことを知っていった。王子さまは小さい星B-612に住んでいて、その星には小さい2つの活火山と1つの死火山があり、美しいバラが咲いていた。しかし、自尊心の強いそのバラはわがままを言って王子さまを困らせた為に王子さまは自分の星を捨てて宇宙に旅立った。そして、旅に出た王子さまは様々な星を訪れて王様や実業家、軍人等に出会い、地球に辿り着いた。この地球で王子さまはヘビやキツネと友達になり、ヘビは王子さまが自分の星に帰りたくなった時には必ず役に立つことを約束した。また、キツネは親しくなった王子さまとの別れを惜しんで秘密の手紙を送り、その手紙には眼に見えないものの中に大切なものがあると書いてあった。キツネの手紙を読んだ王子さまは自分の星に残してきたバラのことを想い自分の星に帰ることを決意し、飛行機が直った翌朝、飛行士の悲しみをよそにヘビの世話になって自分の星に帰って行ったのである。

2.2 節 ウワバミ

作者が初めて書いた「第一号の絵」で物語は始まる。子どもだった作者は本でウワバミという大蛇が獲物を丸呑みにすることを知り、絵で描いてその怖さを大人へ知らせようとする。しかし、大人たちは誰一人として怖がらない。作者は失望してどんな絵なのかを説明するが、大人達にはその絵の外のウワバミや中の獲物には興味がなく、大人にとって蛇の外側を描く事や内側を描く事は関係ないのである。そのような大人を批判しながらも作者もまた相手に合わせた人生を送るのである。これは、まさに現代の大人と子どもではないだろうか。大人も昔は子どもであって、子どもの頃には純粋に物事を考えていたにもかかわらず、大人になって冷めた感情を抱くようになるのではないだろうか。前編Ⅰでは、子どもの純粋な気持ちを現代の大人が奪ってしまわないように、子どもの頃の純粋な感情を大人に思い起こしてほしいという作者のメッセージが込められているのである。

2.3 節 バオバブ

王子さまはいつでも夕やけの空を見ることができくらい小さい星に住んでいて、その星にはバオバブという恐ろしい種がある。そして、怠けものが一人で住んでいた星にバオバブが生い茂って崩壊しそうになった話をする。これは、人類が科学の発達を後先考えずに急速に取り組んだ事による地球の崩壊を象徴しているのだと考えることができる。星の王子さまの住んでいるB-612を地球だと例えると、バオバブは科学文明の象徴だと言える。人類は便利という点で科学の進歩を進めてきたが、科学がこのまま際限なく進むのであれば、温暖化などの環境問題により地球を崩壊してしまうであろう。前編Ⅴでは、人類の怠慢が生み出したバオバブの木による地球の崩壊を警告しているのである。

2.4 節 バラのトゲ

バラにはトゲがあるのに羊に食べられてしまうのであれば、トゲは何の役に立つのかと王子さまが飛行士に何度も問うが、何度質問しても飛行士は素っ気ない返事をする。そして、何故に花が何にも役に立たないトゲを作るのかを知りたいと思うことは大事なことはないのかと問う場面がある。これは、何も意味がないようなことでも、どのような意味があるかを考えることに価値があるということを伝えているのである。ここで、世の中には簡単に見えないものがたくさんあるというウワバミの話を思い返してみると、ウワバミの話と子どものように何事にも疑問を持って問うことの必要性を伝えているこの場面は繋がっていると考えることができる。すなわち、王子さまにとってウワバミの内側を見ることが聞き始めると後に引かないということは一体のものと言えるのである。

2.5 節 六つの星巡り

王子さまはバラとのいさかきを機に様々な事を学びたいと感じて、渡り鳥と共に星を巡る旅に出て、そこで六人の大人達に出会うのである。一番目の星では無理のない命令をして人を支配したつもりでいる孤独な王様に出会い、二番目の星では他人からの評価が生き甲斐の自惚れ屋に出会う。また、三番目の星では過去の失敗の原因探求から逃げ出して忘れようとする呑み助に出会い、四番目の星では金持ちになる事だけが生き甲斐の実業家に出会う。王子さまはこれまでの星で出会った大人に対して、「大人はおかしいのだ」と繰り返し感じている。しかし、五番目の星では義務である仕事だけを続けている点燈夫に出会い、初めて好意を抱くのである。そして、六番目の星では間接的な手段によって得られた情報を真の知識と思い込んでいる地理学者に出会う。王子さまが点燈夫だけに好意を抱いたのは、王子さまが自己中心的に物事を考えていないからだと考えられる。つまり、自己満足ばかりの生活は本当に豊かであるのかを現代の大人へ訴えているのである。

2.6 節 地球

王子さまは六番目の星で出会った地理学者に薦められた地球に行き、そこでへびと出会う。そのへびは、地球の中でも人間がいなくて寂しい砂漠に着いた王子さまをかわいそうに思い、小惑星が恋しくなったら助けることを約束する。その後、王子さまは高い山に登って周りに話し掛けるが、言ったことがオーム返しになるばかりで地球はへんな星で人間に味がないと感じる。これまでに王子さまは六つの星で出会った六種類の大人を批判してきたにもかかわらず、地球の人間には味がないと感じている。すなわち、味がない人間と感じているのは王子さまではなく作者自身なのである。王子さまはたくさんのバラを見つけて、自分の星にあったバラがこの世にたった一つではないことに気付いて悲しくなる。なぜなら、王子さまは三つの火山とたった一つのバラがある小惑星を特別に思っていたが、火山もバラもたくさんある中の一つでしかなく、つまらないものであったかもしれないと思い、自信がなくなってしまったからである。

2.7 節 キツネとの出会い

バラが特別だと思っていた王子さまはたくさんのバラに出会い、自分の星にいたバラが特別ではない事を知って悲しみに暮れていた。その時、キツネと出会った王子さまはその悲しみを埋める為にキツネに友達になろうと誘うが、キツネから友達になるという事はお互いにかけての存在になるという事を教えられる。そして、その事から自分が愛情をかけて育てたバラもたくさんあるバラの中で自分にとって特別な存在だったと気付いたのである。ここでキツネは王子さまに肝心な事は目に見えないという言葉を贈っている。つまり、この節では心で見ないと物事は見えてこないという作者の率直なメッセージやその事を忘れてしまっている大人への批判が込められていると考えられるのである。

2.8 節 砂漠の秘密

これまで六つの星を巡り地球に辿り着いた王子さまは、キツネに出会い「肝心なことは目に見えない」ことを学んだ。そして、バラとの約束を果たす為に自分の星へ帰ることを決意するのである。その途中、王子さまは砂漠の中で不時着した飛行士に出会い、喉が渴いた飛行士の為に井戸を探しに行く事になる。何も見えず何も聞こえない砂漠であるが、飛行士は何かひっそりと光っているように感じ、その何かに魅力を覚えていた。飛行士はその何かは分からずにいたが、王子さまの「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ」という言葉によって砂漠が美しい秘密に気づくのである。すなわち、この言葉は大切なものは目に見えないという前節の言葉を裏付けていると考えられる。また、この絵本は作者自身が砂漠に不時着して生死の境を彷徨っていた体験を基に書かれたものであり、よって、作者はこの時に「生きる事」について考えたのではないだろうか。そこで、現代の大人は何が欲しいのか分からずに生きていると感じて、生きていく上で大切な事は身近にあるという事をこの砂漠の中にある井戸の存在を通して伝えているのだと考えられるのである。

2.9 節 別れ

自分の星に帰る事を決意した王子さまは井戸のそばにあった石垣に腰掛け、黄色いへびに帰る為に噛んで欲しいと話した。そして、王子さまはその事を飛行士に伝えるのであるが、王子さまはその決意の中に不安や恐れを感じていた。王子さまは飛行士が自分を忘れない為に夜空に輝く星を眺めて欲しいと語りかける。但し、王子さまは敢えて自分の星がどれかを飛行士に伝えずに、たくさんある星の中でどこかに王子さまが居ると思うだけでどの星も好きになれるからと語り、その日の夜に王子さまは飛行士に見守られながら静かに星に帰って行ったのである。王子さまが敢えて自分の星がどれかを飛行士に伝えなかったのは砂漠の秘密と同様に、大切なもの、つまり、隠れている事を知っているだけで物事がより美しく見えるという事をこの節で更に深めているのである。また、王子さまが自分の星に帰る事への不安や恐れを感じていたのは死ぬ事への恐怖もあるだろうが、子どもから大人になる事への不安を意味しているのだと考えられる。すなわち、王子さまの死は子ども時代との決別を表しているのである。

3 章 異説

前章では大人に向けてのメッセージが込められている通説を紹介したが、この章で紹介する異説にはドイツの軍事行動やナチズム・ファシズム、フランスのレジスタンス等の戦争に対する作者の想いが隠されているのである。そこで、第二次世界大戦を経験した作者の時代背景に着目して、通説で触れた内容に秘められた作者のもう一つのメッセージを読み解いていくことにする。

3.1 節 ウワバミ

「星の王子さま」は飛行士が初めて描いたというウワバミがゾウを丸呑みにする絵で始まっており、このウワバミは獲物を呑み込むと半年もの間動けなくなりその間に獲物がこなされるとの記述はとても印象に残るものである。戦争を経験した作者の時代背景を考えると、このウワバミはドイツの軍事行動を表していると考えられる。ここでドイツの軍事行動について考えると、下の年表にあるようにドイツの軍事行動は概ね六ヶ月ごとに起こっていることが見て取れる。つまり、「ゾウ」と「半年」に着目するとウワバミに丸呑みにされた「ゾウ」はドイツに侵略された国々を表しており、ウワバミの「半年」という周期は六ヶ月ごとに起こっているドイツの軍事行動を

表していると考えられるのである。

ドイツ軍事行動年表

1938. 3. 10	ドイツ、オーストラリア侵略
1938. 9. 29	ドイツ、チェコ侵略
1939. 3. 15	ドイツ、チェコ解体
1939. 9. 1	ドイツ、ポーランド侵入
1940. 4. 9	ドイツ、デンマーク、ノルウェー侵入
1940. 5. 10	フランス、ドイツに大敗

3.2 節 バオバブ

三本のバオバブが登場する節ではバオバブを科学の象徴だと考えて、人類の怠慢による地球の崩壊を表していると通説で述べてきたが、怠慢による地球の崩壊であるならば「三本」という具体的な数字が十分に説明できない。また、この節で「一度だけ日頃の遠慮を抜きにして」とあるが、これは作者が叫ばずにはいられなかった重大な訴えが秘められていると考えるべきであろう。そこで、作者が戦争の真ただ中にその身を置いていたことを踏まえると、この三本のバオバブとはナチズム・ファシズム・日本の帝国主義を表したものだと言える。そして、ナチズムやファシズムを成長する前の芽のうちに抜き取っておくべきであったという事を作者は強調しているのである。

3.3 節 バラのトゲ

通説ではバラのトゲについて触れていないが、先の三本のバオバブと同様に、「四つのちっぽけなトゲ」とある「四つ」という数字には重要な鍵が隠されていると考えられるのである。それは作者が生きた時代背景にあるフランスのレジスタンスに関連しており、レジスタンス精神とは『信念に燃えた行為によって裏づけられた精神状態』であり、一言で云うならば『拒否の精神』である。それは、1. 「不名誉の拒否」、2. 「対独協力の拒否」、3. 「ヴィシー体制の供与する一時的な安逸の拒否」、4. 「祖国フランスを飲み去ろうとしている不幸の前に絶望することの拒否」である。

まとめ

以上のように、大人に向けてのメッセージが込められている通説と戦争に対するメッセージが込められている異説について読み解いてきたが、星の王子さまに著者サン＝テグジュペリが込めた一番重要なメッセージは「肝心なことは目に見えない」という事ではないだろうか。しかし、その言葉を聞いて「その通り」と感心するだけでは所詮ウワバミの内側を見ることができない「大人」と同じであり、この言葉を理解した事にはならないのである。すなわち、肝心な事を心で見るという事はウワバミの内側まで見抜く事なのである。これは本文は述べていないが、王子さまとキツネの会話に狩人が登場する場面があり、キツネを捕まえようとする狩人にも毎週決まった日に村の娘達と踊る休暇がある。この節を戦争という点に着目するならば、戦争の中の一時の休息という実際に戦場で戦った作者の体験が伺えるのではないだろうか。

このように単に外側だけを見て理解した気持ちになり満足するのではなく、普通にしていれば見えない内側にまで目を向けて理解しようとしなくては物事の本質を知る事はできないのである。勿論、著者の意図はいくら試行錯誤しても著者本人にしか分からないことであるが、視点を変え

て考える事、そして、物事の本質を知り、大切な事に気付くという事が「肝心なことは目に見えない」という言葉に込められている作者のメッセージと理解して結実とする。最後に、著者は「星の王子さま」以外にも様々な作品を残しており、それらを読み深めた上で再度この絵本を読み返すことを推奨する。

ゆとり教育について

川端 希望 興梠 有加里 築地 文枝

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

日本における教育方法として長年取り入れられてきた、所謂「詰めこみ型」の教育が批判されるようになり、「ゆとり教育」が登場した。ゆとり教育とは個人のペースに合わせて授業を進めるという教育であり、1970年代に日本教職員組合が「ゆとりある学校」を提起して、国営企業の民営化を推し進めた第2次中曽根内閣の主導の下に「公教育の民営化」という意味合いの中で「ゆとり」を重視した教育として2002年度から実質的に開始された。しかし、「ゆとり教育」はその目的の達成が検証されていない状態の中、詰め込み教育に反対していた日本教職員組合や教育者、経済界等の有識者からは支持されていた一方で、生徒の学力低下の原因として批判されるようになった。更に、「ゆとり教育世代」が社会進出し始めた現在において、基礎的な学力や応用力について、現役世代とのギャップや国際競争力の低下等が懸念されている。

このような背景の下、国際学習到達度調査 (PISA) の結果を堺にゆとり教育の見直しが行われ、2008年には内容を縮小させていた今までの流れとは逆に、30年ぶりに内容を増加させた新学習指導要領が告示され、これに先駆け、東京都では新学習指導要領実施に合わせて学校5日制についても見直す動きが出ている現状である。そこで、本研究ではこれまで行われてきたゆとり教育の概要やゆとり教育がもたらした様々な影響および懸念について明らかにしていくと共に、今後の課題について考察していくことにする。

1 章 ゆとり教育

「ゆとり教育」における個人の学習ペースに合わせた授業という考え方は、「詰めこみ型」の教育が批判されるようになったことを契機に誕生した。そして、1972年に「ゆとり教育」が提起され、実際に開始される2002年までの間には学習内容と授業時間の削減が繰り返され、それに伴い「学校5日制」が実現化される等、より良い「ゆとり教育」の実現の為に多くの修正が繰り返されている。そこで、この章では「ゆとり教育」が開始までの経緯と主な取り組みについて解説していくことにする。

1.1 節 ゆとり教育とは

日本教職員組合が「学校5日制」と共に「ゆとり教育」を提起したのは1972年のことである。その後、学習指導要領の改正や学習内容、授業時間の削減を繰り返して実質的にゆとり教育が開始されたのは2002年である。

ゆとり教育とは、個人の学習ペースに合わせて授業を進める教育のことであり、知識を重視する「詰めこみ型」の教育が批判されるようになったことを契機としてゆとり教育の考え方が誕生した。それまでのすべての児童・生徒が一律に学習すべきとされた標準のカリキュラムでは、内容の分からないまま授業が先に進んだり、すでに分かっている子どもにとっては退屈だったり授業の形骸化が進んでいるとの指摘があった。その為、学習内容を必要最低限の範囲に留めて、教室や学校の実態に合わせた授業の展開を現場の教師に任せることにより、「ゆとり」の中で豊かな人間性や「生きる力」を育むと同時に、基本的な内容を確実に定着させ、個性を生かす教育を目指していた。このように、個人に特化した教育がゆとり教育である。

1.2 節 学習内容と授業時数削減

1972年にゆとり教育が提起され、正式に開始される2002年までの間に合計3度の学習内容と授業時数の削減が行われた。1度目の削減は1980年に行われ、小学校6年間の主要4教科が312時間削減された。その後1992年の2度目の削減で更に207時間が削減されると共に、小学校1,2学年では、自己中心性が強く、自分の周囲で起きた現象を自然現象か社会現象かを識別する能力に乏しいという理由から「理科」「社会」を廃止し「生活」が新設された。また、同年9月には第2土曜日が休業日に変更され、これに加えて1995年4月には第4土曜日も休業日となった。このことから2002年に実施される「学校5日制」の実現化を窺うことができる。そして、3度目の削減はゆとり教育実施年の2002年に各学校の創意工夫によるカリキュラム「総合的な学習の時間」の新設と「学校5日制」の実施に伴い、前回2度の削減時数を約200時間上回る、511時間が削減された。下図は2002年のゆとり教育による小学校の授業時間の変化を表したものである。

ゆとり教育による小学校の授業時間の変化（2002年）

単位：時間	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	306→272	315→280	280→235	280→235	210→180	210→175
算数	136→114	175→155	175→150	175→150	175→150	175→150
理科	-	-	105→70	1105→90	105→95	105→95
社会	-	-	105→70	105→85	105→90	105→100
生活	102→102	105→105	-	-	-	-
総合的な学習	-	-	105	105	110	110
総授業時間数	850→782	910→840	980→910	1015→945	1015→945	1015→945

(e-politics-教育資料・統計参照)

1.3 節 相対評価と絶対評価

教育方針が変わると共に成績の評価方法も相対評価から絶対評価へと変更された。この絶対評価により、誰でも頑張れば最高評価を付けてもらえることができたようになった反面、対抗意欲の低下が見られる等、この変化は教師や生徒に大きな影響を与えることとなった。また、これまでの相対評価は本人の課題遂行レベルが他者より劣っていることを強調することになり、多くの生徒には否定的にとらえられている。

一方で、絶対評価は教師側が設定する基準に基づく評価であり、即ち、それは学校全体的に評価が高い、評価が低いという学校間によって格差が生じることにも繋がっている。更に、生徒の中には評価が教師の手に委ねられる配分が大きくなった分、教師の顔色を窺ったり、教師に気に入られようとしたりする者もいる等、教師側が評価される基準を明確にしても生徒の意欲に変わりはないという報告があることも現実である。

2 章 ゆとり教育の利点と問題点

ゆとり教育が実際に施行された結果、国が予測していたゆとり教育の利点とそれに反して浮上してきたいくつもの問題がある。国の考えていた3つの利点とその具体的な内容は何であったのか、また、ゆとり教育により生じた学力の低下等の大きな問題やその他の問題点にはどんなものがあるのだろうか。そこで、この章ではゆとり教育における具体的な「メリット」と「デメリット」について詳しく解説していくことにする。

2.1 節 ゆとり教育の利点

ゆとり教育の利点として、文部科学省が考えていたのは次の 3 つのような点である。まず、1 つ目は考える力を養うという点があげられ、基本的には学校で教わる勉強範囲は少なくなった為、それ以上知識を吸収したい場合には自分で調べるしかないという理屈から、このような教育課程によって子ども達が自分自身で物事を考える力を育てることができると考えられていた。そして、2 つ目には生きる力を養うという点であり、物事を自分の頭で考える力とは生きる力に直結しているという理屈から、物事を自分で考えるという習慣は人間が生きていくうえで欠かせない要素であると考えられていた。最後に、3 つ目は豊かな人間性を育むという点であり、生きる力が養われると豊かな人間性につながるという論理、つまり、生きる力を養う為には多くの経験を積む必要があり、それは多様な価値観を学んで豊かな人間性を育むということになると考えられた。但し、これらはあくまで文部科学省が考えていたものであり、確かな結果は出ていないのが現実である。

2.2 節 学力低下

授業時数削減や評価方法の変更により、子どもの「考える力」「生きる力」「豊かな人間性」を育むことを目的に実施されたゆとり教育であったが、それとは裏腹に子どもの「学力低下」がうたわれるようになった。それを裏付けるきっかけとなったのが 2000 年に開始され、以後 3 年毎に調査されている国際学習到達度調査（PISA）である。この調査では義務教育の修了段階にある 15 歳の生徒を対象に、読解力、数学的应用力、科学的应用力、問題解決力を調査するものであり、この調査の第 1 回目に数学的应用力の分野において、日本は国際順位 1 位を記録した。しかし、ゆとり教育実施後の調査となった 2003 年の調査では、比較対象である 3 年前より 5 ランク順位を下げて 6 位となり、更に、2006 年の調査では 4 ランク下げて 10 位を記録した。加えて、全ての勉強の基本となる読解力において、日本は最初の調査時では 8 位にとどまっていたが、2003 年には 14 位、続いて 2006 年には 15 位を記録した。以下はこれらの結果を表したものである。

PISA 2000 年調査

数学的リテラシー		読解力		科学的リテラシー	
1. 日本	557	1. フィンランド	546	1. 韓国	552
2. 韓国	547	2. カナダ	534	2. 日本	550
3. ニュージーランド	537	3. ニュージーランド	529	3. フィンランド	538
4. フィンランド	536	4. オーストラリア	528	4. イギリス	532
5. オーストラリア	533	5. アイルランド	527	5. カナダ	529
5. カナダ	533	6. 韓国	525	6. ニュージーランド	528
7. スイス	529	7. イギリス	523	6. オーストラリア	528
8. イギリス	529	8. 日本	522	8. オーストリア	519
9. ベルギー	520	9. スウェーデン	516	9. アイルランド	513
10. フランス	517	10. オーストリア	507	10. スウェーデン	512

PISA 2003 年調査

数学的リテラシー		読解力		科学的リテラシー	
1. 香港	550	1. フィンランド	543	1. フィンランド	548
2. フィンランド	544	2. 韓国	534	1. 日本	548
3. 韓国	542	3. カナダ	528	3. 香港	539
4. オランダ	538	4. オーストラリア	525	4. 韓国	538
5. リヒテンシュタイン	536	4. リヒテンシュタイン	525	5. リヒテンシュタイン	525
6. 日本	534	6. ニュージーランド	522	5. オーストラリア	525
7. カナダ	532	7. アイルランド	515	7. マカオ	525
8. ベルギー	529	8. スウェーデン	514	8. オランダ	524
9. マカオ	527	9. オランダ	513	9. チェコ	523
9. スイス	527	10. 香港	510	10. ニュージーランド	521

PISA 2006 年調査

数学的リテラシー		読解力		科学的リテラシー	
1. 台湾	549	1. 韓国	556	1. フィンランド	563
2. フィンランド	548	2. フィンランド	547	2. 香港	542
3. 香港	547	3. 香港	536	3. カナダ	534
3. 韓国	547	4. カナダ	527	4. 台湾	532
5. オランダ	531	5. ニュージーランド	521	5. エストニア	531
6. スイス	530	6. アイルランド	517	5. 日本	531
7. カナダ	527	7. オーストラリア	513	7. ニュージーランド	530
8. マカオ	525	8. リヒテンシュタイン	510	8. オーストラリア	527
8. リヒテンシュタイン	525	9. ポーランド	508	9. オランダ	525
10. 日本	523	10. スウェーデン	507	10. リヒテンシュタイン	522

日本政府は順位下落の原因は2002年に実施されたゆとり教育にあると分析した。2006年にPISAの調査を受ける際、当時の高校1年生は、ゆとり教育が初めて実施された2002年には小学校6年生であった。よって、彼らは、理解力が大きく伸びる過程である小学校6年間と中学校3年間の過程を授業時数と教科科目が以前より10%ほど削減されたゆとり教育の学習指導要領に従い教育を受けてきたのである。これらの結果から、ゆとり教育が学力低下の原因であることを証拠づけると共に、今後の日本の国際競争力の低下を促すきっかけとなったのである。

2.3 節 ゆとり教育の問題点

ゆとり教育の教育改革である。内容や授業時間が削減された為に、学力の低下が問題に挙げら

れているのは上記の通りである。が、その他にもゆとり教育は様々な問題を抱えている。個性を尊重し自主性を育てることはゆとり教育の利点として挙げられる。が、現実には学校での勉強に価値を見出せなくなり、ほどほどの努力しかしないことで、努力や忍耐が価値から外され、ある程度の学力と生活で満足してしまう現状であり、更には自己満足すらも子どもの個性となってしまうなどの問題が浮上しているのが現実である。そして、これは子ども達の勉強離れに一層拍車がかかってくることへと繋がっていくのである。

また、ゆとり教育は生徒側だけでなく教師側にも問題が出てくる。まず、教師が宿題を出さなくなった為に家庭学習のスキルや習慣がつきにくくなったという問題、二つ目には学習することの意義をしっかりと教えることのできない教師が増えた為に積み重ねの努力や忍耐を避けて安易な自己満足や自己肯定の風潮を生み出すという問題等である。学習指導要領に示される学習内容は「到達目標」とされているが、「これ以上教えてはいけない」と硬直的な解釈にとる教師が存在していることも事実であり、それにより学習進度の速い生徒への対処が問題になっている。そして、ゆとり教育によって導入された「総合的な学習の時間」は教員や生徒の力量・意欲がなければ意味を成さず、そういった要素に左右されてしまうという欠点を持っている。また、この「総合的な学習の時間」は何を基準に成功・失敗の評価をするのかという問題もあり、基礎学習力が低い生徒はこの授業の目的でもある「主体的に考える力」等も低くなる傾向があるという問題もある。

その他にも、ゆとり教育改革には教育にかかわる制度自体についての問題もある。一つ目には受験科目を減らしたことで子ども達が受験に関係ない科目を勉強しなくなったことである。二つ目には経済的に上位階層に受験戦争が限定される傾向があり、家庭の教育力の格差が出てくることで、それに関連して塾に行く子と行かない子の学力格差という、親の収入や学歴、学習環境の格差問題にも繋がっていくのである。この結果、ゆとり教育は一人ひとりの良さや知識獲得の個性といった「個性の尊重」を強調することで、現実の学力評価の客観性や様々な問題を棚上げして、これらの問題を一層顕著化させているのである。

3 章 現状とこれから

ゆとり教育世代は社会へ進出後に先輩世代とのギャップの埋め合わせをすべく、自分のレベルを高める努力が求められており、更に、ゆとり教育がこれからもたらすとされる問題として国際競争力の低下が考えられている。このように、ゆとり教育は教育を受けている時期だけでなく、その後も大きな影響を与えるのであり、この現状に対して政府は国際学習到達度調査（PISA）の結果を境に、子ども達の思考力・判断力・表現力を大きく高める為、昭和 50 年代の改定以来減り続けてきた授業時間を 30 年ぶりに増加することを決定した。これが、新学習指導要領「生きる力」である。そこで、この章ではゆとり教育がこれからもたらす問題と日本の教育のこれからについての具体的な政策を解説していく。

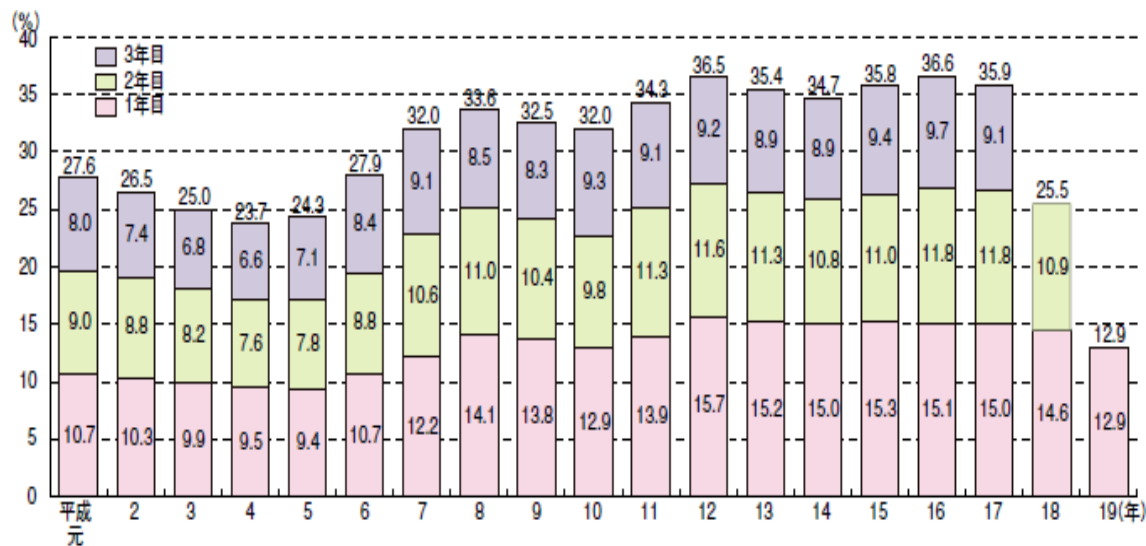
3.1 節 ゆとり教育世代の社会進出

ゆとり教育世代の社会進出後の評価として、今のところ目立ったマイナス評価は出ていないが、職種によっては漢字の読み書きや暗算力等といった基本的な学力にやや前世代との差を感じると評する意見もある。一般論として、ゆとり教育世代はそれ以前の世代よりも基礎的な学問を学校で習っておらず、また、社会に出れば基礎学力やそれに付随した知識を仕事に応用する場面がいくつも出てくることから、いざ企業に就職した場合、先輩世代とのギャップを埋めるのに苦労することがあることも事実である。したがって、ゆとり教育世代はギャップの埋め合わせをすべく自分のレベルを高める努力を余計にしなければならないのである。

近年、若者の離職率が問題になっている。平成 4 年以降、大学卒業者の離職率の推移は増加傾

向にあり、ゆとり教育のカリキュラムと照らし合わせると平成4年は2度目の授業時数削減が行われた。また、離職率が30%を超えた平成7年は第4土曜日が休業日となった年である。

■第1-2-9 図<3> 在職期間別離職率の推移(大学卒業者)



資料：厚生労働省「新規学校卒業就職者の就職離職状況調査」

近年、若者の早期離職が問題になっている。上の図は平成元年から19年の大学卒業者の在職期間別離職率の推移を表したものである。

平成4年以降、大学卒業者の離職率の推移は増加傾向にあり、ゆとり教育のカリキュラムと照らし合わせると、平成4年は2度目の授業時数削減が行われ207時間が削減されると共に、小学校低学年では「理科」「社会」を廃止し「生活」が新設された年である。また、離職率が30%を超えた平成7年は第四土曜日が休業日となった年であり、以降、30%を上回る状況となっている。

1992年9月から第二土曜日が休業となった為、翌年の1993年に小学校に入学した学年、つまり、1987年生まれを「ゆとり第一世代」と言われるようになった。この「ゆとり第一世代」はゆとり教育の中で、競争させない・順番を付けないことが当たり前として育ってきた世代であり、少子化・核家族化、地域コミュニティとの接点の少ない日々を送ってきた世代、および、大人や先輩・同輩・後輩等の上下左右の関係自体も当然希薄になった世代でもある。一方で、ゆとり教育の名の下、自分の「やりたいこと」「やれること」「やるべきこと」を自分なりに自由にコントロールできる「自己認識・自己判断を中心とした世界」に生きてきたのであり、制約の少ない環境で自己合理的に活動してきた世代が多いと言っても過言ではない。しかし、そのような世代がビジネス社会に出た際、今までとは全く違う大きなギャップに苦しむことは容易に想像ができる。よって、上の表が示すように今後若者の早期離職率は更に深刻になることが懸念されるのである。

3.2 節 国際競争力の低下とゆとり教育

ゆとり教育により生じるであろうと懸念される問題に国際競争力の低下が挙げられている。各国で国際化が進む一方、それに合わせ英語力は必須の能力として今では小学校教育の現場においても英語教育がおこなわれている。しかし、ゆとり教育推進の結果、子ども達の学力は低下して、英語の能力も低下している状況となっている。日本人の英語力・英会話力が落ちることは、国際市場に置いて支障を来すことは言うまでもなく、全く会話ができませんとまではいかなくても対等なビジネスを展開していくことは当然難しくなってくる。そうなれば、外需中心の日本においては自国の製品が海外に売れなくなる等、大きな打撃となることが予測される。また、現在の日

本の一番の武器とも言える高度な技術力を支えているのは豊かな基礎学力に裏打ちされた確かな応用科学によるものであるが、基礎学力の低下した子どもが応用力を身につけるとは考え辛く、科学技術に必要な研究を発展させることはおろか、現在の技術水準を維持できない可能性も出てくるのである。

近年、中国・インド等の経済新興国が大きな力を付け始め、先進国に取って代わろうと日々成長を続けており、アメリカ等の先進諸国もそれに対抗して教育は勿論、科学新興に力を入れている現状である。このように、世界の国々ではその国の中で競争を生き抜いてきた子ども達が世界に進出・活躍しているのであり、その中でゆとり教育は国際社会とは逆行した教育方法なのである。よって、日本がこのままゆとり教育を続けていくのであれば、日本の国際競争力は降下の一途を辿ることは確実となっていくことは容易に予想できるであろう。

3.3 節 新学習指導要領

本来、ゆとり教育は子どもの「考える力」、「生きる力」、「豊かな人間性」を育むことを目的として、個人に特化した教育であるはずであった。しかしながら、これまで述べてきたようにその理想とは裏腹に、多くの問題点が浮上している現状となっている。この現状に対して、ゆとり教育により子ども達が自由な時間が増えた結果、自ら本を読む時間は減り、遊ぶ時間ばかりが大きく増えたと分析した政府は、2003 年と 2006 年の国際学習到達度調査(PISA)の結果を堺に、子ども達の思考力・判断力。表現力を大きく高める為、昭和 50 年代の改定以来減り続けてきた授業時間を 30 年ぶりに増加することを決定した。これが、新学習指導要領「生きる力」である。

新学習指導要領では生きる力を育む為、今まで以上に家庭や地域等の社会全体で子ども達の教育に取り組むことが大切であり、よって、国語をはじめとして科学や社会科目についても授業時数を増加して読解力と作文力を重視する等、小学校は 6 年間で現行より 278 時間増えて 5645 時間、中学校は 3 年間で 105 時間増え 3045 時間となった。これらの授業時数の確保に当たっては、各教科で行うことを前提として、教科等を横断した課題解決的な学習や探究活動を行う時間と各教科との円滑な接続を図り、総合的な学習の時間や中学校の選択教科の授業時数の在り方を見直して、主要教科の時間を増やし、週 3~4 時間組まれていた総合学習の時間を 1~2 時間削減すると共に、中学校に開設されている選択授業をほとんど廃止して総合学習と合わせて週 2 時間とすることとなった。そして、新学習指導要領は小学校や中学校では 2009 年度に一部前倒して実施され、小学校では 2011 年度、中学校では 2012 年度に完全実施が行われている。また、高校では 2012 年度入学者から一部前倒して実施され、2013 年度入学者から完全実施の予定となっている。加えて、政府としてはゆとり教育の主な取り組みの 1 つである学校 5 日制の方針は依然として変えてはいないが、公立高等学校では学校 5 日制を前提とした上で、土曜日を進学や資格取得の為に学習提供の形で活用しており、また、公立小学校や中学校でも地域等と連携しつつ、希望する児童・生徒に対して自然体験等の集団宿泊活動や文化・スポーツ等の体験的な学習機会の提供を行う等の取り組みを行っている。特に東京都では、新学習指導要領実施に合わせて一般の公立中学校での土曜授業の復活容認等、学校 5 日制についても見直す動きが出ている現状となっている。

このように、子ども達の教育に今まで以上に社会全体で取り組んでいる等、

まとめ

これまで述べてきたように、政府は子ども達の負担軽減と生きる力を育む教育を目的としたのであるが、子ども達の勉強離れによる学力低下や教師の質の低下、教育費の増大による経済格差等、ゆとり教育は多くの問題を生み出して、国の意図するところから大きく外れ、結果的に失敗に終わったと言えるのではないだろうか。また、国際的に見てもゆとり教育は時代の流れに逆行

しており、日本は国際競争力の低下を懸念しなければならない事態にまで追いこまれている状況となっているのである。このような状況に対して、現在、政府は30年ぶりに授業時数を見直して「新学習指導要領」を脱ゆとり教育として発表しているが、遅すぎた方針転換に未だ結果は得られていない現状である。

高い学歴と社会力が求められている現代社会において、子どもの学力低下はこれからの国の経済力に大きく関わる問題である。そして、長い年月をかけて築かれてきたこの教育方法にメスを入れることは容易なことではないことも事実である。しかしながら、これらの現状を回復していく為に、新学習指導要領という今回の政府の取り組みは大きな鍵となることを信じて、これからの未来を生きていく子ども達の為に政府の取り組みに期待したい。

アニメ・漫画の影響

高橋 彩 橋本 沙希

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

アニメや漫画は私達にとって常に身近な存在であると共に、現代の日本では文化とも言える存在となっている。しかし、これらに描かれている暴力シーンや性描写は年々激しさを増しており、「命の感覚」や「性に対するモラル」が希薄化することでイジメや性犯罪等が増加することが懸念されていることも事実である。例として、少年が子どもの首を切り落とすといった凶悪犯罪や幼児に対する性犯罪等、子どもや若者が被害者/加害者となる事件が近年相次いで発生していることが大きな社会問題となっているが、このような犯罪はアニメや漫画の影響を受けている事は少なくはないのである。勿論、アニメや漫画は悪影響ばかりではなく、子どもの想像力を促進させ、人を思いやる気持ちや人を信じることの大切さ、そして、夢や希望を与えること等の良い影響が多いことは言うまでもないことである。実際、保育現場ではアニメや漫画が保育の教材や道具として利用されており、子どもの豊かな感受性を育む事に役立てられている。また、世界の最先端技術となっている日本のロボット工学の多くの研究者の目的は心優しいロボット「鉄腕アトム」の開発であり、子どもの頃に受けた影響は日本の将来を左右するといっても過言ではないのである。

このように、アニメや漫画の影響は賛否両論であるが、どちらも未来を担う子ども達に関わることであり、社会全体で考える事が必要なのである。そこで、本研究ではアニメや漫画が人々に、特に子ども達に与える影響について詳しく解説していくことにする。

1章 アニメ・漫画の歴史

アニメや漫画は私たちの生活の中に多く存在している。テレビをつけるとアニメを気軽に見ることができ、本屋にも漫画が多く並んでいる。また、日本のアニメ・漫画は現在外国人からも受け入れられ、世界各国に広まっている現状である。そこで、この章では日本と外国のアニメ・漫画の歴史について述べていくことにする。

1.1 節 日本のアニメ・漫画の歴史

第2次世界大戦への戦争が始まる直前の1930年代、漫画といえば新聞の連載がほとんどであった。この頃、子ども向け漫画雑誌としては「少年倶楽部」などが創刊されており、その中でも最も人気を呼んでいたのが田河水泡氏の「のらくろ」という作品であった。1937年、日中戦争が勃発して1941年にはアメリカとの開戦を迎えると「のらくろ」などの子ども漫画は子ども向けの戦意高揚の宣伝に使われるようになった。この頃、同じく子ども向けの戦意高揚として海軍省で日本初の長編アニメ「桃太郎の海鷲」が作られた。戦意高揚の作品であっても「子どもたちに夢を与え、励ましたい」という思いで平和への思いが込められた場面が随所に盛り込まれていた。

1945年、日本はポツダム宣言を受諾して敗戦を迎えた。そして、アメリカを中心とする連合国最高指令本部（GHQ）の統制下に入ると、GHQによる徹底的な報道規制が始まり、戦意高揚に使われた「のらくろ」や「桃太郎の海鷲」などの漫画や書籍は回収されて廃棄処分された。

戦争中の思想統制の反動もあり、若者のいろんな情報を手に入れたい、確信したいという欲求が戦後一気に花開き、戦争に負け、暗く希望が無かった時代、漫画に明るい未来を求めて次々と

漫画家が現れた。戦後の高度経済成長期前後にはテレビアニメの原作としての漫画、または、テレビアニメを連載した漫画が増え、そういった中で今現在、子ども向け漫画雑誌「少年ジャンプ」等の人気作品はその大半がテレビアニメ化されているといった状況となっている。

1.2 節 外国のアニメ・漫画の歴史

外国のアニメとして、まず1つ目に「グリム童話」が挙げられる。グリム童話はヤーコプ・ルートヴィヒ・カルル・グリムとヴィルヘルム・カール・グリムのグリム兄弟によって編集された童話集であり、いくつもの話が集まって一冊の本になっている。この童話集はドイツ語圏では聖書に次ぐベストセラーであり、ドイツ語圏に限らず、童話集としては世界で最も親しまれているもので、日本でも広く親しまれてきた。その代表作として「赤ずきん」「白雪姫」「ヘンゼルとグレーテル」「灰かぶり」等があるが、これらの物語は多くの人々が一度は聞いたことのあるハッピーエンドで終わる話でなく、元々の物語は残酷なものが多く、現在までに少しずつ改訂されてきたのである。

2つ目にアメリカのアニメが挙げられる。アメリカン・アニメーションの黄金時代と言え、1928年音声付きカートゥーン映画の登場に始まり、劇場用短編アニメーションがテレビ用アニメーションに緩やかに敗退を始めた1960年代まで続いた一期間である。ミッキーマウス、ドナルドダック、ポパイ、トムとジェリー等の世界的に有名キャラクターはこの期間に生みだされたのである。ミッキーマウスを生み出したウォルト・ディズニーは1928年に記録的な売り上げを達成した短編アニメーション「蒸気船ウィリー」を公開し、続いて、1937年に史上初の総天然色長編アニメーション映画「白雪姫」を公開した。この長編映画は2年間に及ぶディズニー・スタジオの努力の結晶であり、「白雪姫」は全世界で莫大な興行収入を上げ、さらには芸術形式としてのアニメーションの発展を示すこととなった。アメリカのアニメとしては、ディズニーの他にもアメコミ（アメリカン・コミックス）と呼ばれるアメリカの漫画作品が多く存在している。アメリカにおけるコミック・ブックは19世紀後半の新聞紙上に掲載された初期のコミック・ストリップ（コマ漫画）から発展をしてきた。そして、1938年に「スーパーマン」が登場した。この「スーパーマン」がアメリカン・コミック界に与えた衝撃はあまりにも大きく、その後の2年間で殆どのアメリカン・コミック出版社がスーパーヒーロー物のシリーズを発表することとなり、その結果、スーパーマンは世界で最も有名なキャラクターのひとつとなったのである。このようにして、アメリカ人に受け入れられたスーパーヒーロー物の作品は「スーパーマン」をはじめとして「バットマン」「X-MEN」「スパイダーマン」等、多くの作品が漫画に留まらず実写化及び映画化されている現状となっている。

1.3 節 アニメ輸出国日本

アジア諸国に概ね共通して言えることは、日本の漫画本からコピーしたものを編集したいいわゆる海賊版がかつては盛んに制作され、それによって日本の漫画を受け入れる市場は開拓されてきたということである。特に、韓国では日本の文化的表現物の輸入を政府が厳しく規制していたが、既に1950年代から日本の漫画の海賊版が読まれていた。更に、今現在韓国では日本で出た漫画の単行本の海賊版が早いものでは大体1カ月遅れで出版されることがある。アニメにおいては、1960年代半ば以降急激な高度経済成長によりアジア各国に新たに形成された中間層にテレビが普及されて以来、主にテレビ番組として広がり、1980年代になってからビデオデッキも普及するようになると、日本で放送されたものをコピーした海賊版としても出回るようになった。

アメリカで日本のアニメが放送されたのは1963年の「鉄腕アトム」が最初であり、放送に合わせて手塚治虫の漫画も出版され、「鉄腕アトム」は現在までに30カ国以上で放送された。また、漫画においてはアメリカの漫画ファンや漫画作家達が米国伝統のスーパーヒーロものに飽きて、

もっと異なったスタイルの作品を探し求めるようになり、1988年に出版された大友克洋氏の「AKIRA」が最大のヒットとなった。ヨーロッパではイタリアやフランス、スペインで日本のアニメの放送が始まり人気を得るのは1970年代からであるが、漫画が出版されてははっきりとした人気を得たのは1990年代に入ってからである。比較的早くから日本のアニメが受容されたイタリアとフランスで最初に日本のアニメが大人気を得たのは、1978年に放送された「UFO ロボ グレンダイザー」である。また、イギリスでは放送局の数が圧倒的に少ないことと、英語圏である為に日本のアニメが地上波で放送されることはほとんどなかった。その為、1990年代になりやっと日本のアニメが広がって始めたのである。

しかしながら、これらの日本アニメや漫画の進出に対して、明確な拒否反応を示した国もいくつかあった。その大きな理由は古くから日本でも行われた批判と同じように暴力的で性的な表現を含むというものだったからである。そして、そのことに国によっては過敏に反応し、かなり大きな内容の変更が行われた場合もあった。その一方で、1999年には新たな転機があり、前年から放送されていた「ポケットモンスター」が全米を初めとして世界各地で大成功を収めた。そこから特に日本のアニメ作品への注目が更に高まり、その後欧米圏ではドラゴンボールなどの格闘系、そして、女の子向けの美少女戦士セーラームーン等、ヨーロッパのアニメの80%以上は日本製となり、アジアでは「クレヨンしんちゃん」や「ちびまるこちゃん」が徐々に人気を集めてきた。更に、多くの国々に共通して言えることは、「ドラゴンボール」「遊戯王」「ポケットモンスター」「カードカードキャプターさくら」「デジモン」「美少女戦士セーラームーン」が人気であることである。つまり、アニメや漫画は国境など関係なく、人気のあるものが共通しているのである。

2 章 心理的影響と効果

前章で述べたようにアニメや漫画は人々の生活の中に広く浸透している。しかしながら、教育上において子どもにあまり良くない等の心理的悪影響や視聴しすぎることによって目が悪くなる等の身体的悪影響が懸念されていることも事実である。勿論、これらの懸念の背景には情報化社会の中で一方的に与えられる情報に対する正確性や公共性への疑問、また、「しつけ」の文化が希薄化・形骸化している現代社会での大人の責任放棄があることを忘れてはならない。これらについての詳細は次章に譲ることにするが、一方で、アニメや漫画が子ども達に悪影響のみを与えているのであればその存在意義はあるはずもなく、そこで、この章ではアニメや漫画が子ども達に与える良い心理影響について述べていくことにする。

2.1 節 アニメ・漫画が与える心理的影響と効果

アニメや漫画が子どもに与える良い心理影響として、初めに挙げられることは、「そのキャラクターのようになりたい」という夢を持ったり、「そのキャラクターのように強くなりたい」という憧れを持つことである。このような夢や憧れから子どもたちはアニメのキャラクターグッズを持っていることがあり、それはアニメが子どもたちに夢や希望等の良い心理影響を与えているということの意味している。また、サッカー選手の川口能活氏や小野信二氏等の日本代表経験者を筆頭に、1971年から1974年までのベビーブームに生まれた世代と言われるポスト団塊ジュニアには『キャプテン翼』の影響でサッカーを始めた」という選手が多い。そして、この作品の影響は日本だけに留まらずに世界中に及んでおり、同年代の世界的名選手の中にもファンが多く、例えば、元フランス代表のダビド・トレゼゲやスペイン代表のフェルナンド・トーレスらは短編的にコメントを寄せる等、また、ブラジル出身でACミランに所属しているロナウジーニョや元フランス代表のジネディーヌ・ジダン等も同作品のファンであることを公言している。

3～6歳児向けの作品では、幼児に人気の高いキャラクター等を主人公にして、幼児でも分かり

やすいストーリーの中に社会のルールやモラル等を織り交ぜて「しつけ効果」を狙った作品が多くみられ、幼年層に親しみやすい擬人化された動物や物が登場する作品が多くなっている。例えば、「それゆけ！アンパンマン」や「しましまとらのしまじろう」がその代表例である。また、男児向け特撮や一部の女子向けアニメもこのジャンルのアニメと同様の効果を織り交ぜられている。

子どもに集団生活のマナーや人間関係を築くことを伝えることは簡単なことではない。しかし、子ども達でも分かるアニメ、漫画、絵本、紙芝居等を通じて楽しく伝えることができるならば、子ども達の情緒や想像力を促進させる為に大きな心理影響や効果を期待できる。例として、古くから知られているイソップ童話が挙げられる。イソップ童話には「しつけ効果」や「考える力」を狙った作品がみられ、多くの動物が登場することから子ども達に分かりやすく、また、親しみやすいものとなっている。それと同時に話の中に含まれている教訓が集団生活を送る上で大切となる人間関係に深く関わっており、それに子ども達自身が気づくことで実際に生かすことができ、また、深く考えさせられる話として様々な角度から物を見る能力を身につけることができる第一歩になるのである。つまり、子ども達にとって主人公に憧れるような話が多いイソップ童話では、物語の面白さだけでなく、人を思いやる気持ちや人を信じることの大切さ、そして、夢を与えることができるのである。

2.2 節 テレビ番組が与える心理影響と効果

良い心理影響として2つ目に挙げられることは、「テレビ」を通して様々な情報を得ることが出来る点である。テレビは子どもの成長にとって悪影響だという意見が多いが、良い点もある。

1 つ目は、絵本と同じようにお話の世界を楽しめる点である。テレビでも絵本と同様に創造の世界を広げることが出来たり、面白さを感じる事が出来ることに加えて、テレビには音声があり、音による刺激も感じる事が出来る。例を挙げると、NHK 教育テレビでは「子ども人形劇」が放送されており、子どもの豊かな感性や創造力が育つようにという狙いがある。この「子ども人形劇」では昔の名作や現代の優れた創作童話が放送され、気軽にお話を楽しむことが出来るのである。

2 つ目は、数や言葉等の習得を促すことが出来る点である。数や言葉を教える時に子ども達の好きなキャラクターや番組を通して楽しく学ぶことが出来るように「おかあさんといっしょ」や「えいごであそぼ」、「にほんごであそぼ」等の番組が放送されている。教えるという形ではなく、遊びの中に取り入れることにより自然に数や言葉に触れ合うことが出来る環境となっているのである。

3 つ目は、動物や昆虫、人体や植物、宇宙や地球等、自然や科学に関する知識や興味を広げることが出来る点である。自然と縁遠くなってきたと言われる最近の子ども達は見たこともない動物や昆虫、また、名前がわからない植物等が沢山ある。よって、テレビを通して見たこともないものを知り、興味関心を持ち、生き物の生態をじっくり観察していくことで自然の不思議や命の輝きを感じる事が出来るのである。

4 つ目に、行った事の無い外国のことや様々な人の暮らし、そして、ニュースを子ども達なりに知り、理解することが出来る点である。これは、テレビを通して興味を持ち、知らないことを知ろうと思うことで子どもが現実世界に対する目を育てることに役立つのである。

このように、テレビを見ることは一般的に言われているように悪い影響ばかりではなく、ある意味においては核家族化や身近な自然の減少といった子育て環境の変化を補う役割を担っているといえるのではないだろうか。勿論、保育は人と人の触れ合いであることは言うまでもなく、よって、家庭や保育現場において、テレビやキャラクター等を保育の中に上手に取り入れていくことが重要となっていくのである。

3 章 心理的「悪」影響と効果

前章で述べたように、アニメや漫画によって夢や憧れを抱くきっかけとなったり、テレビを通して様々な生活知識を身につけることが出来る等、あらゆる面において良い心理影響と効果が挙げられる。しかしながら、物事には両面があり、良い心理影響と同じ分だけの悪い心理影響が存在するのではないだろうか。そこで、この章ではアニメ・漫画が与える悪影響について、心理的・身体的影響だけではなく、凶悪犯罪にまでも至る例や少女漫画の実態について様々な視点から述べていくことにする。

3.1 節 アニメ・漫画が与える心理的悪影響

アニメ・漫画が与える心理的悪影響についてまず初めに、暴力的なシーンや発言等が多数あり、子ども達が真似をしてしまうという点である。前述したように、漫画やアニメのキャラクターに強い憧れを抱く子どもは多いが、その憧れが逆に悪影響となる場合もある。例として、「ワンピース」では刀が頭に刺さろうと、鉄のバットで頭の骨を砕かれようと、真剣でめった斬りにされようと、巨人に踏みつぶされようと、主人公は決して死なず、また、「ポケモン」では動物虐待等が挙げられる。勿論、争うことは悲しいこと、人を傷つけることは自分を傷つけること、守る為の戦いで傷つける為の戦いではない等、漫画を通して作者が伝えたい意図は多々あることも理解できるが、それ以上に年々漫画やアニメの暴力シーンや格闘ゲームは激しさを増しており、どんなに暴力を奮っても人間や動物は死なない等、生き物の命の感覚が希薄化してきていることの方が大きな問題となっている。その結果として、興味本位で真似をすることが増え、イジメ等が増加することが懸念されている。

3.2 節 アニメ・漫画から影響を受けた凶悪犯罪

日本の未成年の凶悪犯罪が起こる背景として、「アニメや漫画」の存在が少なからず関わっていると言われ、特に影響を与えている週刊アニメ雑誌に出てくるような連載作品には、命を軽視するような絵が描かれていたり、未成年にはとても不適切な表現の言葉ややり取りが交わされる等、凶悪犯罪の温床になりかねないとの意見もある。生活の中にアニメや漫画が毎日のように関わっている現代では、子ども達がアニメや漫画から受ける影響は良い面でも悪い面でも共に大きなものとなってきている。中には、アニメや漫画の影響が犯罪へと繋がる事件も起きており、例を挙げると宮崎勤元死刑囚の「東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件」や「酒鬼薔薇聖斗事件」等がある。しかし、例にも挙げたような犯罪において、同じアニメや漫画を見た子ども達が全員犯罪を犯してしまうのかと考えると、アニメや漫画の影響は人それぞれ違うと捉えることが出来るのではないだろうか。

3.3 節 アニメ・漫画が与える身体的悪影響

アニメ・漫画が与える身体的悪影響として、初めに挙げられる事は目が悪くなる事である。テレビでアニメを視聴すると画面を長く見続ける為、普通に集中するよりも更に視神経や水晶体をコントロールする筋肉を過度に疲労させてしまう。また、瞬きの回数が減る事でドライアイにもなりやすく、疲れ目や充血、神経の酷使による頭痛等様々な症状が現れる。実例として、1997年にテレビ東京系列で放送された「ポケットモンスター」を視聴した人が全国で700人以上発作を起こして救急車で運ばれる事態となった。但し、この数には自家用車で病院に行った人数は含まれていない為、実際にどのくらいの人が影響を受けたかは定かではないが、日本中で大きな社会問題になった出来事として記憶に新しいであろう。この事件については、テレビ画面から強い光の点滅等が有り、ある種の光によって脳が興奮して発作を起こした事が原因として考えられて

いる。次に、アニメや漫画を同じ姿勢で見続ける為、猫背になり骨盤や背骨が歪んでしまう事である。長時間一定の姿勢を続けることで肩や腰に負担がかかり、体の様々な部位が無理をしてしまう。それだけではなく、座り続けると体を動かさない為骨や筋肉も衰え、また、人が必要とするビタミン等には日光に当たることで生成される栄養等もある為、肥満や糖尿病等の運動不足から起こる病気になりやすいと言われている。その為、アニメや漫画は様々な良い心理影響が挙げられる反面、身体的には悪い影響がいくつも挙げられる事を忘れてはいけないのである。

3.4 節 少女漫画が与える悪影響

少女漫画について考えると、少年漫画に比べ性的描写が多く描かれている。元々、児童ポルノ法案（児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法案）の第一条では「この法律は、児童に対する性的搾取及び性的虐待が児童の権利を著しく侵害することの重大性にかんがみ、あわせて児童の権利の擁護に関する国際的な動向を踏まえ、児童買春、児童ポルノに係る行為等を処罰するとともに、これらの行為等により心身に有害な影響を受けた児童の保護のための措置等を定めることにより、児童の権利を擁護することを目的とする。」と定められている。しかし、少女漫画では性的描写の自主規制が少年漫画に比べ、規制の度合いが緩く、その規制緩和の動きが低年齢化してきている。

少年漫画を好んで読む女性が多く、少年漫画人気が続いていることから、少女漫画の売り上げは伸び悩んでいる。そこで、少女漫画は基本的に人気のある恋愛モノを主流として、少年漫画よりも性的描写が多く過激なものも出版されている現状である。成人向けの漫画は売り場を分ける等の対策をして、はっきりの差別化が図られており、子ども達には読むことができないようになっているが、それに比べると少女漫画は過激なシーンがあったとしても、本屋では普通の漫画と同じように棚に並んでおり、子ども達でも自由に読むことも出来る環境にある。このような少女漫画を子ども達が読むことに対して、反対する親が多いことも事実であり、例えば、茨城県では一部の少女漫画を有害図書に指定された。更に、2007年には日本PTA全国協議会による「子どもとメディアに関する意識調査」の中で、「子どもに読ませたくない雑誌」に少女漫画が第一位に選ばれた。

少女漫画の怖いところは、少年漫画のように「現実には有り得ないファンタジー」であると受け取ることが出来ない点である。「明日、自分の身に起こっても不思議ではない事」を中心に書かれてものが多く、読者が漫画の内容を現実として受け止めてしまう傾向にある。また、親が以前よりも口うるさくないこともあり、子ども達が性に関する情報に触れる機会が増え、過激な表現に対しても抵抗が少なくなっている現状ではある。但し、性に関して「成熟していない子どもには読ませるべきでない」と判断する大人も多くいることも事実である。

このように少女漫画は子ども達の性に関する興味・関心をかき立てる為、出版社の自主規制の見直し等、これまでよりも大人が配慮をすることが大切になってくるのである。

まとめ

これまで述べてきたように、日本のアニメや漫画は戦後のGHQによる報道規制をされた時代もあったが、若い漫画家達の手によって現在に至るまで受け継がれてきた。そして、日本も含めて外国においても多くの人々に夢や希望を与え、沢山の作品が作られている。また、それらは子ども達に夢や希望を与えるだけでなく、身近なマナーや人間関係を学ぶ場となる等、子どもが成長する中で大きな役を担っていることも事実である。しかし、近年ではアニメや漫画の影響を受けた若者による凶悪殺人事件や身体的・精神的悪影響を及ぼすといったことが懸念されていることも忘れてはならない。但し、その全てがアニメや漫画が原因となっているのではない。何故なら

ば、同じアニメや漫画を見た子どもでも皆が同じ影響が出るわけではなく、そこには個人の成長してきた環境が大きく関わってからである。しかし、最も子どもの成長に影響を与える子育てに矛先が向かぬように、または、既に向けられているその矛先から逃げる為に親は子どもへの悪影響の原因をアニメや漫画に押し付けているのではないだろうか。確かに、アニメや漫画にも問題のある作品が存在していることは事実であるが、自分達が子どもの頃にアニメや漫画を読んで多くの夢や希望を抱いたように、そして、その経験を後悔していないのであれば、子ども達が成長していく上でどのようにアニメや漫画と関わっていくべきかを考え続けることが必要なのではないだろうか。

世界で活躍する若者

吉本 麻都佳 谷上 清香 又江原 早紀

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

スポーツの祭典オリンピックと戦争には深い繋がりがあることはよく知られてことである。それは悲しい歴史と同時に戦争のない平和への願い、すなわち、戦場での戦いから生まれる「悲劇」ではなく、競技場での戦いから生まれる「感動」を世界中の人々が求めているに他ならない。現代の日本の若者の殆どは戦争を知らない世代であるが、世界では数多くの戦争が起り、その歴史を繰り返していることは事実である。それゆえ、多くの人々は平和を求めるようにスポーツを求め、やがてスポーツは私達の生活に深く根付いたのである。

このように多くの人々に親しまれているスポーツに目を向けると、近年急速にスポーツ界の幅広い年齢層の活躍が世間を賑わせている。そして、その中でも一際注目を集めているのが若者の活躍であり、私達はその活躍を誇らしく、希望溢れるものとして認識しているのではないだろうか。しかしながら、若者達が活躍している舞台は一見すると華々しく思えるが、活躍を伝える報道と同時に不祥事を伝える報道を数多く耳にすることも事実であり、若者の活躍の裏に表面化していない問題がどれ程存在して、また、彼らの活躍は社会にどのような影響をもたらしているのであろうか。そこで、本研究では若者の活躍が近年急速に注目されている背景、および、活躍する若者を取り巻く環境について、シニア世代の活躍も含めた様々な視点から詳しく述べていくことにする。

1 章 若き天才達と輝き続けるシニア達

近年、若者たちの活躍がメディア等で注目されている。その要因は世界的な不景気により、世間に閉塞感が広がる中、若者達の活躍が国民に希望を与えているからではないであろうか。勿論、その一方で第一線で活躍し続けるシニア達の存在も忘れてはならない。では、若者やシニアのどのような活躍が人々を惹きつけているのであろうか。そこで、この章では若者たちが注目を浴びている背景と共に、輝き続けるシニア達について詳しく述べていく。

1.1 節 若き天才達

近年、最年少記録が次々と塗り換えられ、十代から二十代前半の若者が脚光を浴びている。昨年の12月にはプロゴルファーの石川遼が18歳で賞金王に輝いた。これは尾崎将司が1973年に26歳で達成した最年少賞金王記録を大幅に更新したものであり、彼は18歳にして日本を代表するプロゴルファーとなった。また、2009年のバンクーバーオリンピックではフィギュアスケートの浅田真央が19歳で銀メダルを獲得したこと等も記憶に新しいことである。尚、フィギュアスケートにおいて1つの競技会中に3度の3回転アクセルを成功させたのは女子シングル史上初である。この快挙はギネス世界記録にも認定されている。

アマチュア選手では早稲田大学野球部に所属する斎藤祐樹もスポーツ界を盛り上げている若者の一人である。2006年、彼は早稲田実業学校高等部3年生の夏に出場した高校野球甲子園大会の優勝投手であり、この決勝戦はNHKで視聴率29.1%、決勝再試合も平日の日中にも関わらず23.8%と高視聴率を記録した。また、試合中にマウンド上で折り畳んだハンカチで汗を拭く仕草から「ハンカチ王子」という愛称で親しまれた。

このような若者の勢いはスポーツ界だけに留まらずその他の分野にも及んでいる。例えば、文

学界では当時 19 歳の綿矢りさが早稲田大学在学中に「蹴りたい背中」で第 130 回芥川賞を 2004 年に受賞した。これはそれまでの最年少記録を大幅に更新したものであり、芥川賞受賞作の単行本としては 28 年ぶりのミリオンセラーとなった。また、音楽界ではピアニストの辻井伸行がアメリカで 2009 年に開催されたヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて日本人初の優勝を飾った。彼は盲目でありながら数々のコンサートやリサイタル、コンクールに参加し成功を収めている。その他にも、芸能界の若者といえばジャニーズ Jr. である。彼らはジャニーズ事務所 に所属するタレントグループであり、ここからデビューした SMAP や嵐は幅広い年齢層の男女から支持され、歌手や俳優、司会者として活躍している。このようにスポーツ界だけでなく文学、音楽、芸能と様々な分野において若者の活躍が注目を集めており、彼らが現代社会を盛り上げていると言っても過言ではない。

1.2 節 なぜ若者たちは注目されるのか

才能ある若者が注目される理由は実力に限られている訳ではない。例えば、「ハニカミ王子」という呼び名で親しまれているゴルフの石川遼は、18 歳とは思えないその謙虚な態度や姿勢が世間の人々の注目を集めた理由の 1 つであり、また、ハニカミ王子と同時期に注目を集めた「ハンカチ王子」こと野球の斎藤佑樹は、田中将大というライバルの存在が一層斎藤の存在を引き立てた。加えて、2006 年の甲子園大会決勝戦で死闘を演じた二人が大学進学とプロ野球進出というそれぞれの道を歩み出したことも彼らがいまだに注目を浴び、野球界を盛り上げている理由である。ライバルと言え、フィギュアスケートの浅田真央とキム・ヨナの二人も思い出される。フィギュアスケート界に突如現れた二つの新星に世間の注目は集まり、オリンピックや世界選手権では若い二人の凌ぎ合いが世間を騒がせた。この他にも若者が活躍する場はスポーツ界だけに留まらない。例えば、文化の分野にも目を向けると、文学では最年少タイ記録で文藝賞を受賞した綿矢りさが注目を集めている。これは、若者が活字離れや文字離れを起こしていると言われている中での受賞であったことも注目を集めた理由の 1 つである。また、音楽の分野では、ピアニストの辻井伸行が注目を浴びている。全盲という視覚障害を持ちながら、年齢・国籍・障害等の要素が一切評価に含まれないコンクールでの優勝という確かな実力が世間を騒がせた。

以上ように、活躍する若者が注目を集めているのにはそれぞれに理由がある。そして、そもそも人々が若者に注目する理由は、近年、不景気等で若物の活気がないと言われている中、若者たちの活躍が世間に希望や勇気を与えていることにある。よって、少子化が益々顕著となるこれからの時代において、若者の活躍は更に重要になってくるのである。

1.3 節 シニアだって負けてない

若者が脚光を浴びる中、年配でも現役として活躍する人は少なくない。スポーツ界で最年少記録が次々と塗り替えられていく中、プロゴルファーである青木功は 67 歳にして現役であり、全米オープンでは準優勝を果たしている。日本ゴルフツアーでは通算 51 勝を果たして歴代 2 位を獲得する等、日本を代表する名ゴルファーの一人であり、日本プロゴルファー永久シード保持者である。同じスポーツとして、サッカー界では三浦知良が 43 歳にして日本の現役最年長選手であり、J リーグ年間最優秀選手賞など多数の賞を受賞している。40 歳を迎えてもその意識付けは全く揺らぐことがなく、彼の存在そのものが同じピッチでプレーする若い選手達の生きた手本となっている。一方、芸能界に目を向けると、「永ちゃん」「ボス」との愛称で国民から親しまれる矢沢永吉は 60 歳にしてロックミュージシャンとして活躍している。2010 年現在でも多くの人から支持を得ており、留まることを知らない現役最強のロックンローラーである。

様々な分野で活躍するシニアがいる中で、何と言っても 90 歳で活躍し続けている森光子を忘れることはできない。森光子が主役を演じる舞台「放浪記」は 1961 年から 45 年間という長きに渡

って続いており、これは舞台公演回数として日本記録となっている。また、2009年5月9日の自身の誕生日には上演2000回を達成して、通算2017回の公演を成し遂げ、女優初の最高齢で史上17人目となる国民栄誉賞を授与された。他にも紫綬褒章、勲三等瑞宝章、文化勲章等を授章している。舞台ではでんぐり返しを行っており、これは日頃からスクワットやエアロバイクで肉体の鍛錬を積み、食事や健康に気を使ってきたからであろう。最近では体のことを考えて万歳三唱に変わっているが、80歳を過ぎるまで体を鍛えることは常識では考えられないことである。

このように、若者が活躍する中でシニアがここまで活躍するにはそれぞれ日頃の努力していることが結果となり現れていることだろう。言うまでもなく、この様なシニア達のそれぞれの千秋楽は予想できるものではない。

2 章 日本の変化

戦後から現在にかけ、時代の変化と共に教育や食生活が変化しているが、それに伴い日本人の体格も著しい変化を遂げている。そして、近年ではゆとり教育の実施を契機として、様々な分野において早期教育産業が参入している現状となっている。このような体格の変化やエリート教育としての早期教育が現在活躍している若者達にどのように結び付いているのであろうか。そこで、この章では教育制度と食生活を背景として、昨今の若者の活躍に至るまでの日本の変化やその影響について詳しく述べていく。

2.1 節 若者の活躍とエリート教育

日本では1980年から「ゆとり教育」が実施され、2002年には完全学校週5日制が取り入れられた。しかし、生徒の学力が低下しているという指摘を背景として、2008年には学習内容を増加させた新学習指導案が告示され、「脱ゆとり教育」と称されている。これに伴い世間では幼児期から一般よりも年齢を繰り上げて文字や数、外国語、音楽、スポーツなどの教育を開始する早期教育または、エリート教育が注目され、民間企業が戦略として早期教育産業に参入するようになった。このような社会背景の中で幼少時代を過ごしたのが現在の十代から二十代の若者である。例えば卓球選手の福原愛は3歳から卓球を始めて、練習時間は毎日4から5時間、コーチは中国人を住み込みで契約するなど、彼女の両親は徹底的にエリート教育を施している。また、エリート教育は家庭に限らず、芸能人を目指す幼児から青少年にボーカル、ダンス、演技の指導をするアフターズクールも全国で開校されている。そこから安室奈美恵やSPEEDなどの有名芸能人が世に送り出されている。

幼い頃から一心にやってきた英才教育の結果、その道で生計を立てるまでに成功している若い世代の姿はメディア等で大きく取り上げられる。その活躍ぶりを見て、子どもたちが憧れを持ったり、親が自分の子どもにも才能があると疑わず同じような教育を受けさせようとする為、エリート教育を受ける子どもが増えている。例えば、石川遼が15歳9カ月で日本男子ツアー史上最年少優勝を飾り、史上最年少の16歳3カ月でプロに転向した事が世間を騒がせた後はゴルフのジュニア大会が活気溢れるものとなった。

このように、教育制度の改革やメディアの影響から様々な分野でのエリート教育への関心は高まり続け、これから活躍する若いアスリートと強く結び付いているのである。

2.2 節 食と体格の変化

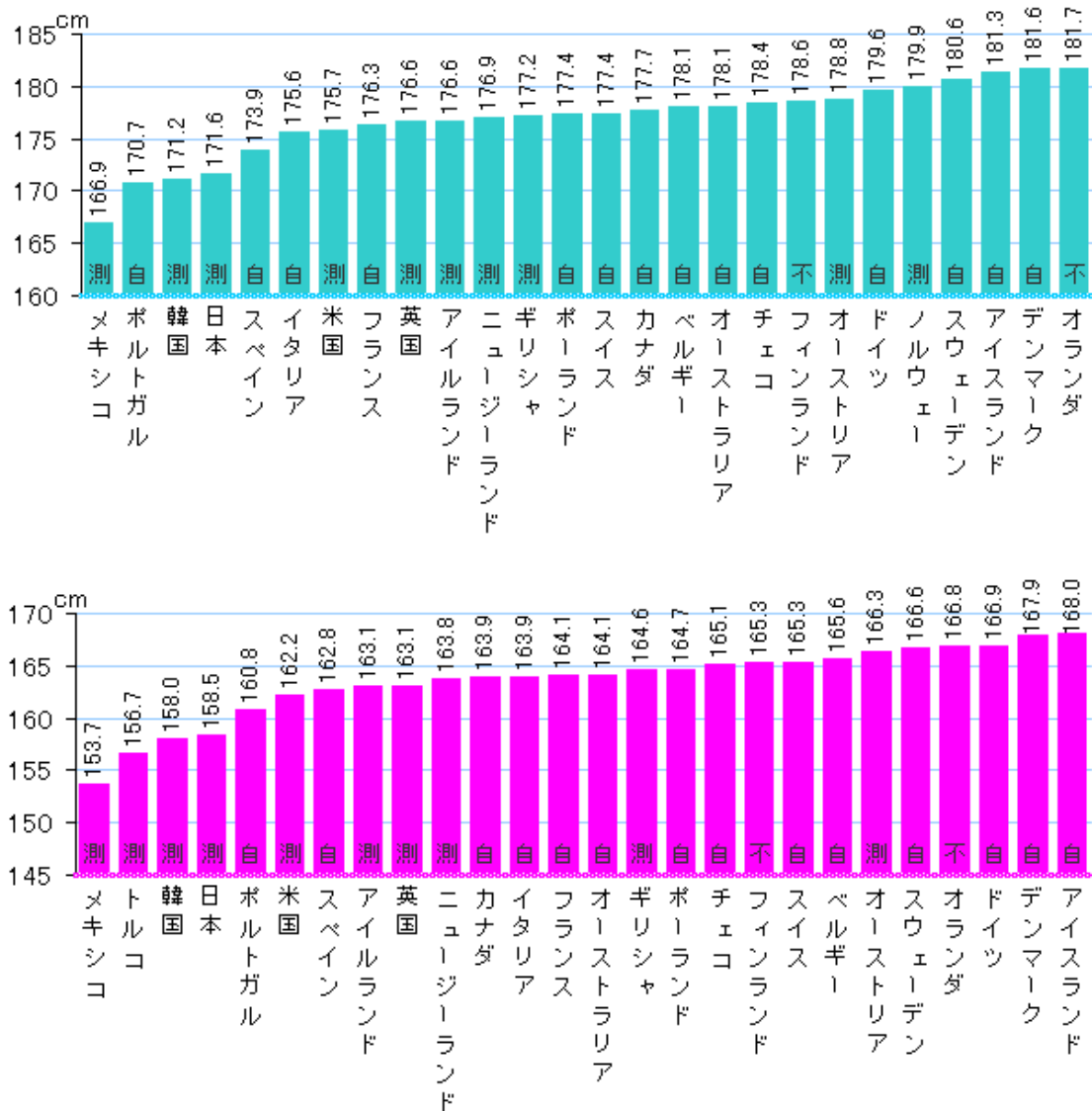
洋風化に伴い、肉類や乳製品等の動物性たんぱく質を多く摂るようになる等、戦後日本の食生活は大きく変化した。人間が活動する為のエネルギー補給源となるのは、脂肪、糖質、炭水化物

の3つであるが、戦前と現代の給食を比べてみると、戦前はパンと脱脂粉乳が主であったが、それが昭和40年代になると麺類やご飯が週に1, 2回入るようになり、また、脱脂粉乳も牛乳を混入した混合乳に変わり、昭和45年には現在と同じ牛乳と変化した。そして現在では主食の中心がご飯となり、加えて栄養バランスの取れた給食となっている。このような食の変化に伴い、子ども達の体型も変化しており、50年前と比べると男子では身長9 cm・体重10 kg、女子では身長5.4 cm・体重4 kg、体型が大きくなっている。しかし、現代の女子の平均体重は減ってきている傾向があり、これはダイエットを意識していることが原因であると考えられている。過度なダイエットは摂食障害やうつ傾向等、起こしやすく、出産時に低出生体重児になる確率が高くなることが知られており、成長途中の子ども達の健康が懸念されている。

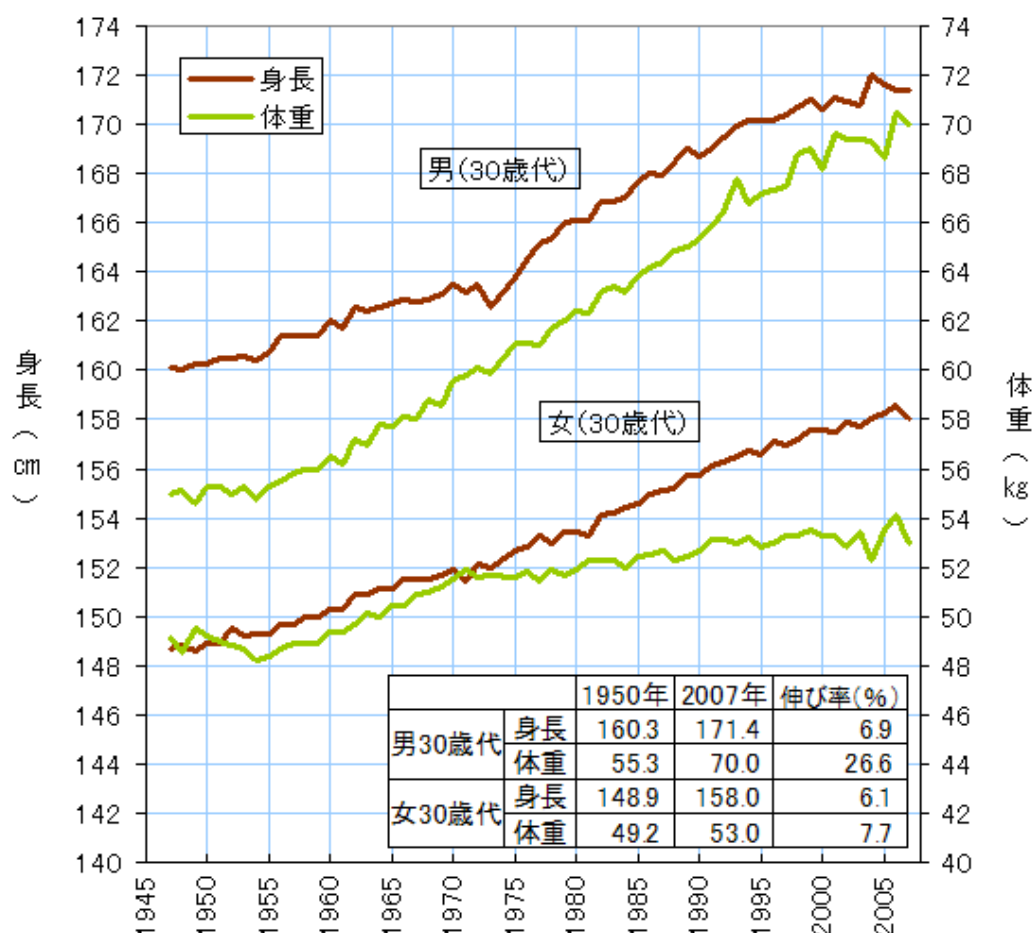
以下は20代男子(上)と20代女子(下)の国際比較した平均身長、日本人の平均身長・平均体重の推移の図表である。

平均身長の国際比較

*調査法: 自(自計申告)、測(測定結果)、不(方式不明)



日本人の平均身長・平均体重の推移



(注) 成人男女の代表として30歳代を取り上げた。

(資料) 国民健康・栄養調査(厚生労働省、1974年調査なし)

これらの表図からわかるように、日本人の体型は戦後から大きく変化しており、この体型の変化が近年活躍する若者が世界に通用するようになったことに大きく影響していると考えられる。また、右肩上がりのグラフから分かるように、今後、日本人の身長体重は変化し続け、より大きな活躍を期待できるであろう。

3 章 スポーツ界、芸能界が抱える問題点

若者の華々しい活躍が注目を集める中、日本のアスリートの世界は選手強化費が他国と比べて極めて少ない事や選手生命が短い事、引退後のサポートや保証がない事等、様々な問題を抱えている。また、多くの若者が夢見る芸能界においても、犯罪に関与する事件が後を絶たない状況となっている。そこで、この章では1章で述べた若者の活躍、2章で述べたその社会的影響を踏まえて、世界の舞台であるオリンピックにおける問題点や若くして活躍し注目されることの問題点について述べていくことにする。

3.1 節 オリンピックのマイナス面

世界各国のアスリートにとって夢の舞台とも言えるのがオリンピックであり、日本でもその活躍が社会に活気を与えているが、一方で日本のオリンピック事情はアスリートにとって大変厳しいものとなっているのも事実である。最も大きな問題として挙げられるのが選手強化費である。バンクーバーオリンピックが開催された2010年の選手強化費は日本が27億円であるのに対して、アメリカが165億円、ドイツが274億円、カナダが100億円、韓国が106億円となっており、その差は一目瞭然である。また、メダル獲得数を比べてみると日本が5個であるのに対して、アメリカが37個、ドイツが30個、カナダが26個、韓国が14個となっており、ここでも日本のメダルの少なさが目立っている。このように選手強化費とメダル獲得数には比例関係があるが、その他にもトレーニング施設を有している国が多くのメダルを獲得している等、日本が世界から後れを取っているのが現状である。このことから、日本のオリンピック選手に対する支援は不十分であり、これからアスリートが万全の態勢でオリンピックに挑み続ける事が出来るとは言えない状況なのである。では、日本がオリンピックで世界に劣っている理由は強化費の問題だけであろうか。例えばあるスポーツに多くの国民が関心を持っていれば、その国においてそのスポーツの競技人口は増え、結果としてその競技レベルは上がることは容易に想像できる。すなわち、オリンピックでの活躍はその国のスポーツに対する国民性に比例するはずである。そこで、日本国内におけるスポーツの現状について考察していくことにする。

日本でプロスポーツとして挙げることができるのは野球、サッカー、相撲の3つ程度であり、その他はプロスポーツとして確立しているとはまでは言えない現状である。このようなプロ化の遅れは世界的な競技レベルの向上に迫いついていかない危機を招き、サッカーですらプロ化してようやく世界のレベルが見えてきた状況であり、その他の競技については相対的なレベルの低下は避けられないというのが現状である。よって、スポーツ界にとって競技レベルを維持する為にはプロ化が絶対条件であると言えるのではないであろうか。このように、多くのスポーツにおいてプロ化が進んでいない理由としては、競技レベルの低さや環境整備が整っていないこと等が挙げられる。例えば、アイスホッケーでは本拠地がなく、リンクの数が限られており、加盟チームが関東と北海道にしかないという現状であり、これが致命的な欠点となっている。

3.2 節 引退後の進路

テレビ等のメディアを通して見るとアスリートの世界は一見華やかに見えるが、若いアスリートの活躍には引退後のセカンドキャリアという大きな問題が存在している。例えば、代表的なサッカー・野球・女子バレーボール・相撲に注目して引退選手の進路を見てみると、サッカーでは発表されている131人の引退選手の内、79人が下部リーグ移籍、16人がJクラブスタッフ、7人がサッカー関連企業、5人が一般企業、9人が進学・就学、15人が未定となっている。また、プロ野球では発表されている80人の引退選手の内、32人がコーチや職員等の球団スタッフ、21人が独立リーグや社会人野球等の選手、5人が解説者等、15人が一般企業・経営者、3人が就学、4人が未定・不明となっている。一方、女子バレーでは殆どの選手は嘱託・契約社員として会社に所属しており、通常の社員とは異なりバレーボールが仕事となっている。その為、選手の多くは1年毎の契約であり、引退後の補償も無い状況となっている。更に、相撲では引退平均年齢は約31歳であり、実力者は引退後に親方として相撲界に残ることができるが、それ以外の力士は第二の人生を模索することとなる。中には、力士時代の「ちゃんこ」の知識を活かして料理屋の事業展開をする者もいるが、それは一部に過ぎない現状である。

このように、引退後の進路は確実な補償がある訳ではなく、路頭に迷う者も少なくない。よって、現役アスリートや未来のアスリートを夢見る世代の為、各協会等がセカンドキャリア支援を積極的に強化していくことが求められているのである。

3.3 節 芸能界と犯罪

芸能界と犯罪は深い関わりがある。最近ではどのメディアでも歌舞伎俳優・市川海老蔵の傷害事件が取り上げられている。この事件は飲食店で市川海老蔵が数人のグループとトラブルになり殴られたとみられ、現在、傷害事件として捜査中となっている。本人は事件当日の記者会見を体調不良を理由にキャンセルしたにも拘らず、前日の夜から飲みに出ていたことが発覚した。その他にも出演予定だった幾つかの舞台を降板したことから、「日ごろのおごりが招いた事」だと謝罪している。また、有名人が犯罪に関与するケースで衝撃的な事件と言えば、2009年に元俳優・歌手の押尾学がホステスと合成麻薬メチレンジオキシメタンフェタミン（MDMA）を服用してホステスが死亡した事件が発覚して、MDMA服用の容疑で逮捕された薬物事件である。裁判の結果、懲役2年6カ月の実刑判決を受けたが、即日控訴して保釈保証金1000万円を納付し保釈されている。

このように、芸能人が関与する暴力事件や薬物事件は決して珍しい物ではない。しかし、共通点は若くして芸能界や歌舞伎界といった特定の世界で活躍しているという事である。これにより、一般に常識と言われる発言や行動が未熟であったり、若い頃から大金を手に入れたり、ストレスが溜まりやすい環境であったり、薬物が手に入りやすい環境である等、芸能人を取り巻く環境は犯罪に関与しやすい物だと言えるのである。このように、若者の活躍が際立つ一方でこのような問題点が存在する事も忘れてはならない事実なのである。

まとめ

これまで述べてきたように、世間では不景気等により閉塞感が広がる今日にも拘らず、戦後の食の変化による体格の変化やゆとり教育による練習時間の増加等、食や教育制度の変化に伴って、近年、若者達は大きく輝き、その活躍が国民に感動や希望を与えている。しかし、その一方で現在の日本のスポーツ界には若者が十分に実力を発揮できていない現状や若くから名誉を手にする事で犯罪に巻き込まれやすい環境等、影の部分が存在することも事実である。これらの状況を鑑みる時、多くの若者が憧れるスポーツ界等の華やかな世界の実情を社会全体としてどのように考えていかねばならないのだろうか。具体的な議論として、スポーツ界に目向けると最高峰である「プロの世界」では「観客」を魅了する「パフォーマンス」が求められ、過度な音楽や応援等、人々は日頃のストレスを発散させるかの如く観客として「熱狂」して楽しんでいる。勿論、それがプロの世界に求められていることであるが、常識離れした年俸や大金への誘惑を起因とした禁止薬物の使用や賭博等の様々な問題が起きていることも事実である。しかしながら、これは選手だけの責任ではなく、社会全体が作り上げた結果であることを忘れてはならない。また、このような問題はスポーツ界だけではなく、若者が憧れる世界に共通するものではないだろうか。

多くの若者がプロフェッショナルの姿に憧れ、それを目標に努力している。そして、その純粋で直向きな努力は見返りを求めるものではなく、ゆえに、多くの人々は「感動」するのである。従って、このような将来の活躍を夢見る若者をこれからも絶やすことなく生み出していく為にも、社会のスポーツ界等の若者が憧れる世界に対する考え方そのものを考え直すことが重要なのではないだろうか。

子どもの遊び

伊地知 美帆 稲益 有沙 四辻 杏香

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

現在の日本は戦前と比較して人々の生活は暮らし易く、経済的にも豊かとなっている。その背景として、住宅の構造の変化や環境の変化等が挙げられているが、一方、これらを要因として子ども達の遊びの環境が大きく変化したことも忘れてはならない事である。例えば、人々の暮らしをより充実させる為に野山は削られ空き地にはコンクリートが敷かれ、結果、子どもの遊びも外遊びから室内遊びへと変化していった。そして、これらの社会環境の変化はメディアの活用や漫画・ゲームの普及が進む等の新たな文化を生み出して、現在、日本のメディアや漫画は幼少期からお年寄りまで幅広い世代で楽しめる物へと発展すると共に、世界からも注目を浴びる程の人気を集めている。しかしながら、暮らしが豊かに便利になった反面、その環境の変化に対応できずに人々の暮らしや身体に影響が出る等の新たな問題が派生しており、少子化や核家族化等の多くの問題と合間って、将来を担う子ども達への影響が懸念されるようになってきている。そこで、本研究では子どもの遊びや環境の変化を取り上げ、それに伴う影響を詳しく考察していくことにする。

1 章 今と昔の遊び、その背景

現在ではひとり遊びが増え、更に室内遊びが増加してきている。では、昭和初期から現在までの代表的な遊びの変化、また遊びと共に変化している環境はどのように変化してきているのだろうか。そこで、この章では昔から現在まで伝承されている遊びをもとに子ども達の遊び方の変化や遊ぶ場所の変化を述べていく。

1.1 節 昔の遊び

昭和初期から終戦までの男の子の遊びの代表は軍国時代を反映した「戦争ごっこ」であると言われている。滅多に車が通らない道路や原っぱ等で子ども達は集団遊びに熱中していた。そして、そこには必ずガキ大将が存在していて、集団をまとめ、ルール違反のものには制裁を加え、弱い者をかばうという子どもの世界にたくましいリーダーとなっていた。「戦争ごっこ」以外には相撲や騎馬戦などの格闘技らしき遊びが主流であった。その一方で、女の子の遊びの代表は現在でもよく親しまれている「ままごと」や「人形遊び」であり、自分自身が母親になり空想と現実の間を行ったり来たりしていた。また、ままごと遊びの道具は家具や台所セット等から昭和30年以降にはテレビなどの電化製品が登場するようになる等、時代と共に変化していった。

上記で述べた遊びの中で、特に「ままごと」の起源は古く、終戦後に至るまでの間に様々な形で遊ばれてきたということが記録として残っている。例えば、古墳時代(3世紀~7世紀頃)の墳墓から一種のままごと道具として当時用いられたと推定されるろう石や鏡等の日用品、機織り具等が発掘されている。また、平安時代には雛遊びにままごと道具が存在していたことを「紫式部日記」等の古典に記されている。加えて、江戸時代には木・竹製のままごと道具、土焼きの茶碗、徳利類、真鍮・鍋製の餅網等が登場する等、この他、石、草、土等の自然玩具を用いる風景は古くからあり、それらは現在にも繋がっている。

「ままごと」が遊びとして定着したのは江戸時代であると言われている。その後、明治時代にはブリキ製の鍋や釜等をセットにしたものがつくられ、昭和時代にかけてアルミニウムやセルロ

イド製品が加わって種類が増えていった。また、第二次世界大戦後はプラスチック製品の登場によりままごと道具もキッチンセット等の新型が出現して、電池で本物そっくりに動く洗濯機やステンレス製の台所用品も出回るようになる等、「ままごと」は古くから絶えることなく受け継がれてきたのである。

1.2 節 現在の遊び

年代が進むにつれて、外で遊ぶ子どもの数は少なくなっていると言われている。その背景にはテレビゲームやパソコン、携帯電話等の普及がある。現代の男の子の遊びの代表はテレビゲーム・サッカー・野球・鬼ごっこ等であり、女の子の遊びの代表はテレビゲーム・鬼ごっこ・かくれんぼ等である。男女の間で一番人気のテレビゲームは、1983 年からファミリーコンピュータを初めとしゲームボーイ、スーパーファミコンなど形を変え普及し続けている。以上のように昔は外遊びが中心だったが、現在では室内遊びテレビゲームなど室内でされる遊びが増えている現状であるが、同時に、昭和からある鬼ごっこ等も伝承され現在でも引き継がれている。

1.3 節 遊びの環境の変化

昭和初期は、原っぱや路地裏、空き地等にはいつも子どもの遊ぶ姿が見られるのが当たり前であったが、1960 年代を境に子どもの遊び環境の質や量が大きく変化してきた。具体的には、遊びの「空間」が小さくなり、習い事の為に遊びの「時間」が少なくなり、地域での異年齢集団は学校での同年齢集団に変わり「仲間」が減る等である。また、かつて子どもの遊び場所となっていた道路や工事現場、自然、秘密基地などの空間は狭くて危険な場所となり、メディアの発展によって室内でも十分楽しめるだけのモノも多様化していった。その結果、子どもの遊びは量においては「空間」の減少、そして、質においては戸外の遊びより室内の遊びの総時間が圧倒的に増えるという変化を見せた。

都市部と農村部を見ていくと、遊びの環境が大きく変化している。例えば、都市部では豊かな自然空間が減少しているが、その分モノが溢れて人口も多くなっている。しかし、モノに頼り過ぎている生活の為に多くの子ども達で集まったとしても個人個人で遊べるようなゲームに熱中する傾向にある。それに比べ、農村部では人口の減少により近所に遊び仲間が少なくなっているが、自然環境には恵まれ、たとえ人口が少ないとしても一人でも自然と交わることによって様々なことが学べ、それが社会に出るときに大切なことになってくるだろう。

このように、遊びの環境は場所によってそれぞれ異なっているが、それに適応した子どもの遊びを考えることが必要なのである。

2 章 遊びによる子どもへの影響

昔は公園や道路で子どもが遊ぶ姿が多く見られたが、現在では室内遊びをする子どもが増えると同時に、子ども達に一人で遊ぶ習慣がついている。こうした状況の変化により、遊びが子どもに与える身体的・精神的な影響も大きく変化している。そこで、この章では社会的背景を下に、遊び・環境の変化がもたらした子どもへの影響について考えていく。

2.1 節 子どもにもたらす身体的影響

現在では、外遊びやスポーツ活動の時間が減少して室内でテレビゲームをする子が目立ちつつある。その為、近年では昭和 60 年頃から低下傾向にある子どもの身体的問題が重要視されている。文部科学省が実施している体力テストによると、30 年前と比較して 50 メートル走やボール投げ

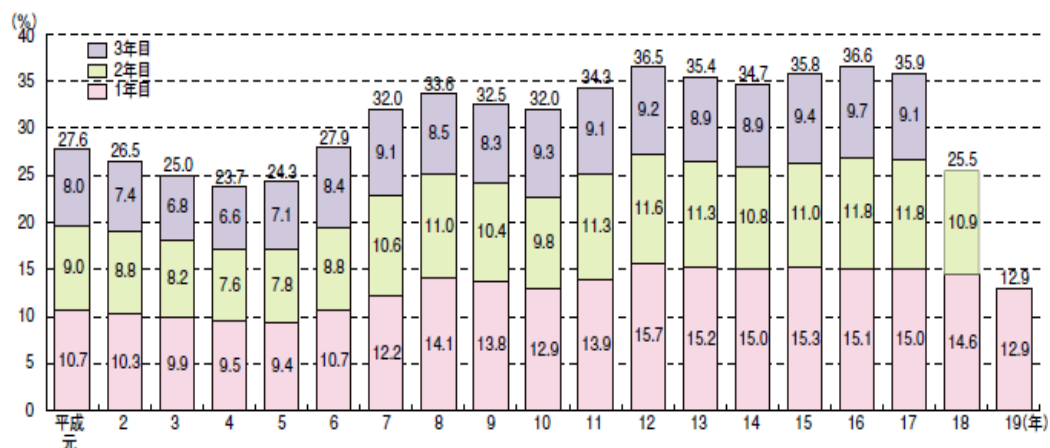
等の多数の項目で下まわっている状況になっている。これに伴い、最近の子どもの中には靴ひもを結べなかったり、スキップができなかったり等、自分の身体を操作する能力も失われつつある子が増えてきている。更に、体力が減少する事により生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下ももたらされているのである。

現在では免疫力の低下も懸念されており、その事により日本の子どもの43%がアレルギー性疾患にかかっている。アレルギー性疾患とは、アトピー性皮膚炎をはじめとして、気管支炎、花粉症、食物アレルギー等の事であり、アレルギー反応が起こる原因は人間の免疫機能が寄生虫や細菌、ウイルス等の微生物ではなくダニの死骸やスギの花粉等に反応している為である。これらの事が起こる原因として、運動不足や外遊びの低下等が指摘されている。加えて、昔から人間の体には体内に侵入してきた細菌や回虫に対応する免疫が存在しているが近年では抗菌グッズや消毒用アルコール等が普及する事により、回虫や細菌が駆除されたことも原因の1つとなっている。以上のように、清潔志向や運動不足が原因で肌への刺激の低下によって免疫力も低下してきた為、適度な運動を行い、そして、日光に当たることが大切なのである。また、アレルギー性疾患は子どもに多く見られるが、現在では日本人の3人に1人、約35.9%がアレルギー性疾患にかかっている。アレルギー性疾患はダニやカビが主な原因であり、気密性の高い住宅でダニやカビが発生しやすい為、都市部の方が農村部に比べ8.3%多くなっている。アレルギーを持っている子の親のアレルギーの有無を調べたところ、75%の親がアレルギーを持っている事が分かった。このことからアレルギーは同じ環境で生活する事による感染であり、アレルギーは子どもだけの疾患でないと考えられている。しかし、アレルギーは免疫の弱い子どもに多く発症しているが、年齢の経過と共に治癒するケースが多く、小学校入学前には70%が自然治癒しているのである。

2.2 節 精神的な影響

以前は公園や道路で遊んでいる子どもが多く見られていたが、最近は外で遊ぶ子ども達が少なくなっている。しかし、現代の子どもは学習塾やスポーツクラブ、稽古ごとで多くの時間を過ごしており、また、家庭用ゲーム機やパソコンの普及により室内での遊びが多くなり、子どもは一人で遊ぶことが習慣化したことにより仲間と遊ぶことができない子どもが増えている。昔は自分で遊びを考えて工夫していたが、今の子どもは大人の動きを真似したり、身近な素材を活用する工夫した遊びが少なくなっていることが現状である。そのことにより異年齢間の様々な人間関係を学ぶ機会を失い、人との関わりが希薄となり、コミュニケーション不足が指摘されている。その為、これらの問題は後に子どもの将来に大きく影響することが懸念されている。

第 1-2-9 図<3> 在職期間別離職率の推移(大学卒業者)



資料：厚生労働省「新規学校卒業就職者の就職離職状況調査」

上のグラフは新規学卒就職者の離職状況を示している。現在では若者の離職についての問題が増えており、1990年にバブル経済の崩壊とともに徐々に離職が増加している。離職の主な原因の一つとしては、景気低迷によって希望する職業に就職することが困難となったこと等が挙げられる。そして更に、労働条件が良い仕事も相対的に減少していることも要因となっている。その為、90年代以降にフリーター等の非正規雇用者が増え続け、正規雇用者一人当たりの仕事量は増加する結果となったのである。

非正規雇用の所得は相対的に低く、不安定である。しかしながら、正規雇用として働く場合には負担の大きい仕事を任せられ、長時間働くことになる。また、正規職員に対し高い労働力の質が求められる為、高学歴者には比較的求人があるが、学歴が低いほど求人がない状況である。更に、就職できたとしても人間関係がうまくいかずに辞める者も多く、これが若者をとりまく労働環境の現状となっている。

3 章 「遊び」に関わる様々な現状

子どもが身体的・精神的に成長して伸び伸びと遊ぶことができる為には、遊び方や遊びの環境を見直していくだけで果たして十分なのであろうか。すなわち、「子どもだけ遊び」をより良くしていく為には、親子の関係も重要なのである。そこで、この章では家庭における子どもとの関わり現状を明確にすると同時に、世界の子どもの遊び方とその環境について考察していくことにする。そして、最後に「子ども」という視点だけではなく、高齢者の遊びにも目を向け、遊びの現状やそれをとりまく環境について述べていくことにする。

3.1 節 家庭・地域社会の現状

現在と比較し昔の子ども達は道端で遊び秘密基地を作り、近所の世話好きなおばちゃんに声をかけられたりかみなり親父に怒られたりと地域の人達に育てられてきた。しかし今では学校と家庭のみの往復で地域との関わりは激減している。一方、現在では家庭における教育力が低下する傾向にあり、その理由として「過保護・甘やかせ過ぎな親の増加」や「しつけや教育に無関心な親の増加」が指摘されている。また、親が子どもと一緒に過ごす時間が諸外国に比べて特に父親が少なく、これは社会の流れと関連して仕事に追われるライフスタイルが子どもとの関わりを妨げていることが原因と考えられている。よって、今後男性が更に子育てや教育等に参加して家庭生活を充実して家庭と仕事の両立を図る為には、企業や仕事中心のライフスタイルを変えていく必要があり、そうすることによって親と子の関わりが増して、更に、絆も深まりより良い家庭生活に発展することが期待されている。

地域社会では都市化が進み、昔ながらの人々が互いに関わり合うコミュニティではなくなってきた。その為、少子化により地域が元来持っていた他者理解や協同の体験的学習機能が総合的に低下してきている。また、都市部や地方部に関係なく、郊外化の進展などに伴い、居住地域と職場・学校等が分離して、主に昼間における地域との関わりが少なくなっている現状となっている。従って、昔ながらの伝統的な遊びの伝承をしていく為にも、人材の宝庫である地域の活性化を進めていくことが今後の課題となっている。

3.2 節 世界の子ども

世界 25 カ国を対象とした調査において、世界の子ども達が好む遊びは、友達と遊ぶ事 (30%)、ゲームで遊ぶ事 (15%)、両親と遊ぶ事 (10%) となっており、上位 3 つで半分を占めている。現在、日本では一人遊びをする子どもが増えている現状であるが、世界的に見ると日本とスカン

ジナビア諸国の子ども達が友達と遊ぶ事を特に好んでいる。また、親が子どもと遊ぶ時間の世界的平均時間は週 14.3 時間であるが、日本では週 10.9 時間となっており、世界的に見ると日本では親子との関わりが少なく、伝承遊びの減少にも繋がっていることが懸念される状況である。更に、運動をする子どもの割合が豪州では 89%、ドイツでは 83%となっているのに対して、日本では 37%であり、「世界一動かない子どもがいる国」と言われていることも事実である。その背景として、日本では校庭や公園等、屋外の人工的場所が増え、遊び場所が変わってきている事が挙げられている。

これらの問題は先進国特有の問題であるが、その反面、世界には貧困を原因とする病気や飢えで 3 秒に一人、毎日 3 万人の子どもが亡くなっており、特に開発途上国では 7 人に一人の子どもが 5 歳の誕生日を迎えられないという現状なのである。また、18 歳未満の子どもが 30 万人戦場に駆り出され、更に 2 億 5000 万人の子どもが児童にも関わらず労働に加わっている等、世界には子ども兵士や児童労働の問題が存在していることを忘れてはならないのである。

3.3 節 第二の人生

高齢者の生きがいの重要な柱として「生涯学習」が挙げられ、その一環として高齢者の遊び、所謂「余暇活動」が注目されており、人生 50 年から 80 年社会の到来によって、近年、老後の余暇について考えられるようになってきた。更に、平均寿命が 80 年に延びた結果として、生涯時間の中に占める労働時間の割合は 1 割程に減少して、反対に余暇時間は 3 割にも達するようになっている。この余暇時間を現代の高齢者はどのように過ごしているのだろうか。

ある県では後期高齢者のライフスタイルについての調査を行ったところ、「現役時代の経験や知識・技能を生かした形」が全体の 25%を占め、続いて「ボランティア」・「町内会等の地域活動」がそれぞれ 6~7%という結果となった。その理由として最も多かったのは、「生きがい」・「新たな人間関係を構築」であり、全体の 6 割以上を占める結果となった。この結果から大部分の高齢者は健康である程度の時間的な余裕もあることから趣味や旅行等を中心とした自由な生活を送りたいと考えている一方、これまで培った豊富な知識・経験、高度な技能を有していることから、仕事や地域活動を通して更に社会との関わりを持ち続けたいと考えていると思われる。

現代では、戦後に比べて生活環境等の社会変化が目まぐるしく変化して、高齢者が一段と孤独感や不安感が募る時代となっている。しかし、その環境の中で 20~30 年も及ぶ長い老後生活を送っていくかねばならないことは動かしやうのない事実である。従って、高齢者の居場所や活躍の場の確保、また、高齢期の快適な暮らしの実現に向けた手立てを高齢者と地域社会が共に考えていく必要があるのではないだろうか。

まとめ

これまで述べてきたように、現在、日本の「子どもの遊び」は子ども達を取り巻く環境やコミュニケーションを図る手段によって変化している。具体的には、昭和初期では戸外遊びを通じて同年齢との関わりや異年齢との関わりを学び、同時に文化としての遊びも伝承されていた一方、現在では原っぱや空き地等は無くなり、こうした環境の変化に伴って「ゲーム」や「漫画」等の室内遊びが増えることで一人でも気軽に楽しめる遊びへと変わっている。このような背景には家庭や地域の問題として、核家族化や共働き、教育の仕方や地域社会との関わりが大きく変化したこと挙げられている。しかしながら、世界に視野を広げると食糧問題により貧困を原因とする病気や飢えで 3 秒に 1 人の子どもが亡くなっているという現状があり、日本だけで見ると深刻に見えるこれらの問題は実は豊かになり過ぎ便利さを求め続けた結果として派生していることを私達自信が受け止め、社会全体の問題として真剣に考えることが必要なのである。では、子どもの遊

び方について数々の問題が出ている中、私達は何をすべきなのであろうか。例えば、団塊世代を中心として現役時代の経験や知識・技能を生かした活動やボランティア・町内会等の地域活動を通して子ども達と関わる等、地域社会のコミュニティを広げることが問題解決の手立ての一つなのかもしれない。何れにせよ、答えを見つけることは難しいことであるが、確実に言えることは子どもからテレビゲームを取り上げること等は何の解決にはならないことを社会全体が認識することが重要なのではないだろうか。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思いますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

2018年8月8日
中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治